

平成23年度

大分大学

高等教育開発センター報告書

目 次

はじめに	1
I 高等教育開発センター事業概要	2
II 各部門活動・事業報告	
1. 新規授業・カリキュラム開発部門	3
2. メディア・IT活用部門	21
3. FD・授業評価部門	43
4. 大学開放推進部門・生涯学習支援システム部門	86
III 平成23年度学長裁量経費の事業報告	
1. 日本人学生による英語スピーチプロジェクト	114
2. 大分大学を拠点とした「教育の協働」推進ネットワーク構築事業	117
IV 付録	
1. センター関係諸規則（投稿規程を含む）	121
2. 高等教育開発センター運営委員会名簿	127

はじめに

大分大学高等教育開発センター長
山下 茂

平素からの大分大学高等教育開発センターの活動にご支援，ご協力いただき厚くお礼を申し上げます。本センターが統合され，高等教育部門と生涯学習部門が相互に連携・協力しながら，大学教育充実のための支援事業や地域貢献活動等をするようになって4年が経過しました。この間，第1期中期計画の仕上げと第2期中期計画の実践の基盤づくりをおこない，当初の計画に沿った成果を収めることもできました。

センターの活動といたしましては，各部門の業務の継続のほか，第2期中期計画の実践や特別研究経費の実践などの取り組みが本来業務として加わり，充実してきております。これらに加えて平成23年度の活動では，連携GP「戦略的大学連携支援事業」が終了して自主的な継続事業としての実施が求められており，本センターが共同授業の運営，地域貢献事業運営の実施担当となりました。これはかなりの負担となりましたが，今後の活動に役立つことも多くありました。また，全学教育機構が概算要求した「動機づけと形成的評価を重視した学士課程教育開発」の2年目でもあり，この取り組みも，高等教育開発センターとしての本来業務にも関わるもので，一定の成果を上げました。さらに，教育の協働社会の形成に向けたネットワーク作りのため，本センターが中心となって「大分県『協育』ネットワーク協議会」を設立するなど，第2期中期計画を着実に実践してきました。

本報告書では，こうした本センターの事業について，センター内に設置している部門報告として，以下の4つの部門にまとめています。

- 新規授業・カリキュラム開発部門
- メディア・IT活用部門
- FD・授業評価部門
- 大学開放推進部門及び生涯学習支援システム部門

本センター事業の取組みの円滑な推進は，学内教職員のご協力とご支援，ならびに学外の関係者に負うものといえます。年次報告書の刊行にあたり，この場を借りて感謝を申し上げますとともに，今後の本センターの充実・発展のために忌憚のないご批判・ご意見をいただければ幸いに存じます。

平成24年 4月

I 高等教育開発センター事業概要

高等教育開発センターは「学内外の関係機関との連携の下に、高等教育及び生涯学習に関する調査・研究及び教育事業を積極的に推進し、もって大分大学における教育及び地域社会の発展に寄与すること」を目的として設置されています。こうした目的を達成するための事業の平成 23 年度の成果について、部門ごとに列挙すると以下ようになります。

1. 新規授業・カリキュラム開発部門

- ・全学教育機構における教養科目カリキュラム策定作業への参加
- ・平成 23 年度特別教育研究経費にもとづく事業の実施
- ・高等教育協議会が設置している「とよのまなび」コンソーシアムへの支援と参加
- ・「きっちよむフォーラム 2011「学生教職員共同教育改善シンポジウム」
- ・日本人学生による英語スピーチコンテスト
- ・大分大学における学位授与方針の策定作業

2. メディア・IT 活用部門

- ・グローバルキャンパスの運営
- ・遠隔授業の支援
- ・大学連携授業におけるオンデマンド型授業の支援
- ・WebClass ポートフォリオ・コンテナの活用支援と普及
- ・ICT 活用通信（仮称）の発行
- ・教育支援機器の活用援助
- ・学生スタッフの育成

3. FD・授業評価部門

- ・大学院 FD 講演会の実施
- ・大学院学部合同 FD 講演会の実施
- ・学内合同研修会「きっちよむフォーラム 2011」の実施
- ・ポートフォリオ研究会の支援
- ・学生による授業改善のためのアンケート調査
- ・日本人学生による英語スピーチコンテストの実施

4. 大学開放推進部門

- ・公開講座・公開授業の実施
- ・社会人学生に対する学習支援
- ・社会教育関係職員等に対する研修（自治体等との連携による）
- ・大学開放に関する調査・研究の実施

5. 生涯学習支援システム部門

- ・自治体や諸団体への支援
- ・自治体や諸団体との共同・連携事業の実施
- ・地域指導者育成のための社会人や学生の学習の場の提供
- ・教育の協働に関するネットワークの取り組み
- ・地域社会システムに関する調査研究

Ⅱ 各部門活動・事業報告

1. 新規授業・カリキュラム開発部門

本部門は旧高等教育開発センターの高等教育開発部門を継承し、全学教育機構の設置に対応して、全学的な教育課題に関する企画・調整業務を担当する部門であり、以下の事業を行った。

【平成 23 年度の主な取り組み】

(1) 主な事業

- ①全学教育機構における教養科目カリキュラム策定作業への参加
- ②平成 23 年度特別教育研究経費にもとづく事業の実施
- ③高等教育協議会が設置している「とよのまなびコンソーシアム」への支援と参加
- ④センター教員の教養科目等の担当
- ⑤きっちよむフォーラム 2011「学生教職員共同教育改善シンポジウム」
- ⑥日本人学生による英語スピーチコンテスト
- ⑦大分大学における学位授与方針の策定作業
- ⑧センター業務に関わる研修報告（協議会，学会，研究会等への参加）

【平成 23 年度の事業内容】

(1) 全学教育機構における教養科目カリキュラム策定作業への参加

全学教育機構運営会議にセンターから 2 名（センター長，次長）が参加して、教養科目の検討を中心に本学の学務事項を審議している。特に教養科目カリキュラムについての検討組織である全学教育機構主題科目専門部会にもセンター長，次長，専任教員 1 名の 3 名が入っており、平成 24 年度の教養教育科目の作成作業に貢献した。

(2) 平成 23 年度特別教育研究経費にもとづく事業の実施

昨年度より、全学教育機構と本センターで取り組んでいる特別教育研究経費「動機づけと形成的評価を重視した学士課程教育開発－学生のふり返りと見通しを促すシステムの開発－」の事業を展開している。これは、文部科学省が実施した平成 22 年度特別経費(プロジェクト分)の「幅広い職業人の養成や教養教育機能の充実」に申請したものである。

事業概要を要約すると、社会性を涵養し、自発的な学習態度を育む教育技法を拡大させ、学生の自主的な学習集団造りによって、着実に成果を積み上げていけるような学生を育成することを目指した取り組みである。

- ・学生参画型授業，課題探求型学習の推進
 - ・多様な教授法に対応したより適正な評価と，学生自身による学習成果の確認
 - ・スタディポッド等の整備を通じて，学生相互に交流させ，学習コミュニティの形成
 - ・多様なメディアを併用して，主体的な自主学習をより充実
 - ・ポートフォリオシステムを活用する授業成果・学習成果の蓄積により学生の学習プロセスのふり返りを促して，教養から専門への学習の取り組みを見通す
- 以下にこれらに関する今年度の実施報告を記載する。

＜今年度の実施内容＞

今年度も以下の4つの柱を推進した。

1) 多角的評価方法の形成

多角的評価方法の形成を図るための事業として，昨年度から導入してきている形成的な評価のためのポートフォリオシステムを修正・改善してきた。これらも実績としては，2)の授業実践で取り組まれた。また，前年度導入したクリッカーの活用において，簡便に学生個々人の授業反応を収集できるシステムも導入し，形成的な評価の支援に利用された。

2) 新たな教授法・内容の普及拡大

この取り組みにおいては，ポートフォリオシステム活用授業の推進を進めており，今年度センターで対応した授業は，前期に「科学技術コミュニケーション入門」，「大分大学を探ろう」，「生涯学習論入門」，「基礎演習Ⅰ」，後期は，「科学技術コミュニケーションのデザインと実践」，「プロジェクト型学習入門」の6科目で実施した。この形成的な評価のためのポートフォリオシステムを普及させていくためにポートフォリオ研究会を昨年度から立ち上げ，月例化をめざし今年度10回の研修会が実施できた。また全学FD研修（きっちよむフォーラム）でも，システム活用の普及をはかるため，第2部の教育課題・教育実践検討会において「ポートフォリオ・WebClassを活用した教育実践」を紹介，検討を行った。下記に今年度の研究会開催記録をあげておく。

2011年度ポートフォリオ研究会

第1回 平成23年6月9日17時～ 教養教育27号教室

テーマ：全学共通科目「大分大学を探ろう」実践報告

報告者：市原 宏一（経済学部），岡田 正彦，末本 哲雄（高等教育開発センター）

第2回 平成23年7月7日17時半～ 教養教育27号教室

テーマ：教養教育での授業実践報告

報告者：西村 善博（経済学部）

第3回 平成23年7月21日・17時半～教養教育27号教室

テーマ：SNSを活用したゼミ指導

報告者：藤村 賢訓（経済学部）

第4回 平成23年9月15日15時～ 教養教育28号教室

テーマ：基礎演習でのシステム導入

報告者：柿原 武史（経済学部）

第5回 平成23年12月7日13時10分～ 教養教育14号教室

ぎゅちゅむフォーラム「第2部教育課題・教育実践検討会」

テーマ：ポートフォリオ・WebClass を活用した教育実践

ポートフォリオ研究会中間報告

第6回 平成24年1月19日17時30分～ 高等教育開発センター会議室

テーマ：ポートフォリオ・システムさらなる拡張にむけて

報告者：山下 茂，末本 哲雄（高等教育開発センター），市原 宏一（経済学部）

第7回 平成24年3月2日13:00～ 教養教育棟26号教室

テーマ：iPad を用いた協働学習支援システムのデモ体験・講習会

講師：小森 卓彦，河内 崇（SCSK 株式会社）

第8回 平成24年3月8日13:00～ 教養教育棟14号教室

平成23年度 学内教育改革関連プロジェクト報告会

テーマ：「動機づけと形成的評価を重視した学士課程教育開発 ―学生のふり返りと見通しを促すシステムの開発―」

報告者：末本 哲雄（高等教育開発センター）

第9回 平成24年3月22日16時30分～ 教養教育棟27号教室

テーマ：「eポートフォリオを用いた授業改善

～マルチメディア処理演習における自己評価・相互評価の導入～」

報告者：行天 啓二（工学部）

第10回 平成24年3月30日15時30分～ 教養教育棟27号教室

テーマ：他大学におけるポートフォリオ活用事例の紹介

報告者：山下 茂（高等教育開発センター長）

3) 新たな教授法導入のための環境整備

昨年度より、双方向、グループ、課題探求型授業等で活用できる機器などを充実してきた。その結果、1)でも述べたクリッカーを活用した授業も多く実施された。前期17件であったが、後期には52件の利用実績が上がっている。今年の改善として、簡便に学生個々人の授業反応を収集できるシステムも導入し、形成的な評価の支援に利用された。学生の学修期間中の変容を追いかけることができ、成績評価の際の参考になっている。

今年はまだ1件、新たな授業支援が可能な「iPadを用いた協働学習支援システム」を導入した。これは、講義中の学生に直接的で相互的な働きかけを増やし主体的な学習を促すため、

(1) ファイル共有機能 (2) クイズ機能 (3) ホワイトボード機能

などを持ち、学生へのデジタル教材の配布や、学生同士のファイル共有、画面を共有して双方向授業やクイズで理解度をフィードバックができるなど、様々な機能が搭載されている。双方向・グループ学習で活用が期待されるので、活用への周知を進めていくことにしている。

また今年度の重点項目でもある環境整備には、グループ学習形式をとる学生参画型授業や体験活動を組み込んだ授業をより効果的に実施できる教室・設備環境（スタディポッド）の整備と、授業などの際に使用する学習支援備品等を揃えた。

・スタディポッドの整備・・・23カ所の整備

教養教育棟 5カ所，経済学部 10カ所，教育福祉科学部 4カ所，工学部 3カ所，医学部 1カ所



各学部での取り組みの概要

教育福祉科学部では，グループ学習等で利用しやすい机・椅子等の什器の整備の他，ラウンジ等においてグループ討論等を手軽に利用してもらうために，ディスカッションボード（写真参照）などを数多くの場所に配置した。

経済学部では多くのフロアの空間に無線 LAN を設置し，どこでもネットを活用した授業やちょっとした自学などが可能なように，多様な学習を確保しやすい環境を整備した。

工学部では 1 階にある自習室を，仕切を設け自習しやすいコーナーや，大型ディスプレイ，パーテーションも設置してグループ学習できるコーナー等を設けた。特にバリアフリー仕様にすることで，車いすでの利用も考えて使いやすく改修した。教室も，多様な授業形態が可能なように改修した。

教養教育棟においては昨年度整備した教室においてはグループ学習で使うための大きめのディスカッションボードを導入し，授業で利用し始めた（写真参照）。



医学部や学生会館においても，授業外学習に学生が自学をしたりグループ作業が行えるような施設整備を行った。さらに，今年度は，長く懸案であった図書館の改修が実施され，学習環境の整備が 1 つの重点として進められている。その 1 つにラーニングコモン施設の設備・運用がある。これらについては，センターから財政的な面も含め，いろいろなアドバイスや支援を行っている。

4) 学生の主体的な学習を目指した取り組み

この事業においては，個別授業における教育評価方法の改善と，こうした授業を支援する T A ・ S A の育成による学習集団の形成を進めてきた。同時に，学生が主体となる学生参画型などの授業に効果的に実施できる教育設備環境の整備を進め，ポートフォリオ・システムを活用する授業において，学習コミュニティの形成・展開を進めている。

これらの実績としては，教養教育を牽引する教員集団として，2) でも示した高等教育開発センターのもとに「ポートフォリオ研究会」を組織し，同研究会に所属する学部を超えた教員により，これらシステムと T A ・ S A を活用した授業，「プロジェクト型学習入門」等を開講している。

この特別教育研究経費にもとづく「動機づけと形成的評価を重視した学士課程教育開発」事業は，他にメディア教育部門，FD・授業評価部門と共にセンターの中心的な取り組みとして実施している。個々の担当した今年度の事業の詳細については，それぞれの部門の報告を参照されたい。

(3) GP 等への支援と参加

本年も、大学教育推進プログラム GP として継続している「水辺の地域体験活動による初年時教育への展開」への支援を実施した。さらに、昨年度まで文部科学省の「大学教育充実のための戦略的・学的連携支援プログラム」として平成 20 年度より実施してきた、「地域連携研究、国際教育・留学生支援、教育連携を柱とする地方における高度人材養成拠点の構築」事業における教育連携による取り組みが、新たな組織のもとで今年度より継続されることとなり、この活動を担った。

この新たな組織は、大分県内の高等教育機関 8 大学等による「学と学による知の総合交流拠点」としての「大分高等教育協議会」である。会員校は、大分県立芸術文化短期大学、大分工業高等専門学校、日本文理大学、別府大学／別府大学短期大学部、別府溝部学園短期大学、放送大学大分学習センター、立命館アジア太平洋大学、大分大学で構成されている。この協議会のもと、平成 19 年度に設立されている「地域連携研究コンソーシアム大分」と、昨年度末に設立された教育連携を推し進めることを目的とした「とよのまなびコンソーシアムおおいた」で構成されている。当センターが担ったのは、「とよのまなびコンソーシアムおおいた」での事業である。昨年度、教育担当理事のもとセンターが中心的な実施母体となって連携校と共同で実施した、「大学等連携共同授業プログラム」と「大分地域大学等連携講座」が、共通教育事業、生涯学習支援事業として、継続されている。

これらの事業は、各大学からの委員による運営委員会方式で運用することになっている。そして、その下に各分科会が設置され、それぞれの事業の具体的な作業等を対応してきている。共通教育事業で実施した共同授業のプログラムでは、今年度教養科目を後期 1 科目開設した。実施形態は、講義の実施を大分大学で行い、その映像を連携大学に配信する形をとり、昨年度とほぼ同じ運用を行うこととした。前年度の周到な準備のもと実施されたプログラムなので、順調に成果を出したといえよう。今年度の実施概要を以下に記載しておく。

講義科目 「大分の人と学問」

授業実施曜日：後期 水曜日 3 時間目

講義科目：「大分の人と学問」

受講形態：大分大学生・・・教養教育棟 35 号教室での対面授業
他大学生・・・VOD による e ラーニング

授業の具体的な到達目標

- ① 講義を通して、いろいろな学問分野を学び、理解を深めること。
- ② レポート提出を通して、自分自身の考えを説得的論理的に展開できるようになること。

評価：毎週ごとのミニツツペーパーの提出

学期全体を通して 1 回の課題レポート（1200 字程度）の提出

（e ラーニングでは、それぞれ LMS（Moodle）への投稿）

大分大学で上記の成果物を評価（5 点評価法）し、これを連携大学に伝えた。

「大分の人と学問」講義スケジュール

10月5日	山崎清男	大分大学 理事(教育担当)・副学長	ガイダンス
	島田達生	放送大学大分学習 センター	今よみがえる田原淳の業績 －ノーベル賞を超える大偉業－
10月12日	牧田正裕	立命館アジア太平洋 大学	温泉地再生と着地型ツーリズム －別府での取組み－
10月19日	牧田正裕	立命館アジア太平洋 大学	文化と創造性のまちづくり －現状と課題－
10月26日	浅野則子	別府大学	古典文学からみた大分
11月02日	立松洋子	別府大学短期大学部	大分の『食』の現状と食育
11月09日	小川伊作	大分県立芸術文化 短期大学	宗麟時代の南蛮音楽
11月16日	松本康史	大分県立芸術文化 短期大学	デザイン方法論
11月23日	望月 聡	大分大学	『関あじ・関さば』を科学する
12月07日	高見 徹	大分工業高等専門学校	水環境の計測と評価
12月14日	山田繁伸	大分工業高等専門学校	おおいたの文学碑を歩く
12月21日	島岡成治	日本文理大学	大分近世城下町の成立とその後 ～大分のまちの起源を探る～
01月11日	杉浦嘉雄	日本文理大学	“おおいた”の夢創造型の地域づ くり～大分からトキを再び日本の大空 へ!～
01月18日	渡辺文雄	別府大学	石工と講衆－大分の中世石造文化を 支えた人々－
01月25日	溝部 仁	別府溝部学園短期大学	大分県の中の朝鮮半島
02月01日	千田 昇	大分大学	南海トラフの地震について

今年度の履修状況については、

	対面講義 大分大学	VOD 連携大学等
登録者数	88名 (77名)	23名 (58名)
単位取得者数	76名 (56名)	14名 (44名)
修了率	86% (73%)	60% (76%)

()内は昨年度後期共同授業「大分を探ろう」の数

となっている。連携校の参加者が少ない傾向にある。次年度に向けて検討を要するであろう。次年

度からは、これまで、実施してきた授業のビデオ映像を使用して、VOD による全て e ラーニング形式で実施する計画を分化会で検討している。

もうひとつの生涯学習支援事業で実施した「大分地域大学等連携講座」については、これも昨年度の実績のもと充実したプログラムが展開できた。詳細は、大学開放推進部門及び生涯学習支援システム部門の報告を参照されたい。

(4) センター教員の教養科目等の担当

これまでの専任教員が実施してきた科目の継続を実施できた。昨年度から専任教員として末本哲雄教員が加わり、新設科目「科学技術コミュニケーションのデザインと実践」を開設するなど、前期 6 科目、後期 6 科目の授業を提供できた。

【前期】

- ・生涯学習論入門
- ・学習ボランティア入門
- ・社会教育からみた「教育の協働」
- ・大分大学を探ろう
- ・生命観の変遷
- ・自然体験活動の理論と実践

【後期】

- ・キャリアデザイン入門
- ・成人教育方法入門
- ・プロジェクト型学習入門
- ・アカデミック・スキル入門－社会教育計画を題材に－
- ・科学技術コミュニケーションのデザインと実践
- ・カラダの見方・考え方

(5) 「きっちよむフォーラム 2011」及び「学生教職員共同教育改善シンポジウム」

このフォーラムは、FD・授業評価部門の事業であるが、授業やカリキュラムの検討の場でもあり、本部門も関連している。今年度のプログラムは下記のとおりで実施した。

日時：平成 23 年 12 月 7 日（水）13 時 10 分～16 時 20 分

場所：教養教育 14 号教室（旦野原）

○第 1 部 学生教職員教育改善研修会

実践報告 1：Ustream と Facebook(SNS)を活用した授業の支援から

実践報告 2：学生が主体となって地域貢献・交流を行う体験組込型教育実践「田舎で輝き隊！」

○第 2 部 教育課題・教育実践検討会

・ポートフォリオ・WebClass を活用した教育実践

・ポートフォリオ研究会中間報告

詳しい報告は、FD・授業評価部門に掲載している。

(6) 日本人学生による英語スピーチコンテスト

本コンテストについては、中期計画「外国語を含むコミュニケーション能力の向上を図る教育を充実させる。特に、英語については、『仕事で英語が使える』人材の育成を目指して教科内容等の改善を図る」への取り組みとして実施している事業である。今年度は参加しやすい日程として、開学祭期間中に行われる大学開放イベントの11月6日(日)に開催をした。日程の設定が良かったと思われ、多くの留学生も参加され、活発な雰囲気を実施できた。終わりの表彰式には学長も参加していただき、直接賞状等を手渡していただいた。

このコンテストを本センターが今後も担っていくことについては、新規事業を立ち上げるという役目が済んだ段階であり、検討を要すると思われる。今年度、全学教育機構の運営会議で議長の理事に、機構の外国語部門等の関係組織を交えて検討していくことを依頼した。

本年度の実施の詳細は、FD・授業評価部門の報告を参照されたい。

(7) 大分大学における学位授与方針の策定に向けた作業について

現在、大学における教育の質の保証が大変重要視されており、大分大学が送り出す学生の質、どの様に保証しているか、社会(ステークホルダー)に向かって説明できることが必要とされていることから、その学位授与の方針を策定することが必要となった。

これは、平成20年中央教育審議会での「学士課程教育の構築に向けて」(答申)で各大学に、学士課程教育の三つの方針をそれぞれ明確化するよう求めている。

- ・ 学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー: DP)
- ・ 教育課程の内容・方法の方針(カリキュラム・ポリシー: CP)
- ・ 入学者受入れの方針(アドミッション・ポリシー: AP)

また、H22年の学校教育法施行規則、大学設置基準の改正で、社会に対する説明責任を果たすとともに、その教育の質を向上させる観点から、公表すべき情報が法令化された。この中で、大学は、卒業に当たっての学位授与の方針を具体化・明確化し、アカウントビリティの観点から、少なくとも学部のDPを公開することが必要となっている。今後の認証評価では、このことについての評価がなされることになった。

本学では、はじめに大学のDPの検討からはじめることとなった。そのため、年度初めの4月より、教務部門会議においてDPの検討作業を始めた。教務部門会議の検討作業では、センターの専任教員(末本教員)が臨時のメンバーとして参加し、中心的な活動を行った。アウトラインができるまで毎週のように部門会議を開催し、特に教育担当理事を中心にしたワーキング(センター長、センター教員)では、精力的な策定作業を担った。教授会でも何度か検討を行って全学の意向を確かめながら進めてきた。10月に理事が交代したが、11月には暫定案として大学のDPをまとめ、各学部での策定作業を年度内に行い、各学部の案ができてから全学の案との調整を図ることで進められた。

暫定案を掲載しておく(最終的な方針については、24年度になってから決定することになっている)。

大分大学 学位授与の方針（案）

大分大学では、教育の目標として「広い視野と深い教養を備え、豊かな人間性と高い倫理観を有する人材」、「ゆるぎない基礎学力と高度の専門知識を修得し、創造性と応用力に富んだ人材」、「高い学習意欲をもち、たゆまぬ探求心と総合的な判断力を身につけ、広く世界で活躍できる人材」の育成を掲げています。この教育目標を踏まえ、本学では学士課程を通じて以下の資質や能力を修得した学生に学位を授与します。

A. 基本的技能

- (1) 自らの思考や意見を明確に表現し、かつ、他者の意見の傾聴を通してコミュニケーションを行い、相互理解を円滑に図ることができる
- (2) 日本語と外国語を用いて読み、書き、会話することができる
- (3) 適切な方法やルールに従って情報の収集・分析・評価・発信を行い、社会生活の多様な場面で情報やメディアを主体的に活用できる
- (4) 科学的思考と方法を用いて、合理的判断を下すことができる
- (5) 学ぶべき内容を把握し、その学習方法を選択しながら自立的に取り組むことができる

B. これからの時代に求められる教養

- (1) 人類の知的遺産に関心をもち、多様な文化・価値観を理解し、尊重できる
- (2) 生涯にわたって主体的に学習する意欲をもっている

C. 専門的な知識と技能

- (1) 専攻分野における基礎的な概念や知識・技能を修得している
- (2) 修得した専門分野の知識と技能を、自らのライフデザインに活かすことができる

D. 課題解決能力

- (1) 課題を発見し、その解決方法を見だし、総合的な判断を下すことができる
- (2) 直面する課題に主体的に対応し、その解決のために他者と協調・協働して行動できる

E. 社会との関わり

- (1) 社会のルールや規範に則り、良識にもとづいた行動ができる
- (2) 社会との関わりの中から、自己の責任と使命を認識することができる
- (3) 社会の持続的発展と人類福祉の向上を志向する意欲をもっている

なお、DP がめざす質保証をテーマとする講演会を、学内における意識の啓蒙とわれわれ策定作業を行う組織の研修の意味を含め、FD 部門で 2 テーマについて開催した。

①講演会題目：我々の授業は、学士を送り出すプログラムの 1 つです

－質の保証はどのように考えるのか？－

講師 佐藤浩章 准教授 愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 副室長

日付 2011 年 7 月 19 日（火）

- ・②FD講演会・ワークショップ題目：シラバスからはじめる授業改善
講師 山田剛史 准教授 愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室
日時 平成 24 年 1 月 18 日(水)
(且野原地区と挾間地区を遠隔ビデオ配信で実施した)
詳細については FD 部門を参照してください。

(8) センター業務に関わる研修報告(協議会, 学会, 研究会等への参加)

本年度の出張研修は「全国大学教育研究センター等協議会」(一橋大学, 東京), 「大学教育学会」(桜美林大学, 東京), 「日本高等教育医学会」(名城大学, 名古屋), 「大学教育研究フォーラム」(京都大学高等教育開発推進センター, 京都)などに出席した。質保証, 評価, ラーニングアウトカム, ポートフォリオ等の話題のテーマを扱っており, 大変有意義な発表等を聞くことができたので, プログラムといくつかの概要を掲載しておく。

①平成 23 年度 全国大学教育研究センター等協議会

本センターの全国組織でもある大学教育研究センター等協議会に参加した。この協議会は, 国立大学において取り組むべき課題の情報収集・情報交換の場であり, センターにとっては重要な位置づけにあるといえる。H23 年度のプログラムと, 取り上げられた発表, 意見交換を行う分科会の概要を載せておく。

◆日時・場所

2011 年 8 月 2 日, 3 日

一橋大学 国立・西キャンパス

◆プログラム

8 月 2 日

1. ご挨拶 : 山内 進 一橋大学学長
2. 幹事校ご挨拶 : 山本 眞一 広島大学高等教育研究開発センター長
3. 代表校による発表
香川大学 金沢大学 北海道大学 東北大学 東京大学
4. 分科会

8 月 3 日

1. 分科会の発表
2. 質疑応答, ディスカッション
3. 全体のまとめ : 岡山 隆之 東京農工大学大学教育センター長
4. 協議: 次年度開催校, 新規加入校承認, ほか

代表校による発表

香川大学 「教養学部構想」

香川大学は, 平成 7 年に一般教育部を改組し, 平成 14 年に共通教育部と調査研究部とからなる大学教育開発センターが共通教育の運営を担ってきた。平成 15 年には外国語教育部を追

加した。本学は、センターを通じて、これまで共通教育スタンダードの設定、共通教育の到達基準とカリキュラム・マップの作成、共通教育コーディネーター制の導入を行ってきたが、より抜本的な共通教育の充実を図るために、現在は教養学部設置を構想している。新学部においては、共通教育を担当する他、独自の専門分野を設けて、実践的教養の開発や副専攻制を導入する計画である。センターと新学部との役割分担については、今後、検討が行われる。

金沢大学 「学部教育改革支援」

金沢大学の教育開発、教育改善において、学域・学類（平成 20 年度より学部・学科から改組）、研究科といかに連携し、センターがいかなる役割を担うかについて平成 15 年 4 月のセンター設置以来、模索と実践を続けてきたが、第 2 期中期計画の策定にセンターが関わり、いくつかの提言を行うことができた。これに伴い、センターの重点活動事項を中期計画に沿って明確化した。本報告では、学類の DP 明確化、カリキュラムマップと成績評価との関連に関する FD 支援、協調学習設計に関する研究など、平成 22 年度における第 2 期中期計画に沿った重点活動の概要を述べる。

北海道大学 「アカデミック・サポートによる学習支援」

北海道大学では、今年度より「総合入試」制度が開始された。この制度で入学した学生にとっては、自らの専攻選択のために、入学後の主体的な学修がこれまでも増して重要となる。アカデミック・サポートセンター（ASC）は、そうした主体的学修に対する助言と支援を行うために設立された組織である。本報告では、ASC での修学・学習支援体制と、これまでの活動状況を紹介します。実際の担当者の視点で見た課題や今後の展開について考えたいと思う。

東北大学 「学生生活支援としての保健管理センター」

東北大学高等教育開発推進センターは、高大連携、入試開発、高等教育研究、全学教育の実施、キャリア支援、学生相談をその使命とし、入口から出口までの学生支援を行う総合的な活動を行っている。保健管理センターは、その 1 部門として重要な役割を果たしている。本来、人間の発達には、知的・道徳的・身体的要素を含み、全面的なものであるが、日本の教育学と教育実践では、明治以来スペンサー流の知育・徳育・体育に区分され、相互の関係が切り離されがちであった。保健管理センターの活動を紹介します。再考する機会としてみたい。

東京大学 「学生調査、大学評価、国際ランキングの動向研究」

東京大学・大学総合教育研究センターにおける調査・研究活動について、**Institutional Research (IR)**に焦点をあてて紹介する。まず、IR の定義そして IR を実践する組織のあり方を検討した後、大学改革基礎調査部門が行う①高等教育改革動向・教育政策分析、②大学評価・ベンチマーキング・ランキングの研究、③大学財政研究、④学生調査について紹介する。最後に、IR のあり方について、大学の戦略的計画策定・実践並びに大学のベンチマーキングと絡めながら、さらに掘り下げて検討する。

分科会

第 1 分科会「共通教育運営型」

現在、多くの大学教育センターが共通教育の運営を担っていますが、予算の削減・担当者不足・教員の研究志向は、従来型の共通教育の維持を難しくしている。香川大学のように、新学部の設置によって、共通教育に新機軸を打ち出すことも考えられるが、多くの大学では、カリキュラムにメリハリを付けることによって、開講科目数のスリム化を実現しているのが現状である。

第2分科会「学部を含む全学包括運営型」

全学の学士課程教育の包括的な運営（支援）に携わるセンターの活動内容と、今後の課題を議論していただく分科会です。例えば、ディプロマ・ポリシーの策定など、学部（専門）教育の改革・改善の支援に関与する際、センターとしてどのような役割を果たしうるのかを協議した。

第3分科会「学習・教授法支援（FD）型」

学習支援、教授法支援に携わるセンターの活動内容について議論していただく分科会で、大学教育の実質化が求められている中で、学生の学習の質を保証（保障）するために、どのような取り組みができるのかを、TA研修や新任教員研修について協議した。

第4分科会「学生支援型」

学生支援を担うセンターの活動内容について、学生支援そのものに加えて、学生支援と正課、正課外の教育を制度として、内容として「切り結ぶ」あり方について協議した。

第5分科会「高等教育研究拠点、IR（評価・分析）型」

高等教育研究の中でも、大学教育研究センター等が行うIR活動について、IRを企画・実践するための技術的・組織的インフラ、IRを発展的に展開する上で必要とされる技能、大学組織におけるIRの位置づけなどについて協議した。

②大学教育学会第33回大会

日時：平成23年6月4日（土）～6月5日（日）

開催地：桜美林大学 多摩アカデミーヒルズ4日（土）

町田キャンパス5日（日）

総合テーマ：「大学教育の質とは何か—ふたたび大学のレゾナントルを問う—」

プログラム

第1日 6月4日（土）

9:40～12:10 シンポジウムⅠ（150分）

「現代における生涯発達と大学教育」

14:20～15:20 基調講演

演題「何のため、誰のための質保証」

講師 佐藤 東洋士（桜美林大学長）

15:30～18:00 シンポジウムⅡ（150分）

「大学教育における質保証の実践的展開とその意味」

第2日 6月5日（日）町田キャンパス

9:00～12:00 ラウンドテーブル

13:10～16:40 自由研究発表

今回参加した目的であるキーワードは、

- ・大学教育における質保証，ディプロマ・ポリシー，学位プログラム
- ・大学教員職能，FD，高等教育開発

である。以下にいくつかの会場の要点を記載する。

○シンポジウムⅠ

「現代における生涯発達と大学教育」

- | | | |
|----|----------------------|----------------|
| 報告 | ・生涯発達と大学教育 | 足立 寛（立教大学） |
| | ・キャリア形成とライフサイクル | 山崎 洋子（武庫川女子大学） |
| | ・大学教育のジェネリックスキルと教育方法 | 筒井 洋一（京都精華大学） |

足立氏による立教大学セカンドステージ大学の取り組みは、大学の多様な「学生」としての受け入れを試みたものとしてユニークに感じた。ユニバーサルアクセス時代における新たな「学生」としての顧客層開拓としての試みと話されていた。60代以上の年代の方々は、進学率が15%以下の時代で多くの方が高等教育を受けられる時代ではなかったという視点でみると、当分の間顧客層として位置づけられるのだと思った。これから少子化の時代になっていくときの、大学のあり方を検討するにはいろいろな観点が必要であろう。

このシンポで参考になったのは、1993年、日本の国立大学ではじめて言語表現科目を作った筒井氏の報告であった。現在、新しい学びの芽として、・授業の準備－実施－検証を学生も参加、・グループワーク、・授業のSNS、・他大学生が出席する（?）、というような現象が起きているという話から始まった。

本論では、90年代あたりから学力低下、レポート、文章がかけないことから始まった日本語表現法科目の拡大と、これからについての話であった。はじまりである木下是雄氏の『理科系の作文技術』から始まり、1993・・・富山大学において日本の国公立大学で初めて筒井により「言語表現科目」が設置、1998・・・日本語技法 高知大学で全学必修、2010・・・85%の大学で実施、この拡大の理由と、今後の展望について論じられた。この科目の特徴として、日本語表現の専門家でない教員が担当してきたことがあげられていた。しかしこれからは、専門家による系統的な教育、学生・社会人が教師に、ラーニングコミュニティ、といった仕掛けが必要になってくると報告された。

- ※ ジェネリック・スキルは「転移可能スキル Transferable Skills」とも呼ばれ、創造性、柔軟性、自立性、チームワーク力、コミュニケーション力、批判的思考力、時間管理、リーダーシップ、計画性、自己管理能力など、特定の文脈を越えて、さまざまな状況のもとでも適用できる高次のスキルのことである。（神戸大学の川嶋教授の論考）

○シンポジウムⅡ

「大学教育における質保証の実践的展開とその意味」

- | | | |
|----|--------------------------------|-------------|
| 報告 | ・3つのポリシーの策定と一貫性構築によるカリキュラムの質保証 | 佐藤 浩章（愛媛大学） |
| | ・GPA 制度本格導入と成績評価を考える | 筒井 泉雄（一橋大学） |
| | ・学生調査の開発とマルチレベルFDとの連動による教育の質保証 | 山田 剛史（愛媛大学） |

佐藤氏の報告：3つのポリシー（カリキュラム・ポリシー：CP，アドミッション・ポリシー：AP）は、今求められている大学の Accountability である（中教審答申 2008，学校教育法施行規則第 172 条の 2 での教育情報において）。第 172 条の 2 関連は、いわゆる教育情報の公開であり、DP は学部において策定の義務がある。その策定についての考え方・構築のやり方を、愛媛大学での事例をもとに報告された。

第 1 ステップとして、大学の養成する目指すべき人材像を確立することである。そして、その育成の指針に必要な教育成果の最低基準を DP として定めていく手順を説明されていた。その作成に当たっては、DP を 5 領域に設定することを全学の方針として合意してもらっている。具体的には、他大学の先行事例を参考に、各学部・学科等の卒業時の到達目標を「知識・理解」「思考・判断」「興味・関心」「技能・表現」「態度」の 5 領域に整理して文言化するように求めている。

この作業において、愛媛大学で制定がうまく運んだ要因のひとつに、組織体制作りが重要であると話されていた。この組織で中心的な役割を果たしているのが、教育コーディネーターというメンバーである。学部からの推薦で学長の任命により選出され、学部・学科の教育責任者となり、学部・学科の方針の策定と全学の方針のすり合わせを行うキーパーソンである。各学部から、学科、教育コース毎に最低 1 名を選出している。ユニークな体制であると思われる。

この後、3つのポリシーは、DP から AP を、AP に基づき CP を DP に到達できるように策定していく手順で行っていくと、質の保証を見える形にできることを報告されていた。

筒井氏の報告：一橋大学において、GPA を卒業要件に制定し、実施を始めてから浮かび上がってきた課題などを報告された。GPA の卒業基準を 1.8 からはじめ、2.0 に上げていくとしている。この基準を達成させるために履修撤回や上書き履修を認めることにした。この課題のほか重要になってきたのは、低 GPA 学生への支援体制づくりであると報告された。多様な学生が増えてくることを考えると、大学としてこの体制づくりの取り組みは、かなり大変になってくると思われる。質問として、なぜ一橋が導入したのか、自分にとって必要な科目は頑張るが、単位を揃えるだけの科目は可でよく、優秀な学生でも GPA は低くなる、これではだめなのか。

山田氏の報告：当日のアジェンダのみを記載する。 1. 問題背景 2. 教育の質保証文脈における学生調査（アセスメント）の位置づけ 3. 学生調査（アセスメント）を活かすための FD の位置づけ 4. 島根大学教育開発センターにおける学生調査の開発・総合化と FD との連動 5. この間で得られた実践的課題

〇ラウンドテーブル

大学におけるカリキュラムの設計と実施(カリキュラム・マネジメント)—大学人の協働可能性—

大学業務には教員に重要でしかも教員だけではその目的達成が難しい仕事がある。それはカリキュラムの設計、構成、実施の仕事である。特に教養教育や資格課程教育などのいわゆるカリキュラム・マネジメントである。それには施設・学生数などの諸条件や、学生や社会の要望などを考慮する必要がある。そこでは、カリキュラムの本来的計画・作成に関わることやその実現そのための学問的専門領域外の諸条件への配慮など、大学人全体として基本的認識を共有することが不可欠である。カリキュラム・マネジメントと協働の関係を考える。〈趣旨から要約〉

以下の 3 つの報告があった。

- ・「学士課程のカリキュラム設計における教職協働」池田輝政氏（名城大学）
- ・「大学におけるインストラクショナル・デザイン(ID)」赤堀侃司氏（白鷗大学教授）
- ・「大学におけるカリキュラム・マネジメントのプロセス」秦敬治氏（愛媛大学准教授）

池田氏の報告

池田氏が所属する大学の教養教育については、全学共通教育体制と呼ばれたそのプログラムが、8学部すべての教員が授業担当者として参加することを前提にし、学部から選ばれた教員と学部には所属しない事務職員からなる教務運営体制によって担われていた。そして、大学の取り組む課題として、法学部改組と「全学共通教育」の改善・充実という課題が存在して折に、「専門を重視したリベラルアーツ系学部」の教養系学部コンセプトで「新学部」設置の取り組みをされた経緯を報告された。興味深い話であった。

「新学部等開設準備室」は教養系学部コンセプトの具体化を進め、準備室スタッフの協議を経て「科学コミュニケーション学部(仮称)」と命名する新学部のカリキュラム設計(デザイン)を行った。このカリキュラム設計では、名大の『ティップス先生のカリキュラムデザイン』の開発でも基にした R. Diamond (1998)のカリキュラムデザイン法により、全体設計とコース設計を行っている。

検討すべき内部要件は基本設計に、外部要件は実施設計にまとめ上げている。基本設計での話では、1学部のコンセプトについて、教育では人材像を、学習では入学者像の議論と形成、2教育課程の設計では、教育と学習から見た科目の範囲と配列について検討し、学部構成を作り上げていた。

新学部の構想は紆余曲折を経て、文科省までやり取りはあったものの、最後で学内の協議会で結果的には設置までには至らなかったという。しかし、議論され具体化までされた「科学教養教育」のカリキュラム案は、参考になる点が多いと感じた。

○自由研究

学士課程教育(2)部会

- ・「佐賀大学学士力とチューター制度を利用したラーニング・ポートフォリオシステムの開発」
皆本 晃弥, 藤井 俊子, 山内 一祥, 日永田 泰啓, 滝澤 登(佐賀大学)

<発表要旨>

佐賀大学中長期ビジョンを具体化し、学士課程教育を構築するための全学的な方針として、平成22年2月に佐賀大学学士力を制定している。この策定においては、項目・内容・水準を定める際には各学部の意見が反映されている。中長期ビジョンをもとに、佐賀大学が自ら策定したもので、大項目として「基礎的な知識と技能」、「課題発見・解決能力」、「個人と社会の持続的発展を支える力」を掲げている。また、学部・学科・課程によらず佐賀大学の卒業生全員が最低限身につけるべき能力を定めている。

学生が常に佐賀大学学士力の達成状況を把握できるラーニング・ポートフォリオシステムを開発し、H23年度から全学的に導入している。このシステムは、Webベースで行っているが、チューター制度(担任制度)を併用するという点が特徴的である。学士力を達成するために各学科・課程では科目と学士力の対応を示したカリキュラムマップを作成し、学生は次で述べる「ポートフォリオ学習統合支援システム」で達成状況を確認できるようになっている<図参照>。

基礎的な知識と技能	課題発見・解決能力	個人と社会の持続的発展を支える力	学士力毎集計
-----------	-----------	------------------	--------

学士力小項目 (1) 文化と自然

世界を認識するための幅広い知識を有機的に関連づけて修得し、文化(芸術及びスポーツを含む)

的素養を身につけている。〈図〉

科目分類	科目名	年学期	GP	取得 単位	要件単 位数	達成率	GPA
主題科目	日本古典文学論	2009 前	4	2	7	71%	2.45
	古代ヨーロッパ社会論	2009 前	3	2			
	現代の経営	2009 後	0	2			
健康スポーツ科目	スポーツ演習	2009 前	2	1			

早くから全学で取り組んでおり、よくできていると感心した。しかし、質疑では、各項目を達成したかどうかを単位数で評価していいのか、また高い倫理観などの達成をどのようにして評価するのか難しいのではないかと、という指摘がなされていた。学位を授与する基準とその達成度を評価することの難しさを学んだ。

③高等教育質保証学会 第一回大会

独立行政法人 大学評価・学位授与機構長、財団法人 大学基準協会会長、財団法人 日本高等教育評価機構理事長等が発起人となって設立された高等教育質保証学会に参加した。「効果的な内部質保証の実現にむけて」等の現在高等教育機関が取り組んでいく課題がテーマとして取り上げられておいた。大学評価機関の代表も集まって討論される学会だけに、有益な出張研修となった。

日時：10月27日(木) 28日(金)

会場：東京大学駒場キャンパス数理科学研究棟

プログラム

10月27日(木)

10:30-12:00 基調講演

OECD Head of CERi (Centre for Educational Research and Innovation) Dr. Dirk Van Damme

14:20-16:20 [セッション1：先端的研究]

14:20-15:00 先端的研究発表(パラレルセッション)

<セッション A>: [分野別参照基準の考え方—日本学術会議の作業にかかわって]

日本大学 文理学部 教授 広田照幸

<セッション B>: [高等教育開発の理念と方法]

国立教育政策研究所 高等教育研究部 研究総括官 川島啓二

15:00-15:10 ファシリテーター概説

15:10-15:50 ラウンドテーブルディスカッション

15:50-16:20 各テーブル発表

発表者コメント

10月28日(金)

9:00-12:00 [セッション2: 三評価機関(大学基準協会・大学評価・学位授与機構・日本高等教育評価機構)セッション]

9:00-10:00 [効果的な内部質保証の実現に向けて]

三評価機関による提案

- ・ 大学基準協会 大学評価・研究部 部長 工藤潤
- ・ 大学評価・学位授与機構 理事 岡本和夫
- ・ 日本高等教育評価機構 評価事業部長 伊藤敏弘

10:35-10:55 ラウンドテーブルディスカッション

10:55-11:15 各テーブル発表

11:15-11:30 まとめ

13:10-15:40 [セッション3: 事例研究]:

13:15-14:05 事例発表(合同)

[教育の質保証に関する実践的展開と課題 - 島根大学と愛媛大学における実践事例の比較から]

- ・ 愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 准教授 山田剛史

[評価・計画・予算の連携による教学マネジメントシステム「改善アクションプラン」とIR]

- ・ 明治大学 教学企画部 教学企画事務室副参事 山本幸一

14:05-14:10 ファシリテーター概説

14:10-15:40 ラウンドテーブルディスカッション

15:40 終了のあいさつ

④第18回「大学教育研究フォーラム」

日程 2012年(平成24年)3月15日(木)～16日(金)

会場 京都大学吉田キャンパス

京都大学高等教育開発推進センター主催

プログラム

3月15日(木)

個人研究発表(1) 9:00～10:45

全体討論 10:20～10:45

小講演(1) 11:00～12:00

基調講演／パネルディスカッション 13:00～17:00

「相互研修型FDの総括」

3月16日(金)

個人研究発表(2) 9:00～10:45

全体討論 10:20～10:45

小講演（2） 11:00～12:00

ラウンドテーブル企画 13:30～16:00

各セッションのテーマ

小講演

3月15日（木）小講演（1）11:00～12:00

- ・学習コミュニティ形成を意図した大学連携の取組
山川 條（福井県立大学）
- ・大学におけるキャリア支援・教育はどこに向かうか？一揺らぐ「就社」社会のなかで－
児美川 孝一郎（法政大学）
- ・大学教育におけるポートフォリオ評価法
西岡 加名恵（京都大学大学院）
- ・大学院生のための段階的な大学教員養成制度の概要－アメリカの研究大学から日本への示唆－
吉良 直（日本教育大学院大学）

3月16日（金）小講演（2）11:00～12:00

- ・大学にとって「教育」とは何か－日米比較の観点から－
松浦良允（慶應義塾大）
- ・討議力養成を中心とする教養教育の改革
山本 奈（東京大学）
- ・学習する学生と学習させる教員
小方直幸（東京大学大学院）
- ・自己啓発とキャリア形成－教員，職員を超えて－
塩川雅美（学校法人常翔学園）

ラウンドテーブル企画

3月16日（金） 13:30～16:00

- ・学生とともに進めるFD
- ・高次リテラシーと批判的思考の教育
- ・内部質保障システムを支えるIRの可視化
- ・FDプログラムにおける提供者と参加者の「ずれ」を考察する
- ・非理工系学部での新しい数学教育を目指して
- ・FD, SD, 学生FDの対話
- ・成果が学生にフィードバックされるFDとは－学生の学びの変化をとらえる－
- ・学生・職員と創る大学教育
- ・特色ある大学・大学院情報教育の取り組み
- ・これからの学士を育てるための人材教育

2. メディア・IT 活用部門

メディア・IT 活用部門では、「多様なメディアを活用し、授業形態の多様化を図るとともに、自由な学習機会の拡充を進める」という中期計画の下、ICT (Information and Communication Technology) を活用した教育活動の推進を支援している。特に ICT を活用した学習環境の整備、ICT 活用型授業の支援、授業方法の改善に向けた相談、e ラーニング教材の開発、学習メンタリングを通して、本学の教育に関する課題解決を目指している。

【平成 23 年度の主な取り組み】

(1) 部門会議

第 1 回

期 日：平成 23 年 5 月 23 日 (月)

- ・議題 1. 平成 22 年度の活動報告
- ・議題 2. 平成 23 年度の活動内容について

第 2 回

期 日：平成 23 年 10 月 17 日 (月)

- ・議題 1. 平成 23 年度前期の活動報告
- ・議題 2. 平成 23 年度後期の活用内容について

(2) 主な事業

- ① グローバルキャンパスの運営
- ② 遠隔授業の支援
- ③ 大学連携授業におけるオンデマンド型授業の支援
- ④ WebClass ポートフォリオ・コンテナの活用支援と普及
- ⑤ ICT 活用通信 (仮称) の発行
- ⑥ 教育支援機器の活用援助
- ⑦ 学生スタッフの育成
- ⑧ メディア・IT 活用における国内の動向～研修・会議を通して～

【平成 23 年度の事業内容】

(1) グローバルキャンパスの運営

メディア・IT 活用部門では、高等教育開発センターの Web サイトにて講義や講演会などのビデオ配信を行っている (<http://he-ogc.he.oita-u.ac.jp/>)。この事業を「グローバルキャンパス」と

呼び、平成 19 年度より継続して行っている。配信されたビデオは受講生の復習や欠席者の補習、遠隔地での非同期的学習、授業担当教員のふり返り、発表や活動の記録、生涯学習や地域貢献のために使われている。

1) グローバルキャンパス Web サイトの改築

本年度、動画配信場所をコンテンツ管理システム（CMS）で構築した Web サイトへと変更した。これにより、登録やビデオ視聴ページ作成に関わる作業が従来よりも短期間で行えるようになった（図 1～図 4）。



図1. トップページ



図2. 講義ビデオ一覧ページ



図3. スライド中心の講義の場合



図4. 口頭説明が中心の講義の場合

2) 講義ビデオの収録と配信

本年度、グローバルキャンパスに掲載した講義ビデオの科目を表 1 に示す。本年度は前期 13 科

目 140 件，後期 13 科目 81 件の計 221 件^(注1)を掲載した。昨年度の掲載数が 207 件であったことから，今年度の掲載数は大幅に増加したといえる。しかし，撮影や編集などの労力を考慮すると，継続的に量を増加させていくことは難しく，今後は質的な向上を重点的に検討していく必要があるだろう。

(注1) 表 1 には集計に含めていない科目も記載されている（講義以外の利用目的）

表 1 平成 23 年度のグローバルキャンパス利用科目

実施時期	教員名（所属）	講義名	
前期	岡田正彦（高等教育開発センター）	生涯学習論入門	
	牧野治敏（高等教育開発センター）	生命観の変遷	
	山岸治男（教育福祉科学部）	社会認識と自己形成	
	山下 茂（高等教育開発センター）	自然とゆらぎ	
	中川忠宣（高等教育開発センター）	学習ボランティア入門	
	岡田正彦（高等教育開発センター）		
	牧野治敏（高等教育開発センター）	自然体験学習の理論と実践	
	末本哲雄（高等教育開発センター）	科学技術コミュニケーション入門	
	真鍋正規（工学部）	建築設備計画 I	
	川野田實夫（全学教育機構） 市原宏一（経済学部） 前田 寛（工学部） 本谷るり（経済学部） 芝原雅彦（教育福祉科学部） 大上和敏（教育福祉科学部） 岡田正彦（高等教育開発センター）	大分の水 I	
	川野田實夫（全学教育機構） 市原宏一（経済学部） 前田 寛（工学部） 本谷るり（経済学部） 芝原雅彦（教育福祉科学部） 大上和敏（教育福祉科学部）	大分の水 III	
	藤野幸嗣（工学部非常勤）	高度情報化と社会生活	
	金森由美（国際教育研究センター）	表現技術（口頭発表）	
	市原宏一（経済学部） 岡田正彦（高等教育開発センター） 末本哲雄（高等教育開発センター）	大分大学を探ろう	
	脇 幸子（医学部）	成人慢性期看護論 I	
	後期	岡田正彦（高等教育開発センター） 中川忠宣（高等教育開発センター）	キャリアデザイン入門
		牧野治敏（高等教育開発センター）	カラダの見方・考え方
		岡田正彦（高等教育開発センター）	教育本質論

	山崎栄一（教育福祉科学部）	日本国憲法
	江島伸興（医学部）	応用数理学
	岡田正彦（高等教育開発センター）	アカデミック・スキル入門 — 社会教育計画を題材に —
	末本哲雄（高等教育開発センター）	科学技術コミュニケーションのデザインと実践
	大嶋 誠（理事）ほか	大分の人と学問
	真鍋正規（工学部）	建築環境計画 II
	川野田實夫（全学教育機構） 市原宏一（経済学部） 前田 寛（工学部） 本谷るり（経済学部） 芝原雅彦（教育福祉科学部） 大上和敏（教育福祉科学部） 岡田正彦（高等教育開発センター）	大分の水 II
	川野田實夫（全学教育機構） 市原宏一（経済学部） 前田 寛（工学部） 本谷るり（経済学部） 芝原雅彦（教育福祉科学部） 大上和敏（教育福祉科学部）	大分の水 III
	中川忠宣（高等教育開発センター）	成人教育方法入門
	市原宏一（高等教育開発センター） 岡田正彦（高等教育開発センター）	プロジェクト型学習入門

3) 講義ビデオの収録と配信

グローバルキャンパスでは、講義ビデオのほかにも講演会やシンポジウムなどの配信を行っている。本年度も引き続き FD 講演会や成果発表会などの配信を行った。代表的なものを表 2 に示す。

表 2 平成 23 年度に配信した講演会・発表会（一部）

実施時期	主催	講演名
5 月 25 日	学生支援課	生き ² プロジェクト'10
8 月 22 日	高等教育開発センター	大学院・学部 FD 講演会
12 月 28 日	高等教育開発センター	大分県「協育」ネットワーク協議会設立総会
1 月 18 日	高等教育開発センター	FD 講演会（シラバスからはじめる授業改善）
2 月 18 日	高等教育開発センター	協育見本市 2012 紹介ビデオ
3 月 02 日	高等教育開発センター	iPad を使った協働学習支援システム利用講習会
3 月 07 日	高等教育開発センター	基礎力測定テスト分析結果報告会
3 月 08 日	教育支援課	学内教育改革関連プロジェクト報告
3 月 19 日	キャリア開発課	キャリア形成 FD・SD 講演会

4) 見やすいスライド映像の工夫

PowerPoint などのスライドを用いる講義の場合、昨年度より教員とスライド映像を別個のビデオカメラで収録し、編集でそれぞれの動きを同期させる方法を探ってきた。同様な見栄えをもたらすものとして、Presenter7 (Adobe 社) や STROM Maker (ロゴスウェア社) のようなプレゼン型 eラーニング教材作成ソフトがある。これらを使うと、スライド映像が鮮明な上にリンクメニューまで付けてくれる。しかし、製作の手間がかかるため、現在のところ全面的な採用としていない。

簡単でより鮮明なスライド映像を得るため、パソコン画面の動きを動画キャプチャーソフトで直接的に録画する方法を検証した [使用ソフト: Bandicam (株式会社グレテックジャパン)]。その結果、プロジェクタから照射されたスクリーンをビデオカメラで撮るよりも鮮明なスライド映像ビデオを入手できた (図5, 図6)。

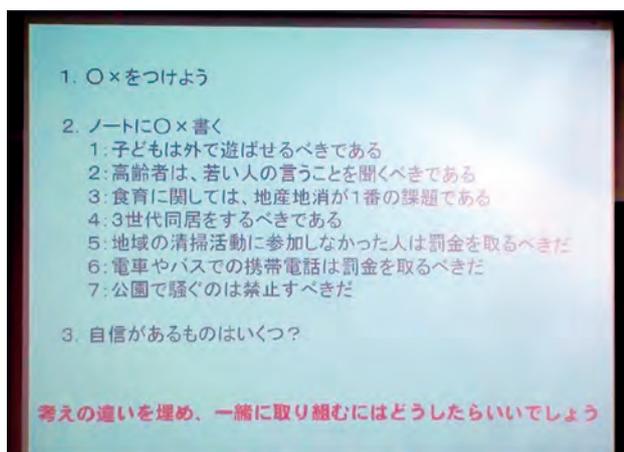


図5. スクリーンの直撮り^(注2)

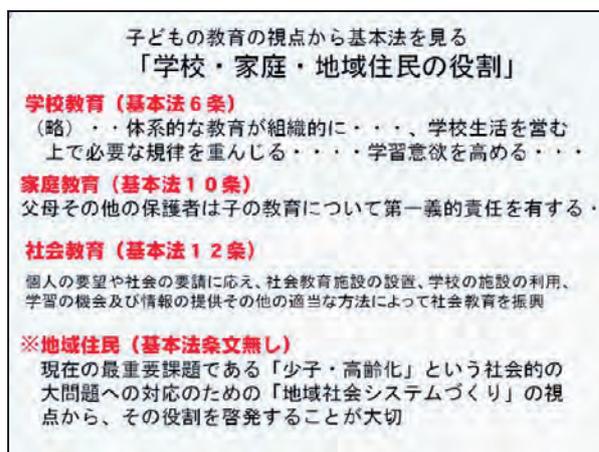


図6. 画面の動画キャプチャー

^(注2) ビデオカメラでスクリーンを直撮りすると、暗い映像になったり、小さい文字や記号が読めなかったり、光の反射などで色飛びしていたりと、見やすい動画素材になりにくい。また、ビデオカメラのシャッター速度の関係でスクリーンの映像が波打って記録されることもある。

しかし、この方法を用いるには、教員のパソコンに画面キャプチャーソフトがインストールされている必要がある。言い換えれば、画面キャプチャーソフトがインストールされていないパソコンを持ち込む場合にこの方法は適用できない。

そこで、パソコンの画面出力を2分岐し、片方を教室のプロジェクタに、もう片方を別のノートパソコン上に出力してそのディスプレイ画面を録画するという方法を検証した (図7)。VGA 出力を USB 出力に変換するために VGA2USB HR (epiphan 社) を使用した。VGA2USB 付属のソフトは受信した映像を録画してくれるが、元のパソコンでの出力が止まった場合 (RGB ケーブルをパソコンから引き抜いた時など)、録画中のビデオファイルを保存せずに終了してしまう。そこで、出力映像を映し出しているパソコンのディスプレイ画面をそのまま Bandicam を使って記録することにした。検証の結果、問題なく録画でき、鮮明なスライド動画を編集素材として使えるようになった。

大きなシンポジウムでは、複数の講演者が自分のパソコンを持参して RGB ケーブルにつなぎ、

自分の講演が終わると RGB ケーブルを抜いて次の講演者と交代するといった場面が多々見られる。このような状況でも、講演者のスライド画面をビデオとして回収可能である。途中で PowerPoint スライドをやめて (RGB ケーブルに接続するタイプの) OHP を使うような講義でも、この方法で録画可能である。

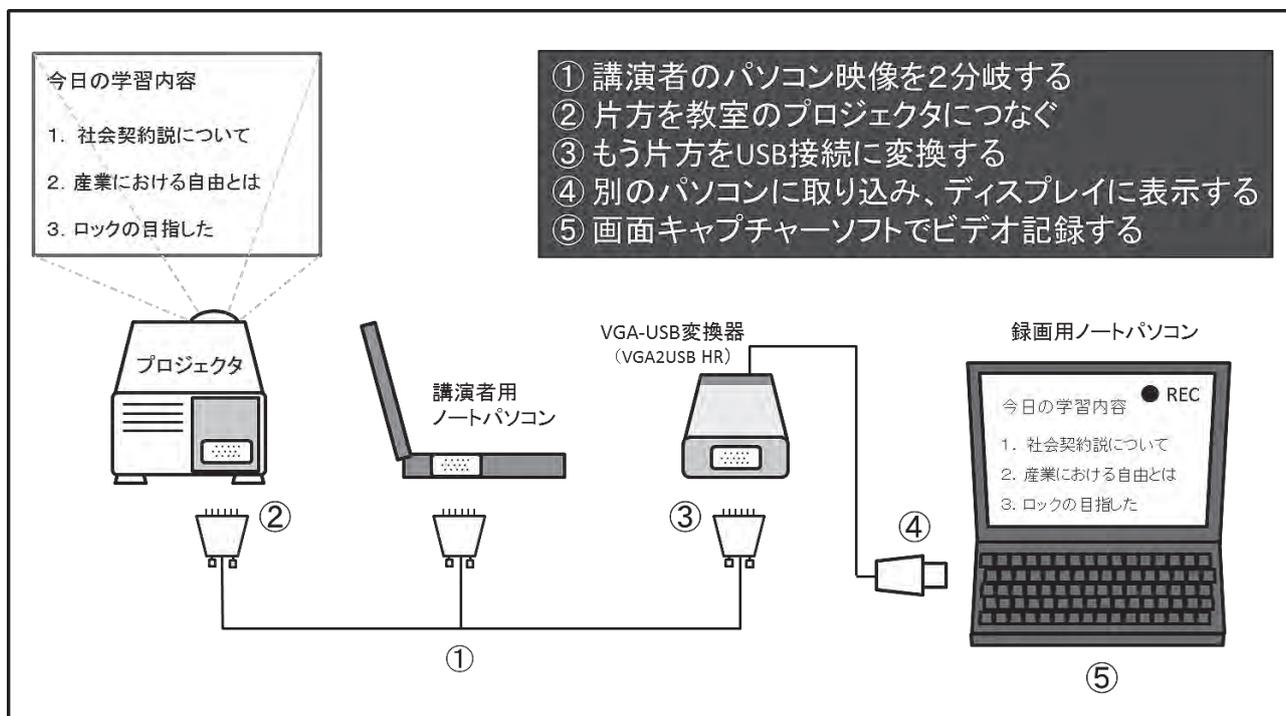


図7. 講演者用のパソコン画面を別のパソコンで直接録画する方法

(2) 遠隔授業の支援

且野原キャンパス教養教育棟 35 号教室と挾間キャンパス医学部 211 号教室にはテレビ会議システムが導入されており、インターネット経由で相互の教室の映像と音声を伝送できる。毎期、このシステムを使って遠隔授業が実施されており、本年度は前期火曜日 1 限目「社会認識と自己形成」(且野原から挾間)と後期火曜日 1 限目「応用数理学」(挾間から且野原)が開講された。メディア・IT 活用部門では、テレビ会議システムとネットワークカメラの操作、および講義映像の収録(図8)を通して遠隔授業の支援を行った。



図8. ネットワークカメラ(左)と操作システム(右)

ネットワークシステムは安定稼働し、特筆すべきトラブルは生じなかった。稼働2年目を終える現在、操作や設定の方法、トラブルシューティングが行き届いた結果だと考えられる。(反響防止のためにマイク出力をOFFにしている、気づかずに音声不通で困ったことが一度あった程度)

遠隔授業関連業務にあたり、教育支援課教育推進グループの工藤達生氏、森田則之氏、阿南和慶氏に多大な協力をいただきました。深く感謝を申し上げます。

(3) 大学連携授業におけるオンデマンド型授業の支援

5月24日、県内の人材育成、地域貢献、教育・文化・学術研究の機能向上のため、9つの高等教育機関が連携して「大分県高等教育協議会」が設立された。その下で教育連携を推進する「とよのまなびコンソーシアムおおいた」は、共通教育事業として連携授業「大分の人と学問」を開講した。この授業は Web サイト上で講義ビデオを視聴して課題を提出するというオンデマンド型の授業形態である。

メディア・IT 活用部門では、この講義のビデオ撮影と編集、e-ラーニングシステム (Moodle) を使ったビデオ配信およびレポート提出に関わる基盤提供を行った(図9)。開始早々、データベースに不具合が生じたが、バックアップデータから復旧させ、その後は大きな混乱なく授業を終えられた。



図9. 「大分の人と学問」専用 Web サイト (左) と Moodle 画面 (右)

平成 24 年度後期も引き続き連携授業「大分大学の人と学問」を開講することが決定しており、本部門では本年度と同様に Moodle を運用する予定である。講義ビデオの撮影については各教育機関で収録を行い、負担の分散化が予定されている。

(4) WebClass ポートフォリオ・コンテナの活用支援と普及

本学の情報基盤センターでは学習管理システム WebClass (日本データパシフィック株式会社) を運用しており(注³)、昨年度に追加機能として「ポートフォリオ・コンテナ」(注⁴)を導入した。

(注3) WebClass には基本機能として資料ファイルの掲載，Web 掲示板の設置，テスト/アンケートの作成，メッセージ送受信などの機能が実装されている。

(注4) ポートフォリオ・コンテナは「ゴール設定－実施－評価－改善」の学習サイクルを想定しており，自己他者と他者評価を受けながら成果物を何度も版を重ねながら質を高めていく授業スタイルを支援する機能である。

昨年度に引き続き，本部門では電話相談や個別指導，案内チラシ配布などを通して活用支援と利用推進を行った。また，WebClass をはじめとする ICT 活用教育の推進を議論する場として 10 回のポートフォリオ研究会を開催した。現 17 名のポートフォリオ研究会メンバー内で，WebClass を活用した授業は 23 科目を数え（表 3），WebClass e ポートフォリオ・コンテナは 6 科目の授業で実践された（表 4）。この数字はポートフォリオ研究会メンバーの申告をもとに計数しているため，全教員の利用数を示しているものではない。次年度も，ポートフォリオ研究会を通じて様々な活用事例を収集してモデル的実践の抽出を行い，学内に広めていくことが求められる。

表3. ポートフォリオ研究会メンバーが WebClass を活用した科目

1. 成人教育方法入門	13. プロジェクト型学習入門
2. 大分大学を探ろう	14. 大分大学を探ろう
3. マルチメディア処理演習	15. 科学技術コミュニケーション入門
4. マルチメディア処理	16. 科学技術コミュニケーションのデザインと実践
5. 経済統計を読む	17. アカデミック・スキル
6. 統計学 I	18. 成人教育方法入門
7. 統計学 II	19. 法律学演習 I
8. 理科授業論	20. 法律学演習 II
9. 数値情報処理	21. 法律学演習 III
10. 情報システム II	22. 法律学演習 IV
11. カラダの見方・考え方	23. 基礎演習 I
12. 生命観の変遷	

表4. ポートフォリオ研究会メンバーが WebClass e ポートフォリオ・コンテナを活用した科目

1. 大分大学を探ろう
2. プロジェクト型学習入門
3. 科学技術コミュニケーション入門
4. 科学技術コミュニケーションのデザインと実践
5. 生涯学習論入門
6. 基礎演習 I

(5) ICT 活用通信（仮称）の発行

学内の ICT 活用教育の推進を図るため，A4 用紙裏表 1 枚に WebClass の操作手順や活用例，教育支援機器の情報を掲載した通信を創刊した。定期的に印刷し，直接または学内便にて教員の個別

ポストに配付している。配付数は 328 で、平成 23 年度は 6 号の通信を発行した（表 5）。

表5. 平成 23 年度の ICT 活用通信(仮称)で扱った内容

1.	創刊のごあいさつ・Webclass の紹介
2.	Webclass のログインとコースメニュー画面
3.	Webclass のコース開設
4.	Webclass コースの時間割表内への移動
5.	WebClass を活用した授業：「科学技術コミュニケーションのデザインと実践」(1) 授業の全体像
6.	WebClass を活用した授業：「科学技術コミュニケーションのデザインと実践」(2) "資料"にファイルを掲載する方法

この通信を見て、「新しく WebClass を使ってみたいので、詳しく教えて欲しい」との旨の電話がかかってくることもあり、これを氷山の一角とすれば、学内周知にそれなりの効果があると考えてよいだろう。発行頻度を落とさないように続けていくことが次年度の課題である。

なお、通信のバックナンバーは高等教育開発センターのホームページより PDF ファイルとして閲覧できる（<http://www.he.oita-u.ac.jp/media/ict/>）。

（6）教育支援機器の活用援助

高等教育開発センターでは教育改善や学習環境整備のための教育支援機器を所有し、学内の教員に向けて貸し出しを行っている。本年度、所有する教育支援機器の貸し出し・管理体制の見直しを図るとともに、物品一覧を作成し、チラシとして学内の教員に送付した（付録 1，付録 2）。

貸し出し依頼の中ではノートパソコンが最も多く、講義の後に文書やプレゼンテーション資料などを作成させたり、インターネット経由で課題提出や調べ物をさせたり、幅広い活動に使われている。教員の説明を聞いてノートをとるだけの授業形態から脱却しようとする教員が少なからずいると受け取れる。また、パソコンが当たり前のように存在する学習環境への要望が高まっているとも考えられる。

ノートパソコンほどでないにしても、講義の双方向化をもたらすクリッカーと、画像・映像を記録できるデジタルカメラへの貸し出し依頼が多い。教員から特に期待されることは「一人一個」である。パソコンやデジタルカメラなどを学習に用いるメリットは理解されていても、何万円もする機材を授業担当者もしくは受講生が自前で用意することは難しい。個人所有の普及にも依存するが、多様な学習環境を提供することも、授業改善や主体的学習を推進していく組織に求められる支援と言えよう。

1) クリッカー利用支援

昨年度から 400 台のクリッカー端末（教育福祉科学部・工学部・経済学部）に各 50 台、医学部に 100 台、教養教育棟に 150 台）を配備している。本年度もクリッカーの周知と利用促進のため、個別相談やクリッカー利用講習会を実施した。7 月 25 日に開催した講習会では KEEPAD KAPAN のガルバニ理恵氏を招き、本学で導入したクリッカー（商品名 TurningPoint）について基本からご指

導いただいた（付録3，付録4）。

本年度，高等教育開発センターが管理しているものだけでも前期17回，後期52回の貸し出し依頼があった。後期の貸し出し数増加について，とりあえず試してみたいという教員が増えただけでなく，自身の講義スタイルに組み込んだ教員も増えたことが理由にあげられる。学部については十分に把握していないが，少なくとも教養教育科目においては，現在のところ利用拡大が見込まれる。

2) クリッカーデータと回答者を関連づける簡単な仕組みの開発

クリッカーの有用性を高めるために，新しい活用法の開発に取り組んだ。具体的にはクリッカーのデータと回答者を関連づける仕組みの開発である。高等教育開発センターが所有するTurningPointには元々そのような機能が備わっているが，事前準備や名簿登録が必要であること，特定の端末を特定の受講生に配付しなければならないことが条件となっており，その授業の間だけ端末を借り受ける教員にとっては現実的なやり方でない。そこで，マークシートを介し，授業担当教員の事前準備を不要とする方法を開発した（図10，図11）。この方法を用いれば，簡単な手続きでクリッカーのデータと個人とを関連づけられ，クリッカーの回答を出席管理や個人の成績に反映させられる。

担当教員が行う操作についてはチラシとしてまとめ，学内に配付した（付録5）。実際に，教養教育科目「自然とゆらぎ」にて採用されている。開発内容については関連資料^(注5)などで公表している。



図10 関連づけの仕組み

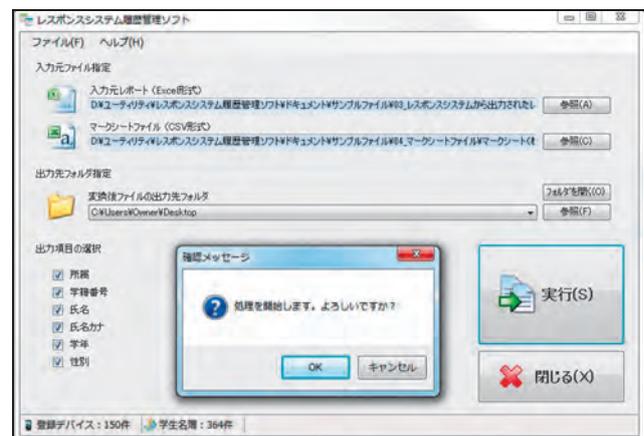


図11. レスポンスデータ管理システム

(注5)・末本哲雄(2011)「クリッカー(TurningPoint)の回答と個人を関連づける簡単な方法」大学ICT推進協議会2011年度年次大会(福岡市)

・末本哲雄(2011)「クリッカーで一挙兩得をねらう(授業改善+学習記録)」
文部科学教育通信 No.271 p24-25.

3) iPadを用いた協働学習支援システム

本年度，40台のiPadとともに「iPadを用いた協働学習支援システム」(SCSK株式会社)を導入した(図12～図15)。このシステムにはファイル共有機能，クリッカー機能，描写画像のリアルタイム共有機能が備わっており，教室の授業展開に応じた幅広い利用が想定されている。



図12. ファイル共有機能



図13. クリッカー機能



図14. 描写機能



図15. モニタリング機能

2012年3月2日には SCSK 株式会社の小森章彦氏，河内崇氏を招き，このシステムの利用講習会を開催した（付録6）。会場には30名近くの教員が参加し，実際にiPadに触れながら操作や機能を体験した（図16）。本講演内容はビデオ撮影をし，高等教育開発センターホームページより学内限定で配信している（図17）。



図16. 講習会風景



図17. HP上の講習会ビデオ

高等教育開発センターでは全学に向けて貸し出し体制を整えている。同時に iPad および本システムを活用した授業実践のモデル開発にも取り組み、効果的な教育方法の提案を行っていく予定である。この導入については、第 79 回学長定例記者会見（2012 年 3 月 29 日）でも取り上げられた（付録 7）。

（7）学生スタッフの育成

本学の学生をアシスタントとして委嘱し、高等教育開発センターの事業遂行に必要な補助業務を担当してもらっている。主な業務はグローバルキャンパスに関わる講義ビデオの収録と編集、その他 Web ページの作成、各種データ入力、教室機器操作支援などである。本年度は 19 名に委嘱した。

本年度、学生スタッフの提案により、USTREAM を利用した生放送配信を開始した。要望のあった講義（高度情報化と社会生活：前期水曜日 3 限目）やシンポジウム（おおいた学びフェスタ：2 月 6 日）で実際にライブ配信を行い、安定した配信ができることを確認した。これまで USTREAM の利用を検討してこなかったため、この提案は部門の事業拡張につながると期待されている。

大分県「協育」ネットワーク協議会の Web サイト（<http://kyouikunet.sakura.ne.jp/kyougikai/>）を製作したり、イベントのプロモーションビデオの作成を引き受けてきたりと、学生スタッフとして活動している間に身につけた技能を生かして活躍の場を広げていることが見受けられた。

この場を借り、業務を担当してくれた 19 名の学生スタッフに改めて感謝の意を示したい。

（8）メディア・IT 活用における国内の動向～研修・会議を通して～

①研修会名：日本教育工学会 第 27 回全国大会 課題研究 6

「教育の質向上に向けた e ポートフォリオ活用」

主催：日本教育工学会

期日：平成 22 年 9 月 17 日（土）～19 日（月）

会場：首都大学東京（東京）

近年、高等教育での e ポートフォリオシステムの導入が進んでいる。本学でも形成的評価における評価支援や教職カリキュラムにおけるふり返りを目的として e ポートフォリオを稼働させている。今回、参加した分科会では、「e ポートフォリオの導入が黎明期から発展期に移りつつあること」、「『持続・継続』、『普及（規模の拡大や個人の利用の拡大など）』に向けて加速がつけられないでいる」ことを全体的な問題意識として掲げ、研究実践で得られた知見から本質的な効果についての議論が展開された。本学でも、いかに e ポートフォリオを普及させていくか、そもそも e ポートフォリオでどんな教育が展開できるかは重要な課題であり、他大学での具体的実践例や方策を収集すべく会に参加した。ここでは特に参考になった 2 件の報告を取り上げる。

(a) 大学連携における e ポートフォリオ、LMS、SNS を連携した教育実践

澤崎 敏文(仁愛女子短期大学), 山川 修(福井県立大学), 田中 洋一(仁愛女子短期大学)

福井県の 7 つの高等教育機関で取り組んでいる F レックス・プロジェクトの概要と運用してい

るシステム、いくつかの授業実践についての紹介がなされた。このプロジェクトは平成 20 年度より続いており、大型予算の配分終了後でも安定して持続できるようにと、根幹をなすシステムはすべてオープンソースで構築されている（学習管理システム：Moodle，ソーシャルネットワーキングサービス：OpenSNP，eポートフォリオ：Mahara）。これら 3 つのシステムは統合認証をもって連携しており、どれかひとつのシステムにログインすれば、他のシステムにもアカウント情報が受け継がれる。

教育実践の紹介では「日本語表現演習 I」が取り上げられた。授業のねらいは「状況・情報を的確に判断・理解し、自分の考えを論理的に分かりやすく伝える日本語表現の修得を目指しており、演習 I では主に『聴く・話す』、『グループワーク』を通して、論理的かつ構造的に自分の考え方を伝える能力を高めること」で、講義時間はディスカッションに費やし、事前準備とふり返りに Mahara を活用している。

特に興味深く感じた点は、各システムの位置づけである。澤崎氏はスライドにて、

LMS---Formal
Mahara----Semiformal
SNS---Informal

を示しながら、Mahara への期待を「授業進行を LMS 上で行い、一定の教員コントロールを残しながら、学生の自主的な学習意欲を醸成させる」と語った。筆者自身、学習管理システムを使って授業を行っており、学習教材の提供や、テスト/レポートの提出に使用している。学習管理システムは教員主導の授業形態にはかなり有益だが、学生自身の主体的学習を支援していくにはやや不適さを感じている。学生を主役として「実践コミュニティを作りたい」との思いには共感するところではあるが、「授業の流れを作りやすいが学生主体の記録やまとめ直しがやりにくい Moodle と、学習記録の蓄積とふり返りに適してはいるが授業の流れを作りにくい Mahara を相互に補いつつ、授業の中でどう必然性を生み出すか」に糸口を見いださなければ、Mahara を介したコミュニティ形成に向かわせることは難しい。そもそも必然性がなければ、学生は e ポートフォリオを使わない。

澤崎氏は Moodle を使って授業の流れをつくりつつ、学生に学習記録の蓄積と再利用を Mahara で行い、授業外でのインフォーマルな議論を OpenSNP で行うという全体像を紹介してくれた。事前に個別テーマについて自分で調べてきて、グループで討論し、Mahara に記録する。次の週、別のグループを作らせ、説明し、発表する。教員からの凶報提供として、Moodle に評価項目が載せており、授業の狙いが分かるように細かく示しておく。

課題として必然性をもたせながらも、自由度の高い Mahara をうまく利用しているように感じた。また、単に学習記録を蓄積するだけでなく、それらを他人に示すよう再構築することで学習を深めるという学習スタイルは自己学習能力の形成も意図されているようだ。「過去の蓄積から次の議論や課題への足がかりとなるような環境づくり」と述べているように、Mahara を介して学習の連鎖が起こることが期待できる。報告を聞きながら、学習記録を蓄積し再構築することで学びが起こるという学習スタイルをいかに理解させ、学習活動としての必然性を持ちつつも学生が主体的に取り組むような課題と条件設定が応用する場合に重要な要素と感じた。

導入時、学生に「共有できる電子ノートですよ」と簡単に伝えるそうだが、友人のノートを参照できること、蓄積されたリソースの再活用についての有効性を認識させるための方策と時間が必要

となってくるだろう。また、学習スタイルとして定着するには、学生に十分なメリットを感じさせるような働きかけが不可欠だろう。

(b) アウトカムベースのポートフォリオの活用に関する研究

小柳 和喜雄(奈良教育大学)

奈良教育大学教職大学院で3年間にわたって取り組まれてきたeポートフォリオ活用の効果と経過を踏まえながら、その継続利用における組織の関与モデルを示す内容であった。

eポートフォリオ稼働の裏には、3つの教師像をもとにクリアすべきコアスタンダードと専門スタンダード、実習における授業力評価が全体像としてあり、各スタンダードに基づいて各科目の役割と位置づけが明確になったカリキュラムフレームワークが用意されている。さらに各科目で獲得する能力についての知識とパフォーマンスについてルーブリックで示されており、教員と学生は到達目標や評価基準を詳細に確認できる。

eポートフォリオの機能には2種あり、ひとつは授業ごとに「概要」「自分が考えたこと」「発展させたいこと」を記入する形成的eポートフォリオ、もうひとつは学期ごとに「研究の具体的目標と到達計画」「身につけた資質・能力」を記入していく総括的eポートフォリオである。さらにオンライン指導をはじめとする教育改善の議論として会議を毎週開いているというかなり充実した教育支援体制が敷かれている。

3年間の運用により、教員のコメントにより大学院生の書き込みの質と量が変わっていき、具体的には学びの内容が大学院生間で共有されて他者の意見や感想を受けたコメントが増えてきたなど相互学習が確認できたそうである。一方、システムの役割に起因するのだろうか、各授業の学びが横断的に広がっていかないという課題も浮き彫りになってきた。本学でも学習管理システムやeポートフォリオを用いた学習形態を行っているが、各授業はその授業での成果として限定的であり、カリキュラムやコース全体に横断的な成果としては確認しづらい。この報告と同様、総括的な評価として単位数を数えるだけでなく、学習過程でどのような学びが行われているかを学期途中で把握していく必要があるだろう。授業単位での形成的評価と助言はもちろん、学期途中や学習相談時や自らの振り返りと学習方針決定のための根拠を分析できると、より学習の深化につながるはずだ。

導入当初、教員でもeポートフォリオ活用の捉え方も「修士論文に近い内容イメージ（論文に近い実践研究）」や「獲得を目指す資質能力との関わりから、その成果をまとめて記す内容」およびそのミックスタイプなど多様であったようだ。学生も報告書の作成過程でeポートフォリオの内容を参照するが学位研究報告との乖離があったりして、有効に使えなかった場合もいくつか散見された。次年度はそうした課題をうけ学位研究報告と課題研究報告の関係を明確にするなど指導上の修正を試みた。特に学生がeポートフォリオの活用イメージをもつことに苦心したようである。

報告のまとめとして、これまでに得た知見をもとにeポートフォリオの効果的継続イメージが提示された。今後も大学院生のやる気や関心を開拓すべく必要な道具・指導、カリキュラムなどの修正や規定に乗り出しており、eポートフォリオが教育システムの中に不可欠な位置づけにあると受け取れた。

【今後の方向性】

ここ数年、様々な高等教育機関でeポートフォリオシステムが導入されている。教育工学関連の学会や研究会に出席すれば、必ずといってよいほどeポートフォリオの実践報告がある。この事実から、研究課題での問題意識として取り上げられたように、日本のeポートフォリオも黎明期から発展期に移行したことを強く感じさせられる。つまり、eポートフォリオを用いて本質的な教育効果をいかに生み出すかを改めて問い直さなくてはならない時期に入ったと言える。

Fレックスでの実践が示すように学習記録の蓄積と再構成にて学びを生み出す方策もあれば、奈良教育大学のように個々の授業での学習記録および学期末における振り返りと学習計画の作成にて自己の学びを深める方策もある。本学で導入したWebClassポートフォリオは成果物に対して自己評価、相互評価、教員評価を取り入れながら成果物を改善していくことで学びを深めていくタイプである。一概に「eポートフォリオ」と言っても決まった仕組みや活用方法を有するのではなく、活用のデザインによって担う役割も変わる。その意味で活用実践の報告が増えたとは言え、やはり自らの教育課題に適合するように各組織内で議論は不可欠である。奈良教育大学のように全体像の中にeポートフォリオが明確な役割と共に位置づけられているのであればトップダウン的普及戦略も有効であろうが、本学のWebClass eポートフォリオ・コンテナについては授業レベルでの活用が基本であるため、草の根的に普及させて方がふさわしいと思われる。

学会や研究会の議論では「eポートフォリオを単なるデータの集積箱にしない」ことが頻繁に指摘されている。やりっ放しにならないための警告である。同時に「誰のためのポートフォリオか？」という問いかけもなされており、導入が進む一方で、有効活用に至っていない難しさも感じ取れる。Fレックスの報告では「授業という教員主導の教育を持ちかけながらも、中身は学生が主体的に活動できる状況をいかに作るか、その中でeポートフォリオをどのように使うか」という問いが発せられた。我々も依然、授業デザインを踏まえた実践を試行錯誤しなければならない状況である。したがって、来年度の部門活動において、学内の教育課題に対応できる活用方法の開発および普及、その効果検証が重点な意味を持つだろう。

付録1. 学内配付チラシ(教育支援機器) 表

ノートパソコン
レポートやプレゼン、学内の無線LANを使ったインターネットなど、幅広く使えるオールラウンドプレイヤー。貸出数トップの人気物品。

デジタルビデオカメラ
簡単操作のビデオカメラ。学生のプレゼンや面接を録画してふり返りに使ったり、フィールド調査や実習・演習の記録に使ったりと出番は多い。自分の講義録や欠席者対策として使っている先生もいる。

デジタルカメラ
コンパクトで持ち運びも簡単。フィールドワークの必須アイテム。写真撮影が主だが、動画収録もできる。USB接続もしくはSDカードの差し替えによって簡単にデータをパソコンに移動させられる。チームビルディングの小道具としても威力を発揮することはあまり知られていない。

プリンター
スタンダードなインクジェット式。学生が持ち寄ったデジカメ写真を印刷して切り貼りしたり、その授業中に作った発表ポスターを印刷して発表させたりと、アナログ的な活動を重視する先生へ。研究会や大会の受付に1台あると便利。

iPod Touch
学内無線LANでインターネットが使えるだけでなく、音声・動画も扱える。写真も撮れるので、野外活動で重宝する。必要であれば、アプリをインストールしても構わない。

クリッカー
PowerPoint上で動く投票自動集計システム。教員が質問を出して、学生がリモコンで回答する。回答は数秒後にグラフとなって表示される。授業中に学生の理解度チェックや意見の共有ができるので便利。貸出回数 No.2。

遠隔会議システム
インターネット経由で他の遠隔会議システムとテレビ会議を行える。

次の授業で 新展開を

高等教育開発センターでは授業に役立つ教育支援機器を貸し出しています。

付録2. 学内配付チラシ(教育支援機器)裏

貸出物品一覧

教育支援課 (教養教育棟 1階)					
	詳細・付属品等	個数	メーカー	規格	備考
1	デジタルビデオカメラ	1台	SONY	HDR-XR550	ホームビデオカメラ
2	三脚(デジタルビデオカメラ用)	1台	SONY	VCT-80AV	
3	デジタルカメラ	1台	Canon	PSSX210IS	1410万画素, 光学14倍ズーム, 広角28mm, 黒色
4	デジタルカメラ	1台	Canon	PSSX210IS	1410万画素, 光学14倍ズーム, 広角28mm, 紫色
5	デジタルカメラ	1台	Canon	PSSX210IS	1410万画素, 光学14倍ズーム, 広角28mm, 金色
6	三脚(デジタルカメラ用)	1台	Velbon	CX-440	
7	ノートパソコン	1台	SONY	VGN-BZAAPSA	Windows Vista, Word, Excel, PowerPoint, 無線LAN
8	スピーカー	2台	CREATIVE	I-TRIGUE 2300	電源アダプター, ステレオミニジャック入力
9	プロジェクター	1台	EPSON	EB-W6	2000ルーメン, 2008年製
10	プロジェクター	1台	EPSON	EPM-745	2500ルーメン, 2005年製
11	レーザーポインター	1個	コクヨ	ELA-GU94N	緑色レーザー, PowerPoint対応
12	遠隔会議システム	1台	SONY	PCS-XG80	ネットワークカメラ・転送器セット

高等教育開発センター室2 (教養教育棟 2階)					
	詳細・付属品等	個数	メーカー	規格	備考
1	ノートパソコン	40台	ASUS	EeePC101T-BKU	10.1型画面, Windows7, Word, Excel, PowerPoint, 無線LAN
2	プリンター	10台	Canon	PIXUS MP490	カラーインクジェット
3	短焦点プロジェクター	2セット	HITACHI	CP-A100J	2500ルーメン, 壁面・机上投影に便利, 2008年製
4	OpenStage	2セット	DNP	DOS-56M-1.2	デジタルペンを使ったプレゼン&ディスカッションツール
5	デジタルビデオカメラ	3台	SONY	HDR-SR12	ホームビデオカメラ
6	三脚(デジタルビデオカメラ用)	2台	SONY	VCT-80AV	
7	三脚(デジタルビデオカメラ用)	1台	Libec	TH950DV	カメラ(4kgまで)用三脚
8	デジタルビデオカメラ	2台	SANYO	DMX-HD1010	小型・簡単操作, フィールドワーク用, SDカード録画
9	デジタルビデオカメラ	2台	Victor	GZ-HD3	黒・白(各1台)
10	ワイヤレスマイク・受信機	3セット	SONY	WRT-816	送信機・受信機セット(B帯)
11	トランシーバー	4台	KENWOOD	UBZ-BG20R	イベント会場の連絡に
12	デジタルカメラ	30台	Panasonic	LUMIX DMC-TZ10	GPS機能, SDカード(8GB)付, ビデオ撮影可
13	三脚(デジタルカメラ用)	4台	SONY	VCT-HCA3	
14	三脚(デジタルカメラ用)	1台	SLIK	U9800	
15	三脚(デジタルカメラ用)	1台	SLIK	U7700	
16	iPod touch	70台	Apple	MC008J/A	第3世代, 32GB
17	モバイル・プロジェクター	20台	SANWA	PRJ-1	iPod Touch用, 暗い部屋での使用を推奨
18	クリッカー (50個×3セット)	150個	KEEPPAD JAPAN	TurningPoint	1セットから貸出可, PowerPointアドオン(インストールCD)

連絡先 (メール) hecenter@oita-u.ac.jp (電話) 教育支援課 (内線7366)
 高等教育開発センター室2 (内線7069)



クリッカー講演会

月日： 2011年7月25日(月)
 時間： 17:00～18:00
 場所： 教養教育棟25号教室
 主催： 高等教育開発センター

講演1
 (30分間程度)

クリッカーシステム「TurningPoint」の紹介
 話し手： ガルバニ 理恵 (KEEPAD JAPAN)

講演2
 (15分間程度)

TurningPointのデータと受講生を結びつける方法
 話し手： 末本 哲雄 (高等教育開発センター)

[お問い合わせ先] 末本哲雄(高等教育開発センター) suemoto@oita-u.ac.jp または 内線7069

(注) 写真はイメージです。糸電話を使って受講生の回答を聞いていく仕組みを説明するのではありません。無線リモコンを使った「学生応答システムの紹介」と「個別回答データの収集法」を紹介します。



(1) PowerPointを使って講義をする



(2) クリッカーで受講生に回答させる



(3) 数秒で回答がグラフ化する



クリッカー講演会

月日： 2011年7月25日(月)
 時間： 17:00～18:00
 場所： 教養教育棟25号教室
 主催： 高等教育開発センター

講演1
 (30分間程度)

クリッカーシステム「TurningPoint」の紹介
 話し手： ガルバニ 理恵 (KEEPAD JAPAN)

講演2
 (15分間程度)

TurningPointのデータと受講生を結びつける方法
 話し手： 末本 哲雄 (高等教育開発センター)

【お問い合わせ先】 末本哲雄(高等教育開発センター) suemoto@oita-u.ac.jp または 内線7069

(注) 写真はイメージです。糸電話を使って受講生の回答を聞いていく仕組みを説明するのではありません。無線リモコンを使った「学生応答システムの紹介」と「個別回答データの収集法」を紹介します。



(1) PowerPointを使って講義をする



(2) クリッカーで受講生に回答させる



(3) 数秒で回答がグラフ化する

クリッカーの回答データと受講生の関連づけ

1 学生にマークシートとクリッカーを配布する



2 クリッカーを使った授業を行う



3 マークシートに「学籍番号とクリッカー番号」を記入する



4 マークシートとクリッカーを回収する



5 クリッカーのデータを出力する

(授業後、ソフトを開じる前に行います)



「TurningPoint」上で、
 (a)「ツール」アイコンをクリックする
 (b)「レポート」を選択する
 (c)「レポート」タブをクリックする
 (d) すべての項目にチェックを入れる
 (e)「作成」ボタンをクリックする

各クリッカー端末の回答がExcelに書き出されます
 (ファイルの作成にはしばらく時間がかかります)

6 「クリッカーのデータ」と「受講者名簿」をメール(suemoto@oita-u.ac.jp)で、「マークシート」を学内便で、末本に送付する



- (1) クリッカーのデータ(Excelファイル)
- (2) 受講生名簿
(教務システム「CampusSquare」からダウンロード)
- (3) マークシートの紙束(順不同で構わない)

7 関連づけされたExcelファイルを受けとる



手順(6)クリッカーのデータ(Excelファイル)に
 受講名、学籍番号、所属が挿入されている。

高等教育開発センターからのご案内

① iPad を用いた協働学習支援システムのデモ体験・講習会

- 日時： 2012年3月2日（金）13:00～15:00（途中参加・退室自由）
場所： 教養教育棟 26号教室
講師： 小森 章彦、河内 崇（SGSK 株式会社）
内容： 3月に本学で導入する新システムの操作体験・説明会です。
授業での貸し出しをお望みの方や iPad を使った授業に関心をお持ちの方はぜひご参加下さい。



このシステムを使うと、例えば 以下の展開を講義に取り入れられます。

【双方向型】

- 筆記型のクイズ番組（例：「平成教育委員会」、「世界ふしぎ発見！」）
 - 先生の iPad から学生の回答状況をリアルタイムで確認できます。
 - その中から特定の学生の回答を選び、スクリーンに投影できます。
- 投票 - 自動集計型の審査番組（例：「紅白歌合戦」、「ものまね王座決定戦」）
 - 選択肢による学生の回答・意見をリアルタイムでグラフ化できます。

【デジタル教材活用型】

- デジタル教材の適時配付
 - ファイルを必要な時に学生の iPad に送り込めます（PDF、PPT、画像、ビデオなど）
- 学生用 iPad の遠隔操作・一括管理
 - パソコン教室のように、先生が学生用 iPad を遠隔で強制操作できます。

【協働学習型】

- グループでの共同作業
 - iPad に描いた線や図を、リアルタイムで複数の iPad に表示させられます。
 - iPad を通して、グループ内で同じ横造紙にお絵かきをしている状況を作れます。
 - グループで一緒に作品を作ったり、アイデアを出し合うことに利用できます。

予習したい方、イメージ画像を見たい方には SCSK さん作成の説明資料をお渡しします。
高等教育開発センターまでご連絡下さい。 担当：末本 suemoto@olta-u.ac.jp

（事項2）iPadを用いた協働学習支援システムの導入

本学では「iPadを利用した協働学習支援システム」（開発元：SCSK株式会社）を導入しました。より効果的な学習環境の構築に向け、近年、学生の意欲喚起や教員との双方向コミュニケーション、他の学習者との協働活動が重要視されています。iPadの特徴を生かした本システムは、講義中の学生に直接的で相互的な働きかけを増やし、主体的な学習を促します。

本システムには、以下の機能が備わっています。

（1）デジタル教材の共有機能

- ・教員は好きなタイミングで学生に教材を配付できます。
- ・学生は指一本でファイルを教員に提出できます。
- ・学生は教員やクラスメートとファイルを共有できます。

（2）クイズ機能

- ・講義中、教員は学生のiPadに選択問題を表示させ、その解答をリアルタイム集計し、後の講義に生かすことができます。
- ・選択問題のほか、自由記述として回答させることもできます。

（3）ホワイトボード機能

- ・iPad画面に手書きで図や文字を書くことができます。
- ・複数の学生で同時に図や文字を書かせることもできます。
- ・教員は学生のiPad画面を一覧で確認でき、リアルタイムで状況を確認できます。
- ・教員は、選択した学生のiPad画面を教室のスクリーンに投影できます。
- ・教員は、選択した学生のiPad画面に書き込みができます。

特に（2）、（3）は、双方向性・協働性・緊張感ある授業を演出します。

[詳細はこちら](#)

第78回学長定例記者会見（大分大学ホームページより抜粋）

<http://www.oita-u.ac.jp/01oshirase/kaiken/2012-03.html>

3. FD・授業評価部門

本部門の主な活動は、教務部門会議の要請を受けて、本学の教育改善、教育方法の開発のために全学の教員が3年に一度のFD活動に参加するための事業を企画し実施するものである。また、各学期に、全学において統一された授業評価アンケートの立案・作成及びアンケート調査結果の集計と分析を実施している。さらに平成19年度より、大学院部門会議の要請により、大学院の教育改善のためのFD講演会を担当している。これらの活動が、本学の中期計画・目標において、大学院担当教員および学部担当教員両者を対象としてセンターが取り組むよう定められている実施事項として達成するべく、以下の事業を行った。

【平成23年度の主な取り組み】

(1) 部門会議

第1回

期 日：平成23年5月20日(金)

- ・議題1. 本年度のFD事業について
- ・議題2. 授業改善のためのアンケートについて

第2回

期 日：平成23年10月20日(木)

- ・議題1. きっちよむフォーラムについて
- ・議題2. メンタルヘルス講演会
- ・議題3. 授業公開・授業検討会
- ・議題4. シラバス作成のためのワークショップ
- ・報告事項1. FD講演会 8月22日
- ・報告事項2. 英語スピーチコンテスト
- ・報告事項3. 授業アンケート報告書
- ・報告事項4. 学外でのFD研修会報告

(2) 主な事業

①クリッカー講習会 日時 平成23年7月25日(月)

キーパッドジャパン(株) ガルバニ理恵氏, 大分大学講師 末本哲雄氏

②大学院・学部合同FD講演会 平成23年8月22日(月)愛媛大学准教授 佐藤浩章氏

「我々の授業は学士を送り出すプログラムの一つです～質の保証はどのように考えるのか～」

③学内合同研修会「きっちよむフォーラム2011」 日時 平成23年12月7日(水)

④「学生のメンタルヘルス講演会」日時 平成23年12月8日(木) 秋田大学教授 苗村育郎氏

「大学メンタルヘルスの現状と課題 ～特に希死念慮と自殺について～」

- ⑤大学院・学部合同 FD 講演会 日時 平成 24 年 1 月 18 日(水) 愛媛大学准教授 山田剛史氏
「シラバスからはじめる授業改善」
- ⑥授業公開・授業検討会FDワークショップ 平成 24 年 1 月 24 日(月)～27 日(金)
授業公開 4 授業, 検討会 1 回
- ⑦ポートフォリオ研究会への支援
- ⑧iPad を用いた協働学習支援システムのデモ体験・講習会 日時 平成 24 年 3 月 1 日(月)
- ⑨ジェネリック・スキル測定【PROG テスト】結果報告会 日時 平成 24 年 3 月 7 日(水)
- ⑩学生による授業改善のためのアンケート調査
- ⑪「英語スピーチコンテスト」
- ⑫センター業務に関わる研修報告(協議会, 学会, 研究会都への参加)

【平成 23 年度の事業内容】

(1) クリッカー講習会

本学へ昨年度導入されたオーディエンス・レスポンス・システムであるクリッカーの応用的な使用方法, 他大学での導入, 利用方法などについて, 日本の代理店であるキーパッドジャパンのガルバニ理恵氏から, 講演いただいた。また, 本学に導入されたシステムに新たに付加された機能について, 本センターの末本氏より説明が行われた。

日時 7 月 25 日(月) 17 時～18 時 15 分

場所 教養教育棟会議室 1

講師 ガルバニ理恵氏 (キーパッド・ジャパン株式会社) 末本哲雄氏 (高等教育開発センター)

概要

- 1) ガルバニ理恵氏による, レスポンスオーディエンスシステムの概要について
 - ・ARS (Audience Response System) の歴史
 - ・Turning point と Turning point AnyWhere のデモンストレーション
 - ・他大学での使用例 (ピア・インストラクション)
 - ・使用例 (上級編) クロス集計, 分岐型スライド, 集計結果の可視化
 - ・導入例 (貸し出し方法等)
- 2) 末本哲雄氏による本学システムへの付加機能について
 - ・Turning Point データと受講生名簿との結合 (3 点セットの提出)

参加者

住田実, 日高貢一郎, 永野昌博, 山下茂 (教育福祉科学部), 市原宏一 (経済学部), 能勢明雄 (学術情報課), 岡田正彦, 末本哲雄, 牧野治敏 (高等教育開発センター)

(2) 大学院・学部合同 FD 講演会

「我々の授業は、学士を送り出すプログラムの一つです～質の保証はどのように考えるのか～」

平成 22 年 6 月 15 日に行われた学校教育法施行規則の改正により、平成 23 年 4 月 1 日から、各大学等において教育情報の公表を行う必要がある項目が明確化された。この改正の趣旨は、大学等が公的な教育機関として、社会に対する説明責任を果たすとともに、その教育の質を向上させる観点から、公表すべき情報を法令上明確にし、教育情報の一層の公表を促進することである。(文部科学省 HP より)

このような状況で、本学においても教育方針の明確化の一環として「ディプロマポリシー」「カリキュラムポリシー」の策定作業が進行中である。そこで、愛媛大学より佐藤浩章氏を招き、大学の教育方針を公表するにあたって、必要となる考え方、具体的な公表の仕方、さらに教育活動の基本単位である授業についてもシラバスの書き方を例として、講演会を開催した。なお、この講演会は 7 月 19 日開催の予定で計画したが、台風の接近による全学閉鎖のため日程を変更して実施した。

日時 平成 23 年 8 月 22 日(月) 13 時 10 分～15 時

場所 教養教育棟 35 号教室 (旦野原キャンパス)

講師 佐藤浩章氏 (愛媛大学准教授 教育・学生支援機構 教育企画室副室長)

<講演の概要>

最初に、大学が掲げるべき 3 つのポリシーについて、なぜ策定しなければならないのか、また策定にあたって一貫性が必要であることを文部科学省が公表する資料をもとに教育改革の観点から説明された。

次に、ポリシーの策定とそれを実現するための教員組織のあり方を愛媛大学の教育コーディネータを例に紹介があった。ディプロマポリシーの策定にあたっては、目指すべき人材像を明確にすること、そして具体的に表現することの必要性が説かれた。

さらにアドミッションポリシー、カリキュラムポリシーについても、愛媛大学での実例を元に、学部の特性を考慮したチェックリストとともに説明が行われた。以上の講演を踏まえ、参加者が二人組となり、ミニワークショップが行われた。

最後に、愛媛大学における教育改革の取り組みについて検証の過程が紹介され、講演は終了した。

講演会終了後には、講師を囲んで有志との懇談会が行われた。本学ではディプロマポリシーの策定が進行中と言う状況であり、参加者と講師の間で熱心な議論が交わされた。

参加者

所属	氏名
教育福祉科学部	大野貴雄, 日高貢一郎, 山下茂, 仲野誠, 柳井智彦, 川崎道広, 永野昌博 藤井康子, 掘泰樹
経済学部	鵜崎清貴, 高山英男, 市原宏一, 大崎美泉, 合田公計, 高見博己, 豊島慎一郎, 宮町良宏
医学部	井出千恵子

工学部	井上正文, 上実憲弘, 大賀恭, 行天啓二, 工藤孝人, 佐藤嘉昭, 橋敦志 田中康彦, 津村朋樹, 橋本善行, 原恭彦, 劉孝広, 飯尾心
その他	河野美奈, 工藤達生, 森田則之 (教育支援課), 池田淳之助 (入試課) 金丸浩三, 斉藤初美 (教育福祉科学部学務), 佐藤智久 (経済学部学務) 岡田正彦, 末本哲雄, 牧野治敏 (当センター)

(3)「きっちよむフォーラム 2011」学内合同研修会

本研修会は、教員のみ研修会ではなく、学生と教職員が授業改善という目的のもとにそれぞれの立場から意見を出し合い検討を重ねることで、より良い具体的な解決策を探ることを目的としている。

本年度は学生が授業において主体的に活動した実践報告を元に議論を深めた。また、第 2 部の教職員だけの実践報告会は、特別経費による「ポートフォリオ研究会」の中間報告を兼ねて開催した。

日時 2011 年 12 月 7 日(水)13:10～16:20

場所 教養教育棟 14 号教室 (旦那原キャンパス)

研究棟 1 階会議室 (挾間キャンパス：遠隔配信)

第 1 部：学生教職員教育改善研修会 (13:10～14:40)

学生の報告をもとに、学生と教職員が一堂に会し授業改善の方策を探った。

実践報告 1：「Ustream と Facebook(SNS)を活用した授業の支援から」

報告者：教育福祉科学部 3 年生 (本センター SA)

実践報告 2：学生が主体となって地域貢献・交流を行う体験組込型教育実践「田舎で輝き隊！」

報告者：経済学部 3 年生 (「田舎で輝き隊！」 SA)

< 報告の概要 >

実践報告 I は、本学で開講されている「ソーシャルメディアの利活用」をテーマとした教養科目を学生が自主的にインターネット上 (USTREAM) に配信することで支援した実践であった。この授業での課題提出には SNS (Facebook) が使われており、その SNS の活用と授業の配信作業を通して学生が感じた、授業での SNS 利用と授業の遠隔配信について、利点と欠点について考察した。また、授業が学外へも広がると同時に、教師と学生の結びつきも一層密になることが報告された。

実践報告 2 では、経済学部の授業として、学生が実際に農山村に通い、地域への貢献策を探ると同時に学生の創意による自主的な取り組みを実践する活動が報告された。この授業が経済学部のカリキュラムにどのように位置づけられるのかについて、市原教授より紹介された。引き続き、学生から、地域の「買い物難民」を解消するためのプロジェクトとして、空いた物置部屋を店舗として活用し、商品を仕入れ販売するまでを企画、実施した実戦が報告された。さらに、地域活性化のためのイベントの企画・実施についても報告された。

第2部：教育課題・教育実践検討会」14:50～16:20)

今回の実践報告は、昨年度に引き続き、特別経費「動機付けと形成的評価を重視した学士課程教育開発」によるポートフォリオ研究会による報告である。ポートフォリオ研究会研究員による3件の実践が報告された。

報告1「ポートフォリオ・WebClassを活用した教育実践～ポートフォリオ研究会中間報告～」
西村善博教授（経済学部）

報告2「デジタル・ネイティブ世代を議論に参加させるには？～初年次教育におけるWebClass・ポートフォリオ機能の使用感」
柿原武史准教授（経済学部）

報告3「ポートフォリオ・コンテナを用いた授業実践
～試行と失敗、システム利用時のヒント～」
末本哲雄講師（本センター）

<報告の概要>

報告1は、WebClassを利用した授業実践について、今回の報告対象とした授業の概要、Webアンケートの作成、Webアンケート結果の利用に関する報告であった。Webアンケートは学生の授業内容理解を促すためのもので、授業での利用方法や具体的なWeb画面をもとに説明が行われた。アンケートの整理は学生アシスタントを使うことの問題点や、アンケートの投稿意欲が減っていくこと、成績下位層の学習意欲をどのように喚起すればよいのか等の問題提起があった。

報告2では、WebClassのポートフォリオを利用しての課題提出と、授業でのそのフィードバックについての実践が報告された。初年導入科目である「基礎演習」において資料を配付したり課題を提出したりすることで、学習の連続性や教室外学習の動機付けを意図したものである。提出された課題を相互評価させたところ、放っておくと何もしなかったが、コメント投稿を義務づけると、教室での発言よりもオンラインでの発言で積極性が見られた等の報告の他、Webの利用が成績に反映するシステムが必要ではないかとの課題も提起された。

末本氏による報告3では、WebClassの中に新たに付加された「ポートフォリオ・コンテナ」の機能説明と、それを授業に導入した実践が報告された。この新機能は学生の学習活動において自己の形成的評価を可能とすることで、学力の向上を図るシステムである。ポートフォリオ・コンテナは提出物の蓄積が容易になり、評価基準表を使って学生間の相互評価および学生の自己評価を適切な方向へ導くことができるシステムであること等が説明された。また、教養教育科目での実践例により、相互評価の有効性や授業改善への貢献度について、効果や今後の課題が紹介された。

参加者

所属	氏名
教育福祉科学部	甘利弘樹, 大上和敏, 三次徳二, 山下茂
経済学部	市原宏一, 柿原武史, 城戸照子, 高見博之, 西村善博, 本谷るり
医学部	大下晴美
工学部	秋田昌憲, 和泉志津江, 大賀恭, 越智義道, 金澤誠司, 行天啓二, 工藤孝人, 斉藤晋一
その他	坂井美恵子 (国際教育研究センター), 岡田正彦, 末本哲雄, 牧野治敏
学生内訳	教育福祉科学部 9名, 経済学部 9名, 工学部 7名

教職員による第 1 部, 第 2 部を通しての意見・感想

- ・ 学生さんの発表もしっかりしており、このような発表の場が与えられているというのは大変いいことだと思いました。今後、さらに、様々な学部の学生が参加してくれることを期待しています。また、これまで、WebClass を活用したことがなかったのですが、使い方、問題点、利点等が分かり参考になりました。
- ・ 両報告ともに新しい取り組みとして興味深く聞かせていただきました。
- ・ 本日はありがとうございました。Facebook の活用の方は、正直よく分かりませんでした。いろいろな可能性があることはわかりました。勉強しなければなりません。買い物プロジェクトについて、とても学生のために良い試みと思いました（学生のフィールドワークとして良い例ですね）。
- ・ 従来の座学、講義形式の授業スタイルとは全く異なる有効な授業方法を提示してもらい、啓発を受けました。今後、自分自身の授業に今回の内容を反映させる所存です。
- ・ 第 2 部の 3 報告を聞かせていただきました。実際に自分が使えるかどうか、考えながら聞いておりましたが、かなり労力がかかりそうでした。TA などの助力がないと実施するのに尻込みしたくなりました。
- ・ 教室外の授業の意義をもっと説明する必要があるように思います。他の先生方の WebClass の利用法について勉強になりました。
- ・ 実践報告 1 にしろ、2 にしろ、SA（スチューデントアシスタント）さんが活動できるようになるまでの下準備がかなり大変な気がします。こうした機会でも、各々工夫していることを知ることができました。
- ・ 第 1 部で学生の本音が聞けたのが大変参考になった。
- ・ Web アンケートの設定について、詳細な説明が分かりやすかった。
- ・ パソコン及びプロジェクタの操作不手際が目立ちました。事前チェックをもっとしっかり行うべきだと思います。研修会の内容は面白く拝聴しました。
- ・ 学生主体での授業の体験という話であったが、SA などの役割、目的、方向付け、技術等が整理できていれば、より論点が明確になったように思う。
- ・ もともと第 2 部には出る気はあまりなかったのですが、この日程で設定されると学科長会議等がありますので、物理的に出席不可能です。また、学生の発表内容は従来と比較して新鮮さはあったものの、参加者はどう考えても固定していると言わざるを得ません。
- ・ 学生が主体となった授業の実施は、とても興味深かった。
- ・ 挟間キャンパスへのフォローが欠けていた。WebClass の利用方法の勉強になった。自分の講義に取り入れることができるかどうか、検討が必要です。コミュニケーション能力の向上には役立ちそうです。
- ・ 学生さんの新しい試みを聞かせていただきました。ポートフォリオは、今後の授業の取り組み方、今までやらなかったことに対する意識改革になりそうです。
- ・ 発表者の学生、並びに先生方、工夫されている授業のやり方を SHARE していただき、ありがとうございました。
- ・ 学生さんの発表もしっかりしており、このような発表の場が与えられているというのは大変いいことだと思いました。今後、さらに様々な学部の学生が参加してくれることを期待しています。また、これまで WebClass を活用したことがなかったのですが、使い方、問題点、利点等が分か

り、参考になりました。

(4) 大学院・学部合同 FD 講演会 (学生のメンタルヘルス講演会)

学生の健全な生活を支援するためには、本学の教職員が学生の変調を早期に捉え、適切に対応することが重要であるとの観点から、大学の保健管理センター所長等の学生のメンタルヘルスに関する第一人者を招き、今日的な学生気質、具体的な症例や対応の方法等の最新の知見や、大学生に接する大学関係者が知っておくべき事項の講演により、学生支援に資することを目的とする。

日時 平成 23 年 12 月 8 日(木) 15 時～16 時 30 分

場所 教養教育 35 教室 (旦那野原)

多目的会議室 (挟間：遠隔配信)

題目 「大学メンタルヘルスの現状と課題 ～特に希死念慮と自殺について～」

講師 秋田大学保健管理センター所長 苗村 育郎 教授

共催 学生支援部，メンタルヘルス専門委員会，保健管理センター，高等教育開発センター

<講演の概要>

①キャンパスカウンセリングの歴史と現状

- ・日本ではアメリカの指導で始まった。大学に保健管理センターを置くことが義務づけられた。
- ・メンタルヘルスカウンセリングは 90 年代頃から、引きこもりの対応として重視され、現在まで続いている。

①スローガン 「カウンセリングマインドを持とう」 教育の一環として。

②センターだけでなく、「学内で連携するメンタルヘルスシステム」が必要。

③連携から連合，共同するシステムが必要 (担当事務職員，教員，親などとの共同)。

②カウンセリングシステム

- ・カウンセリングはカウンセラーに限らない。専門性を持った事務官を集約している。
- ・中心人物が必要で，その担当者は精神科医がよい。学生の人生の一番大切な時期 (岐路) を左右するので，定年までの覚悟が必要。(自殺の本気度の分かる医師が必要)。

・問題のありどころは **Bio-Psychological-Social**

Bio : 病気に関しては「うつ」と「鬱病」の区別をして欲しい

Psychology : 自殺に関しては性格が関与する

Social : お金，就職が決まらない (不況時に自殺が増える)

③実践より (35 年間の積み上げ)

- ・カウンセラーに向かない人がいる (気がつかない，同化してしまう等)。
- ・マスコミのミスリードがある。
- ・大学での年間の自殺者が二桁になると大学の雰囲気がおかしくなる。
- ・平成 18 年頃から全国的にカウンセリングの件数が増えている。
- ・文部科学省の推奨するシステム (素人カウンセラー) は役に立たない。
- ・チームの対応，担当者を固定することで成果を上げた。
- ・下宿生，自宅生それぞれに固有の危険な時期がある。また，卒業論文提出時も危険。

<質疑応答>

- ・自殺しそうな学生のキャッチの仕方は
登校しぶりの学生を教員が連れてくるケースが多い
自殺の8割は分からなかったという状況が、チームの導入で逆転した
- ・アスペルガー症候群（対人恐怖症）については、専門の先生にお願いする
- ・「眠れていない」という状況は危ない：診療の領域である
- ・紹介：大分大学では3月4月に自殺者が多い。留年の決定、休学等の変わり目が危ない。
最後に、本学保健管理センター所長による謝辞で、講演会を終了した。

参加者

所属	氏名
教育福祉科学部	藤井康子
医学部	安東真紀, 木戸芳香, 清水
工学部	大鶴徹, 末田直道
その他	井上あゆみ, 梅木昌恵, 後藤佐智子, 渡邊由香, 河越秀文, 池田耕一, 寺尾英男, 河野美奈, 山内美有紀, 安部梨沙, 山村真美
学生	16名

<参加者からの感想・意見>

- ・窓口で対応していると、少し顔がくらい学生のことが気になります。これまでは専門家ではない私が口を出したりすることは失礼だし、プライベートなことなので気軽に出て行ってはいけないことだと思っていましたが、どんどん情報を出して欲しいという先生のお言葉もあったので、これからは気づいたことがあれば、保健管理センターの先生方スタッフの方に伝えたいと思います。
- ・メンタルヘルスは詳しくないが、本講演会の話は分かりやすい内容であった。学生が窓口に来ると、何の目的で来たのか、説明ができず、それが分かるまで相当時間がかかる。学生が幼いなあという感じがある。親からの問い合わせも多く、親との対応も気を遣う。
- ・希死念慮のある学生さんと面接中でしたので、大変興味がありました。チームの大切さ、バイオ→サイコ→ソーシャルというイメージが良く理解できました。“力のないカウンセラーはいらない”という言葉、現状の厳しいマンパワーは日々感じます。自分が役に立っているのか考え直しました。マンパワーを充実させるシステムのノウハウを伺いたかったです。
- ・鬱病は社会全体で考えられるシステムがあつたらよいのではないかと思います。
- ・チーム形成→情報共有。非常に重要と感じた。
- ・最近の学生の「心の動き」が具体的に分かった。
- ・チームアプローチの重要性を改めて感じることができました。
- ・事務のとるべき立ち位置が分かりました。ありがとうございました。
- ・今後の学生支援の際に参考にしていきたいと思います。
- ・大学のメンタルヘルスのやり方、方向性の重要性、本学でもそのシステムをより強化しないといけない。
- ・スライドの内容も大変興味深かったもので、もっとゆっくり見せていただければと思いました。大

変勉強になりました。ありがとうございました。気になる学生については保管管理センターと連携して見守っていきたいともいます。

- ・保健管理センターの医者・看護師だけではなく、事務も関心を持ちようにすることが大切なんだと改めて思いました。もう少し、実例を挙げていただければ、分かりやすかったかなと思います。
- ・多種多様な問題を持つ学生を、専門家医、事務とのチームワークで対応されている秋田大学のすばらしさとともに大変さを感じました。事務も学生のメンタルヘルスに関心を持ち、チームで学生サポートをしていきたいと思いました。
- ・カウンセラーという役割は誰もが担うことができるという言葉が心に残りました。情報を共有すると言うことを、自分でもできることから実践していこうと思います。勉強になりました。
- ・大学に於ける学生のメンタルヘルスの現状が、大変理解できました。ありがとうございました。
- ・医学部では学務課の方たちが、学生の欠席の状況など比較的情報交換できているように思いますが、今後もひきつづき共同できるように取り組んでいきたいと思います。
- ・途中からの出席で 15 分程度しか聞けませんでした。理論よりも実践に基づいたお話で、特にチームとして対応することが重要とのお話が心に残りました。時間が合えば全体を通したお話をお聞きしたかったです。

* 学生より

- ・自分自身が大学生になって周囲の環境が変化し、たくさんの悩みが増えて自分自身がイヤになってしまうことも多々ありました。そんなときに力になってくれる先生がいてくれる、頼りになる教員のいる環境に自分がいれば安心できるだろうなと思いました。今あるぴあルームにも、今後、卒論や就活で心が疲れたときに訪れたいと思えます。学校全体、教員、事務員一つになって学生の不調に気づくということが今、求められているのだと分かりました。(教 3 年)
- ・大分大学はぴあルームがあるが、その存在を知らない学生はけっこういるのではないかと思った。大規模大学ではキャンパス毎にカウンセラーが置かれているという話を聞いて、もっとカウンセラーが身近な存在になる必要があると思った。自殺を防ぐためにも、大学のシステムがもっと機能する必要があることがよくわかった。(教 3 年)
- ・大分大学でも、担任の先生方はとても親身に相談にのって下さるので、心強くて安心感があります。ただ、これは教育福祉科学部で、私の環境が恵まれていたからなのだろうと、他学部の人の話を聞くと感じます。先生方の、何でも相談においでという雰囲気が全ての学生に伝われば、安心して学生生活を送れる人が増えるだろうと思えます。(教 3 年)
- ・学生の多様化や抱える問題、自殺防止についてお話ししていただき、とても貴重なお話が聞けて良かったです。社会福祉を学ぶ者としてとても勉強になりました。私は学生の立場として、相談に行きやすい雰囲気、初期の段階からつながることはとても大事だと思います。実際に私のまわりでも中・高・大学それぞれでメンタルヘルスに問題を抱えている知人がおり、通っている学校に相談できる機関がないこともあるので、もっと身近に相談できる機会が増えればと思います。(教 3 年)
- ・大学と言うには自由な立場であって、学生がどう生きようが職員の方は関与しないというイメージがあったのですが、今日のお話をお聞きして、学生が自分を大切にしてキャンパスライフを無事に過ごすことができるためには、職員側からの介入も大切になってくると言うことが分かりました。(教 3 年)

- ・秋田大学のキャンパスカウンセリングでは、ベテランを配置しサポートをチームで行っていることが分かった。大分大学ではソーシャルワーカーの配置も行っているが、効果はどのようなものであるだろうか。いずれにしても、カウンセリングが必要な学生をどのように発見し、アプローチしていくことが難しい問題としていることを理解した。(教3年)
- ・短い時間での講義でありましたが、要点だけを上手に伝えてくれ、非常に理解しやすい講演会でした。その中で、「自殺が起こるのはしょうがない」といった言動がありましたが、それは自殺願望がある自殺のことか、それとも希死念書という自殺願望とは違い、客観的に理解できない理由で死にたいと思い自殺してしまったことについてなののでしょうか。学生という知識のない意見ですが、「自殺願望、希死念慮」どちらもしょうがないとしてしまえば、対策は要らないと思いました。少し、先生の「しょうがない」というコメントに疑問を持ってしまったので、書かせてもらいました。
- ・終始、臨床心理士を見下すような発言があり残念でした。自殺者についてのスライドで「できるだけ努力はしていたつもり」と書かれており、言い訳めいたその言葉を見たとき、言いようのない無力感に襲われました。私の尊敬する臨床心理士は「受け持ったクライアントは自殺させたことがない」と言っていました。仮にも命を預かる身であるのなら、責任を持った発言をしてもらいたいです。大変失礼なようで申し訳ありませんが、気になったので書かせてもらいました。(教3年)
- ・今日、一人で参加したので、最初は不安でしたが、講演会を聞いて良かったです。生死に関わる問題は難しいと思いました。自殺は連鎖するということ、死にたい人は多いが、本当に死のうとした人は1割だということを知りました。県内の学生の方が自殺率が高いというお話がありましたが、自宅生と県内でも一人暮らしをしている人の割合はどうかかなと思いました。私は心理分野に所属しており、勉強をしているのでもっと勉学に励もうと思いました。(教2年)
- ・学生の自殺を防ぐには、大学でチームを作って対応していくことが重要だと学びました。また秋田大学では事前に細かいアンケートを採って、ここの学生の状態を把握しておくという取り組みはすごく斬新だと感じました。(教3年)
- ・学生の立場で聞いても、少し難しいというかあまり意義を感じませんでした。教官の方々や学務の方々に参加したら良かったのではないかと思います。(教3年)
- ・私は自殺についてゼミで問題提起したことがあり、研究のテーマとして考えたいと思っているところで、とても勉強になりました。自殺はくい止めることができるのでしょうか。死にたいという思いがどこから生じてくるのか、何故人は死んではいけないのかと言うことを毎日研究として考えています。先生はどうお考えでしょうか。
- ・今日の講演をきいて、苗村先生のお話の中にもあったように、大学がある意味で義務教育に近い形になってきていて、同級生の多くは大学、短大、専門学校に行くようになってきました。だからこそ、大学の中でも優秀な人となかなか大学のレベルについて行けない人が出てきて、大学内でもそれぞれの人たちに対して心理的なものを中心にしたケアが必要になってくるのだと感じました。こういったものが広まっていくことによって、相談しやすくなるのだと思います。(教3年)
- ・メンタルヘルスの問題においても、支援者や関わる人同士で連携をとり情報を共有し、見守っていくことが大切なのだなと感じた。(教3年)
- ・お話を聴く中で、メンタルヘルスに関する今の大学の現状について知ることができ、関心を持つ

ことができました。大学の中で学生を把握することは難しいと思いました。しかし、まずは、把握しようとする姿勢、行動が大切であると思いました。(教3年)

- ・大学は、小・中・高校とは違い、学級というものがいないため、ちょっとした変化も気づきにくいと思います。また、自分で考えて自分で決めて行動しなければいけないので、自分から相談に行こうとは、なかなかかなりづらいところがあると思います。誰かに付き添われながら行くことの方が安心できると思うので、気づいてもらえる支援体制があると予防になって良いと思いました。

(5) FD 講演会「シラバスからはじめる授業改善」

魅力的なシラバスは、授業の内容や雰囲気、評価方法を伝えるだけでなく、学生とのコミュニケーションを促すツールとして機能する。また、シラバスの作成作業は、教員自身が授業のコンセプトやデザインを再検討するとともに、大学の3つのポリシー（アドミッションポリシー、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー）と、自分の授業との位置関係を明確にする作業でもある。

上記のような観点を踏まえ、FD ワークショップとして、簡単な演習を交えながら、中期計画に掲げられた「厳格な単位制度、授業の到達目標と評価基準の明示を一層徹底し、学習成果の達成度をより適正に把握する評価方法を策定する。」についての講演会を企画した。

日時 1月18日(水) 13時10分～14時40分

場所 教養教育棟14号教室(旦野原キャンパス)

挟間キャンパスへはテレビ会議システムで遠隔配信

講師 山田剛史氏(愛媛大学准教授 教育・学生支援機構 教育企画室)

<講演の概要>

講演会は、本センター長山下茂教授による挨拶で始まった。現在、本学で進められている、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー策定の作業を通じて、シラバスの重要性が認識されているところである。本講演会には大変期待しているとの挨拶であった。

山田氏による講演は、本日の到達目標と以下のような講演の概要の明示から始まった。

- ①内部質保証システム構築におけるシラバスの位置づけ
- ②シラバス改善の実態と効果
- ③コースデザインとシラバスの役割～目的と到達目標を中心に(ワーク含む)～
- ④授業時間外学習を促す方法と多様な到達度評価・成績評価

大学の課題として、ユニバーサル化、グローバル化の状況で教育の質保証とその説明責任が重要になっている。そこでPDCAサイクルに応じたディプロマポリシーの明示や、それを可視化するものとして、カリキュラムマップ等が必要であり、最も詳細なレベルとしてシラバスが位置づけられる。授業の到達目標がディプロマポリシーとどう結びつくのか明示する必要があるとの立場から、それを実現するためのシラバスの書き方について、愛媛大学の具体的な事例に基づく説明があり、さらに参加者がペアを作ってのワーキングがあった。

最後に、講師との質疑応答、参加者間の討論が行われ講演会を終了した。

参加者

所属	氏名
教育福祉科学部	永野昌博，後藤裕司，佐藤晋治，日高貢一郎，松本正，廣野俊輔 麻生良太，山下茂
経済学部	秋山智恵子，雲和子，加藤典生，高山英男，市原宏一
医学部	長谷川英男，大下晴美
工学部	劉孝広，大谷俊浩，和泉志津恵，大賀恭，原恭彦
その他	中川忠宣，岡田正彦，末本哲雄，牧野治敏，河野美奈

<参加者からの感想・意見>

- ・評価の仕方が非常にわかりやすく，構造化されており，シラバスの改善だけでなく，授業の改善にも生かせる内容であった。
- ・本日のお話を参考に今晚シラバス作成頑張ります。シラバスは，学生のためだけでなく，教師自身にとっても自分の授業の目標を再確認する上で，重要なポイントであることを確認できた。
- ・10月に着任しましたので，初めてのシラバス作りに挑戦しています。大変参考になりました。
- ・シラバスが形骸化していることに疑問を持ちながら，自分で工夫をしていました。シラバスに様々な役割があること，学生が見ざるを得ないシラバスを作ること等，大いに参考になりました。活かして行きたいと思います。
- ・シラバスの書き方の具体例が聴けて良かったです。ループリックを活用したいと思います。学期の間，学生にシラバスを持たせ，それを学習の指針とするというのはその通りだと思いました。できればそのように活用できるシラバスを作りたいと思います。
- ・具体的なシラバスの書き方は参考になりました。授業外学習時間をとるのは大変難しそうです。来年度のシラバスはこれから書きます。目的と到達目標について今年は工夫してみます。
- ・内容も具体的で例も多く，非常に役に立ちました。今回の内容では本学のシラバスでいう授業内容という面での説明がなかったように思います。私個人としてはこの内容の書き方がいつも迷うところです。詳細に書くと，学生のレベル（学年によって異なるので）によって，しばられてしまう可能性が（理解できなくても進む or 補足説明などを加え，内容が終わらない）強いように思います。しかしあまり曖昧に書くとシラバスとしての役割も半減すると思います。この兼ね合いが非常に難しいように思います。
- ・全学共通教養科目を担当していますが，学生は全くシラバスを読んでいないような状態です。現在のような形のシラバスでなく，図なども入れ，フォントも多様にしないと，実質的役割を果たしていないと思います。
- ・シラバスを書き直してみようと思いました。添削していただけるシステムがセンターがあればありがたいです。
- ・よいシラバスを作るために必要な目線，項目等を近いすることができた。非常にためになった。シラバスを見通すこと＝自分の授業の見通しだと思う。個人的には1回目の講義でシラバスを配布して説明しているが，学生側にもシラバスの活用の仕方についてガイダンス等を行うことも考えておくことも必要ではないかと思う。
- ・到達目標の書き方について大変参考になりました。書き直しにトライしてみたいと思います。

シラバスの重要さ、シラバスと授業の関連など基本部分は、小学校、中学校と全く同じであることが分った。いいシラバスを作ることと、並行してシラバスを学生、教員がどう活用していくかというシステムづくりの大切さも感じた。

(6) 授業公開・授業検討会 FD ワークショップ

本学教員の教育改善のために、互いの授業を参観し、それを題材とした検討会によるワークショップを実施している。本年度は下記のように実施した。

1) 授業公開の実施

日付	授業担当者	授業名	参観者
1月24日(火)	日高 貢一郎 氏	日本語は面白い	藤井康子(教), 田久保(教), 末本哲雄
1月26日(木)	劉 孝宏 氏	機械力学	柴田克成(工), 金澤誠司(工), 末本哲雄
1月26日(木)	加藤 典生 氏	原価計算論Ⅱ	越智義道(経), 末本哲雄
1月27日(金)	牧野 治敏 氏	理科教育学入門	なし

※ 各授業の概要についての報告は省略する。

2) 授業検討会

日時 1月27日(金) 17時00分～18時00分

場所 高等教育開発センター室

参加者 日高貢一郎, 劉孝宏, 加藤典生 (以上授業担当者), 藤井康子 (教育福祉科学部)

司会 牧野治敏 (本センター)

<授業検討会の概要>

授業を参観したものの、検討会に出席できない先生からは、授業を参観してのコメントと自分の授業での工夫等を記入したコメントシートを提出してもらい、検討会でその内容を紹介し、検討会での意見として扱った。

検討会は本センターの専任教員、牧野氏の司会で始まり、最初に各授業の特徴について(対象学生、授業形態、使用メディア等)の説明と、欠席者によるコメントシートの紹介があった。

次に自己紹介を兼ねて、今回の授業の概要と学生に学習させたい内容とそのための工夫、感想等が紹介された。

公開された授業はいずれもベテランの教員による授業であり、独自の工夫により参観者には非常に参考になるものであった。そこで、検討会の参加者達が抱えている授業での課題について、互いの成功事例等を元に改善策を探す話し合いとした。

授業での問題点として、授業中に電子辞書を使わせるとスマートホンで遊んでいても分からないこと、授業にのってこないこと、適切な課題の出し方が分からない、提出物を返却しても取りに来ない、提出物の添削に時間がかかる割に学生からの評判が良くない等が挙げられた。

学生の参加意識を高めるためには、どんな授業を望むのか学生から出させる、協調学習を取り入れる等の意見があった。また、教室での課題について、教員が解きながら解説するという手法で、学生の集中力を維持できるという今回の授業での事例も紹介された。さらに、課題は回答がたくさんあり、評価基準がしっかりしているものの例として、商品として成立するふたの閉じる箱という具体例での説明もあった。いずれも具体的な事例から改善策を探ることで、参加者には有意義な検討会となった。

(7) ポートフォリオ研究会

平成 22 年度に採択された特別経費による事業「動機付けと形成的評価を重視した学士課程教育開発-学生の振り返りと見通しを促すシステムの開発-」のために、全学共通科目等の教養教育の担当教員を対象として、理事（教育担当）より研究員の募集が行われ、研究会が組織された。この研究会へは、高等教育開発センターの新規授業・カリキュラム開発部門が主体的に関わっているが、本学の FD としても機能していることから、FD・授業評価部門の立場から研究会活動を支援した。

※研究会の開催状況は、新規授業・カリキュラム開発部門の報告を参照のこと。

(8) iPad を用いた協働学習支援システムのデモ体験・講習会

今年度、本学に導入される学習支援のシステムについて、操作法等やシステムの機能の説明とデモによる体験操作が行われた。概要は以下のとおりである。

日時 平成 24 年 3 月 1 日（月） 13 時～ 15 時まで
場所 教養教育棟 26 号教室（旦野原キャンパス）
講師 SCSK 株式会社 小森章彦氏、河内崇氏

<講習の概要>

講演会に先だって、本センター長山下茂教授から挨拶があり、大学教育での改革の必要性、今回導入されるシステムは日本では最先端であること等の紹介があった。

引き続き、SCSK 株式会社河内崇氏から、下記のようにシステムの概要と体験の指導が行われた。

- ・ iPad アプリ「協働学習支援システム」について
- ・ 操作方法（ログイン方法、科目選択、PDF ビュワー、電子黒板機能、教師と生徒間の画像、音声ファイル等の共有、データの転送、ホワイトボード上での共同作業）

上記の説明の後、参加者による以上の操作の後、参加者と講師の間で質疑応答が行われた。

また教師 PC のブラウザ上での科目設定、ファイルの送受信についても説明があった。

(9) ジェネリック・スキル測定【PROG テスト】結果報告会

大学の学士力、質保証等の観点から注目されているジェネリック・スキルについて、本学の有志学生を対象とした調査結果と、その結果に基づく今後の指導方針の提案が報告されました。概要は以下のとおり。

日時：2012年3月7日(水) 午前10時30分～12時00分

場所：教養教育棟27号教室

説明者：株式会社リアセック 代表取締役社長 松村直樹氏

<講演の概要>

- ① ジェネリック・スキルとして何を測定しているのか。
 - ・リテラシーの測定（情報収集力・情報分析力・課題発見力・構想力）
 - ・コンピテンシーの測定（環境への交渉力を、対課題・対人・対自己の三領域に分けて測定）
 - ・測定値の基準は、活躍中のビジネスマン（30代前半）を対象とした同様の測定結果に基づいて設定したものである。
- ② 本学学生の測定結果と提案
 - ・教育福祉科学部2年生は全国平均、文系の標準程度である。
 - ・3年生のデータは少数であるが、リテラシーは低いがコンピテンシーが非常に高い。
 - ・教職への就職希望の強い学生が、リテラシー、コンピテンシーともに高い。自己管理能力も高い。
 - ・本学学生の弱点の克服には問題解決学習が有効であろう。
 - ・リテラシー、コンピテンシーともに顕著に高い学生が数人いるので、大学の実績づくりのためにも、ひとつ上を目指すよう指導してはどうか。
 - ・学生IRも考慮して、各学年での測定を提案したい。

以上の講演の後、熱心な質疑応答が行われた。

- ①優秀な学生は自力で就職できるので、その下の学生に注力すべきではないか。
- ②質問項目の意図を読み取って回答することによるデータの信頼性は大丈夫か。
- ③SPIテストの弊害について。
- ④全国的な傾向からみた、学年進行に伴うリテラシーの伸びはどうか。
- ⑤入試形態と学業成績及びPROGテスト得点との対応関係。

(10) 学生による授業改善のためのアンケート調査

学生による授業評価の実施母体である教務部門会議の活動を支援するために、全学統一した授業評価アンケートの立案、作成及び調査結果の集計と分析を行い、報告書を発行した。

本年度刊行した報告書は「平成22年度教員による自己点検レポート集～学生による授業評価への対応～」 「平成21年度授業改善のためのアンケート調査結果報告書～学生による授業評価～」である。

平成23年前学期及び後学期に実施した「学生による授業評価」アンケート調査の調査対象は以下のとおりである。

前学期

- ・教養教育（全学教育機構）：主題科目（人文分野）
- ・教育福祉科学部：Cグループ(授業担当者の名前は～わ)
- ・経済学部：各学科3番目の講座の科目
- ・医学部：医学部からの提出科目

- ・工学部：全科目

後学期

- ・教養教育（全学教育機構）：主題科目（社会分野）
- ・教育福祉科学部：Aグループ（授業担当者の名前あ〜こ）
- ・経済学部：各学科最初の講座の科目，学科共通科目
- ・医学部：医学部提出科目
- ・工学部：全科目

①平成23年度前期授業改善のためのアンケート提出科目

【教養教育科目】		社会科教育学演習 I	(平田 利文)
思考と論理	(神崎 英紀)	構成ⅡA(b)	(廣瀬 剛)
江戸時代の日本と世界	(鳥井 裕美子)	くらしのデザイン	(廣瀬 剛)
社会認識と自己形成	(山岸 治男)	デザインⅢ (a)	(廣瀬 剛)
古典文学講読	(田畑 千秋)	造形表現Ⅰ	(廣瀬 剛)
心理学のお話	(深尾 誠)	基礎デザインⅠA(a)	(廣瀬 剛)
バロック音楽の世界	(松田 聡)	デザインⅡB(b)	(廣瀬 剛)
水彩画の魅力	(佐脇 健一)	環境物理学	(藤井 弘也)
大分美術史概論	(田中 修二)	基礎物質科学Ⅱ	(藤井 弘也)
日本語の特徴	(荻野 千砂子)	物理学Ⅱ	(藤井 弘也)
根拠への問い	(黒川 勲)	計算物理学入門	(藤井 弘也)
日本文化論	(大久保 渡)	基礎物質科学Ⅰ	(藤井 弘也)
図像学の世界	(高瀬 圭子)	物理学Ⅰ	(藤井 弘也)
大分県の歴史Ⅰ	(末廣 利人)	理科 (小)	(藤井 弘也)
やさしいEU入門	(城戸 照子)	理科実験Ⅰ	(藤井 弘也)
心理学概論	(藤田 敦)	物質科学基礎実験Ⅱ	(藤井 弘也)
大分大学を探ろう	(市原 宏一)	物理学実験Ⅱ(コンピュータ活用を含む。)	
器楽の楽しみ	(田中 星治)		(藤井 弘也)
美の世界	(貞包 博幸)	美術科教育演習Ⅰ	(藤井 康子)
人間と被服	(都甲 由紀子)	図画工作科指導法 (小)	(藤井 康子)
英語Ⅰ	(園井 千音)	現代の子どもと教育	(藤田 敦)
英語Ⅰ	(園井 千音)	教育心理学	(藤田 敦)
英語Ⅰ	(園井 千音)	教育実践の基礎	(藤田 敦)
英語Ⅱ	(園井 千音)	精神保健学Ⅰ	(藤田 長太郎)
英語Ⅱ	(園井 千音)	音楽科教育研究法	(藤原 志帆)
		ソルフェージュⅠ	(藤原 志帆)
【教育福祉科学部】		音楽基礎実技Ⅰ	(藤原 志帆)
公民科指導法 (高)	(平田 利文)	表現基礎演習Ⅰ	(藤原 志帆)
社会科教育学入門	(平田 利文)	芸術療法概論	(藤原 志帆)
比較教育文化論Ⅰ	(平田 利文)	近代文学演習	(藤原 耕作)
社会科教育学演習Ⅲ	(平田 利文)	近代文学特講	(藤原 耕作)

国語科授業論	(堀 泰樹)	教育社会学演習	(山岸 治男)
国語科教育研究法	(堀 泰樹)	社会教育演習	(山岸 治男)
手話 I	(本多 みどり)	教育社会学	(山岸 治男)
最新発達心理学演習	(前田 明)	体験実習 I	(山岸 治男)
運動力学	(前田 寛)	言語・外国語 (仏) III	(山口 真紀)
日本理科教育史	(牧野 治敏)	言語・外国語 (仏) I a	(山口 真紀)
理科授業研究	(牧野 治敏)	言語・外国語 (仏) I b	(山口 真紀)
現代芸術事情	(松田 聡)	法律学特講	(山崎 栄一)
音楽史 II	(松田 聡)	法律学演習	(山崎 栄一)
音楽理論・作曲法・音楽史基礎 (編曲法, 日本の伝統音楽及び諸民族の音楽を含む。)	(松田 聡)	法学概論 I	(山崎 栄一)
		法律学概論 I	(山崎 栄一)
表現と文化	(松田 聡)	教育学研究法 I	(山崎 清男)
音楽鑑賞法 I	(松本 正)	教育制度・経営論	(山崎 清男)
芸術と鑑賞 I	(松本 正)	教師学	(山崎 清男)
音楽科教育特講	(松本 正)	現代の教育課題	(山崎 清男)
地域芸術文化研究	(松本 正)	教育行政学	(山崎 清男)
表現教育概論	(松本 正)	マルチメディア情報処理	(山下 茂)
英語コミュニケーション I (ミッシェル ポール)	(ミッシェル ポール)	情報処理演習 I	(山下 茂)
人格心理学	(溝口 剛)	体育学研究法 I	(吉岡 義正)
小学校外国語活動指導法	(御手洗 靖)		
英語の社会スキル A	(御手洗 靖)	【経済学部】	
英語コミュニケーションスキル A	(御手洗 靖)	社会保障論	(阿部 誠)
環境教育	(三次 徳二)	フランス文化論	(安田 俊介)
生活環境福祉関連外書講読	(三次 徳二)	租税論	(井田 知也)
環境教育演習	(三次 徳二)	経済学 II	(井田 知也)
地質学概論	(三次 徳二)	情報監査論 I	(越智 学)
地球科学	(三次 徳二)	経済学 I	(下田 憲雄)
栄養学	(望月 聡)	原価計算論 I	(加藤 典生)
スポーツ栄養学	(望月 聡)	簿記 III	(加藤 典生)
人間栄養学	(望月 聡)	異文化間コミュニケーション論 I	(柿原 武史)
家庭 (小)	(望月 聡)	簿記 I	(椛田 龍三)
現代生活論	(望月 聡)	会計学 I	(椛田 龍三)
日本史演習	(八木 直樹)	経済学 III	(丸山 武志)
日本史特講 I	(八木 直樹)	証券論	(金 珍奎)
児童福祉論 I	(矢頭 美子)	財政理論	(小野 宏)
児童・家庭福祉論	(矢頭 美子)	産業と経済 I	(相浦 洋志)
英語教育演習 II	(柳井 智彦)	管理会計論 I	(大崎 美泉)
社会教育課題研究	(山岸 治男)	会社会計論 I	(中村 美保)
社会教育特講 III	(山岸 治男)	国際会計論 I	(田中 敏行)
		簿記 I	(田中 敏行)

経営学入門	(片山 准一)	化学英語演習 I (HARRAN THOMAS JAMES)	
情報社会論 I	(豊島 慎一郎)	化学英語演習 I (HARRAN THOMAS JAMES)	
経済政策論 I	(高見 博之)	身体運動機能学	(岡内 優明)
		応用解析Ⅲ	(沖野 隆久)
【医学部】		応用解析Ⅳ	(沖野 隆久)
小児・母性疾病論	(穴井 孝信)	機構力学	(今戸 啓二)
小児看護学概論	(宮崎 史子)	材料力学	(今戸 啓二)
母性看護方法論Ⅱ	(水谷 幸子)	福祉機器工学 I	(今戸 啓二)
母性看護学概論	(水谷 幸子)	メカトロニクスⅡ	(小川 幸吉)
老年看護学概論	(三重野 英子)	電気回路Ⅱ	(小川 幸吉)
成人慢性期看護方法論Ⅱ	(脇 幸子)	電気工学 I	(小川 幸吉)
老年看護方法論Ⅱ	(三重野 英子)	システム解析	(松尾 孝美)
基礎看護技術Ⅱ	(宮崎 伊久子)	現代制御工学	(松尾 孝美)
小児看護方法論Ⅱ	(宮崎 史子)	情報処理概論	(松尾 孝美)
		人間システム信号処理	(上見 憲弘)
		電子回路Ⅱ	(上見 憲弘)
【工学部】		人間システム工学	(上見 憲弘)
電気回路Ⅱ	(高坂 拓司)	人間工学	(前田 寛)
流体工学 I	(山田 英巳)	Cプログラミング	(池内 秀隆)
流れ学 I	(山田 英巳)	応用解析Ⅱ	(福田 亮治)
材料強度学 I	(土居 滋)	応用解析Ⅲ	(福田 亮治)
弾性力学	(土居 滋)	応用解析Ⅱ	(福田 亮治)
電気理論基礎	(濱本 誠)	就業力の育成	(石川 雄一)
電磁気学 I	(濱本 誠)	分析化学	(井上 高教)
プラズマ工学	(濱本 誠)	機能物質科学	(宇田 泰三)
基礎数学	(開 憲明)	物理化学 I	(永岡 勝俊)
解析学Ⅱ	(開 憲明)	高分子化学Ⅱ	(氏家 誠司)
波動と光	(後藤 勝)	基礎理論化学 I	(大賀 恭)
物理学基礎	(後藤 勝)	原子と分子	(大賀 恭)
力学 I	(後藤 善友)	電気化学	(津村 朋樹)
図学	(今永 和浩)	原子と分子	(飯尾 心)
力学 I	(今野 宏之)	セラミックス化学	(豊田 昌宏)
技術者倫理	(佐藤 光雄)	材料力学基礎・演習	(後藤 真宏)
測量学実習	(児玉 伸彦)	材料と弾性の力学	(後藤 真宏)
力学 I	(小林 正)	プログラム言語演習	(石松 克也)
物理学基礎	(小林 正)	伝熱学 I	(田上 公俊)
建築施工学	(上田 賢司)	機械製図	(木下 和久)
情報論理学 I	(藤田 米春)	機械工作法	(木下 和久)
情報論理学	(藤田 米春)	機械設計学基礎	(木下 和久)
建築法規	(末成 祐二)	機械工学概論 I	(木下 和久)
物理学基礎	(野本 幸治)		

機械力学基礎・演習	(劉 孝宏)	応用プログラミング演習Ⅱ	(大城 英裕)
流体力学基礎・演習	(濱川 洋充)	人工知能プログラミング	(中島 誠)
システム制御基礎	(濱川 洋充)	代数学Ⅱ	(田中 康彦)
流体工学Ⅰ	(栗原 央流)	代数学Ⅰ	(田中 康彦)
	(濱川 洋充)	基礎数学	(田中 康彦)
構造力学Ⅱ	(井上 正文)	解析学Ⅱ	(田中 康彦)
建築耐震システム	(菊池 健児)	基礎プログラミング	(二村 祥一)
鉄筋コンクリート構造	(菊池 健児)	データベースシステム	(二村 祥一)
材料力学	(佐藤 嘉昭)	解析学Ⅰ	(末竹 千博)
建築構法	(佐藤 嘉昭)	代数学Ⅱ	(末竹 千博)
基礎構造	(佐藤 嘉昭)	基礎数学	(末竹 千博)
建築総論	(佐藤 誠治)	知識表現論	(末田 直道)
都市計画	(佐藤 誠治)	データサイエンス基礎	(和泉 志津恵)
建築計画設計演習Ⅱ	(佐藤 誠治)	データサイエンス演習	(和泉 志津恵)
建築CAD製図Ⅱ	(佐藤 誠治)	電磁気学Ⅳ	(榎園 正人)
建築設備計画Ⅰ	(真鍋 正規)	電気電子計測工学	(榎園 正人)
建築材料	(大谷 俊浩)	人間システム計測工学	(榎園 正人)
建築環境計画Ⅰ	(大鶴 徹)	電力エネルギー工学	(金澤 誠司)
建築環境工学Ⅰ	(富来 礼次)	電気回路Ⅰ	(金澤 誠司)
建築英語	(富来 礼次)	電気回路Ⅲ	(戸高 孝)
コンピュータプログラミング	(富来 礼次)	電気機器工学Ⅱ	(戸高 孝)
福祉環境計画	(鈴木 義弘)	電気工学概論Ⅰ	(戸高 孝)
建築計画Ⅰ	(鈴木 義弘)	電気電子数学Ⅱ	(市來 龍大)
情報科授業論	(行天 啓二)	電気電子制御工学Ⅰ	(柴田 克成)
情報構造論	(伊藤 哲郎)	電気電子数学Ⅰ	(柴田 克成)
計算機科学概論	(越智 義道)	通信工学	(秋田 昌憲)
代数学Ⅱ	(高阪 史明)	音響工学	(秋田 昌憲)
数値解析Ⅱ	(高阪 史明)	電気電子工学入門	(秋田 昌憲)
基礎数学	(高阪 史明)	電磁気学Ⅰ	(大久保 利一)
解析学Ⅱ	(高阪 史明)	電気機器設計・製図	(槌田 雄二)
情報ネットワーク	(西野 浩明)	電子回路Ⅱ	(緑川 洋一)
プログラミング言語処理系	(川口 剛)	計算機工学Ⅰ	(緑川 洋一)
計算機システムⅠ	(川口 剛)	基礎電磁気学	(近藤 隆司)
計算機アーキテクチャⅠ	(川口 剛)	電気工学概論	(西嶋 仁浩)
情報システム概論	(川口 剛)	情報理論	(田中 充)

②平成23年度後期授業改善のためのアンケート提出科目

【教養教育科目】		日本国憲法	(山崎 栄一)
教育の社会学	(長谷川 祐介)	近現代の日本をどうみるか	(合田 公計)

財務諸表の読み方	(越智 学)	国語学演習	(荻野 千砂子)
地域観光政策論	(岡 達哉)	国語学特講	(荻野 千砂子)
交通からみた地域社会	(大井 尚司)	数学特講Ⅱ	(家本 宣幸)
仕事と社会	(石井 まこと)	位相入門	(家本 宣幸)
企業経営と会計	(加藤 典生)	位相幾何学Ⅰ	(家本 宣幸)
消費者と企業	(松隈 久昭)	心理学特別研究	(河野 伸子)
成人教育方法入門	(中川 忠宣)	基礎ゼミⅢ (心理)	(河野 伸子)
マルチメディアとコミュニケーション	(市原 靖士)	生涯発達心理学	(河野 伸子)
日本国憲法	(青野 篤)	公的扶助論	(垣田 裕介)
経済と倫理	(佐藤 隆)	絵画演習	(久間 清喜)
会計と社会	(中村 美保)	絵画ⅡB(b)	(久間 清喜)
現代国際政治と日本	(鄭 敬娥)	図画工作 (小)	(久間 清喜)
企業会計の基礎	(大崎 美泉)	絵画ⅢB(b)	(久間 清喜)
経営学の基本問題	(片山 准一)	造形表現Ⅱ	(久間 清喜)
電気も車もないアーミッシュ社会	(丸山 武志)	絵画基礎 (b)	(久間 清喜)
現代の社会と教育	(伊藤 安浩)	表現基礎実習 AⅠ(デッサン)	(久間 清喜)
		版画	(久間 清喜)
		漢文学演習	(牛尾 弘孝)
		漢文学講読	(牛尾 弘孝)
【教育福祉科学部】		アメリカとアメリカ文学Ⅱ	(金子 光茂)
くらしの経済学	(阿部 誠)	アメリカとアメリカ文学	(金子 光茂)
経済学概論Ⅱ (含国際経済)	(阿部 誠)	声楽Ⅱ (日本の伝統的な歌唱を含む。)	
小学校授業論	(伊藤 安浩)		(栗栖 由美子)
教育方法・技術論	(伊藤 安浩)	声楽Ⅳ	(栗栖 由美子)
教育課程・方法論	(伊藤 安浩)	グループ表現Ⅰb	(栗栖 由美子)
教育学研究法Ⅱ	(伊藤 安浩)	コーラスⅠb	(栗栖 由美子)
ソーシャルワーク論Ⅰ	(衣笠 一茂)	コーラスⅡb	(栗栖 由美子)
スクールソーシャルワーク	(衣笠 一茂)	合唱Ⅱ	(栗栖 由美子)
地域福祉論	(衣笠 一茂)	合唱Ⅳ	(栗栖 由美子)
地域福祉論Ⅱ	(衣笠 一茂)	合唱Ⅵ	(栗栖 由美子)
社会福祉援助技術演習ⅡA	(衣笠 一茂)	合唱Ⅷ	(栗栖 由美子)
ソーシャルワーク演習Ⅱ	(衣笠 一茂)	表現構成演習Ⅱb	(栗栖 由美子)
社会福祉援助技術演習ⅡB	(衣笠 一茂)	芸術表現応用 BI (声楽) a	(栗栖 由美子)
経済学概論Ⅱ(含国際経済)	(井田 知也)	表現基礎実習 BI(声楽)b	(栗栖 由美子)
英語史と文学	(稲用 茂夫)	再現芸術	(栗栖 由美子)
英語と英文学の発達	(稲用 茂夫)	声楽Ⅵ	(栗栖 由美子)
知的障害児の教育と指導法	(衛藤 裕司)	肢体不自由児の心理・生理・病理	
自閉症児の心理と指導法	(衛藤 裕司)		(古賀 精治)
教育本質論	(岡田 正彦)		(古賀 精治)
国語学概論	(荻野 千砂子)	特殊教育論	(古賀 精治)

知的障害者教育総論	(古賀 精治)	情報通信	(大岩 幸太郎)
障害児教育演習	(古賀 精治)	コンピュータ概論	(大岩 幸太郎)
レクリエーション指導論	(古城 建一)	情報科学 I	(大岩 幸太郎)
心理学特別研究	(古城 和敬)	教育情報科学	(大岩 幸太郎)
教師学	(古城 和敬)	情報統計学	(大隈 ひとみ)
教育社会心理学	(古城 和敬)	数理統計 I	(大隈 ひとみ)
家庭科指導法 (中)	(後藤 香代子)	統計学 I	(大隈 ひとみ)
体験実習 II (社会福祉)	(工藤 修一)	情報数学演習	(大隈 ひとみ)
老人福祉論 II	(工藤 修一)	応用理科 II	(大上 和敏)
高齢者福祉論 II	(工藤 修一)	基礎環境化学実験 II	(大上 和敏)
宗教学	(黒川 勲)	社会学概論 II	(大杉 至)
比較思想論 I	(黒川 勲)	英書講読	(大杉 至)
哲学概論	(黒川 勲)	現代社会論 II	(大杉 至)
哲学概論 I	(黒川 勲)	世界史演習 I	(大嶋 誠)
技術科指導法 (中)	(市原 靖士)	西洋文明論 II	(大嶋 誠)
マルチメディアコミュニケーション演習 II	(市原 靖士)	世界史概説 I	(大嶋 誠)
	(市原 靖士)	西洋史概説	(大嶋 誠)
教育メディアとコンピュータ	(市原 靖士)	数学特講 II	(大野 貴雄)
工業科授業論	(市原 靖士)	基礎解析演習 II	(大野 貴雄)
教育メディアとコンピュータ	(市原 靖士)	多変数解析	(大野 貴雄)
教育哲学演習	(神崎 英紀)	解析学 II	(大野 貴雄)
基礎ゼミ II (スポーツ・健康)	(石橋 健司)	基礎解析	(大野 貴雄)
運動生理学実習 (トレーニング法演習を含む。)	(石橋 健司)	金属加工学 (製図及び実習を含む。)	(池崎 八生)
健康スポーツ福祉論	(石橋 健司)	情報と職業	(池崎 八生)
生涯スポーツ総合演習 I	(石橋 健司)	コンピュータ制御入門	(池崎 八生)
住居学 I (製図を含む)	(川田 菜穂子)	社会言語学	(池内 宣夫)
住生活論 (製図を含む)	(川田 菜穂子)	英書講読	(池内 宣夫)
生活総合演習	(川田 菜穂子)	言語・外国語 (独) IV	(池内 宣夫)
住居学演習	(川田 菜穂子)	言語・外国語 (独) II a	(池内 宣夫)
住居計画学	(川田 菜穂子)	調理学	(梅木 美樹)
柔道	(川内谷 一志)	高齢者・障害者の食生活	(梅木 美樹)
数学特講 II	(川寄 道広)	高齢者・障がい者の食生活	(梅木 美樹)
教育数学 II	(川寄 道広)	アートセラピー演習 II	(麻生 和江)
生物学実験 II (コンピュータ活用を含む。)	(泉 好弘)	表現指導演習	(麻生 和江)
	(泉 好弘)	表現教育演習 I	(麻生 和江)
生物学 I	(泉 好弘)	表現教育演習 II	(麻生 和江)
データベース基礎	(大岩 幸太郎)	舞踊概論	(麻生 和江)
プログラミングと言語	(大岩 幸太郎)	アートマネジメント II	(麻生 和江)

総合アートマネジメント演習	(麻生 和江)	症状マネジメント	(井上 亮)
ダンスⅠ	(麻生 和江)	地域看護活動展開論	(井手 知恵子)
ダンスⅡ	(麻生 和江)	家族看護学	(井手 知恵子)
ダンスⅢ	(麻生 和江)	看護理論	(佐藤 和子)
身体表現実習	(麻生 和江)	生活行動論Ⅱ	(志賀 たずよ)
舞踊創作演習	(麻生 和江)	災害看護論	(志賀 たずよ)
舞踊表現研究Ⅰ	(麻生 和江)	クリティカル・ケア	(末弘 理恵)
舞踊表現研究Ⅱ	(麻生 和江)	成人急性・回復期看護方法論	(末弘 理恵)
舞踊表現研究Ⅲ	(麻生 和江)		
舞踊表現研究Ⅳ	(麻生 和江)	【工学部】	
		伝熱学Ⅱ	(岩本 光生)
【経済学部】		電力システム工学	(後藤 雄治)
統計学Ⅱ	(西村 善博)	エネルギー変換工学	(後藤 雄治)
ビジネス英語A	(ホワイト クリストファー ミル)	制御工学Ⅱ	(後藤 雄治)
外国書講読AⅡ	(井田 知也)	電子回路	(江崎 忠男)
経済学Ⅱ	(井田 知也)	電気物性工学Ⅱ	(江崎 忠男)
マクロ経済学Ⅱ	(宇野 真人)	情報処理	(高坂 拓司)
企業組織法Ⅱ	(宇野 稔)	電気回路Ⅰ	(高坂 拓司)
法学入門	(宇野 稔)	工業力学	(山田 英巳)
地域経営論Ⅱ	(奥田 憲昭)	流体工学Ⅱ	(山田 英巳)
ゲーム理論	(下田 憲雄)	流れ学Ⅱ	(山田 英巳)
経済学Ⅰ	(下田 憲雄)	材料強度学Ⅱ	(土居 滋)
公的扶助論	(垣田 裕介)	先端科学材料システム工学	(土居 滋)
地域発展論Ⅱ	(宮町 良広)	機械工作法	(齋藤 晋一)
経営学入門	(幸 光善)	伝熱応用設計	(齋藤 晋一)
都市経営論Ⅱ	(高島 拓哉)	電磁気学Ⅱ	(濱本 誠)
経済学Ⅲ	(佐藤 隆)	工業英語	(HARRAN THOMAS JAMES)
農村発展論Ⅱ	(山浦 陽一)	化学英語演習Ⅱ	(園井 千音)
経営情報論Ⅱ	(松岡 輝美)	応用解析Ⅳ	(沖野 隆久)
マーケティング論Ⅱ	(松隈 久昭)	応用解析Ⅲ	(沖野 隆久)
比較地域分析Ⅱ	(城戸 照子)	メカトロニクスⅣ	(今戸 啓二)
法学入門	(青野 篤)	福祉機器工学Ⅱ	(今戸 啓二)
ミクロ経済学Ⅱ	(村山 悠)	電気工学Ⅱ	(小川 幸吉)
基礎経営論Ⅱ	(藤原 直樹)	電気回路Ⅰ	(小川 幸吉)
株式会社論Ⅱ	(片山 准一)	言語意思表示	(松田 修明)
組織革新論Ⅱ	(本谷 るり)	制御工学Ⅰ	(松尾 孝美)
		人間システム制御工学	(松尾 孝美)
【医学部】		メカトロニクスⅠ	(松尾 孝美)
外科系疾病論	(井上 亮)	制御工学Ⅰ	(松尾 孝美)

人間システム制御工学	(松尾 孝美)	建築環境工学Ⅱ演習	(大鶴 徹)
電子回路Ⅰ	(上見 憲弘)	建築環境計画Ⅲ	(富来 礼次)
聴覚音声工学	(上見 憲弘)	建築設計演習	(富来 礼次)
生体運動制御論	(前田 寛)	建築設計演習	(富来 礼次)
メカトロニクスⅢ	(池内 秀隆)	建築ワークショップ	(富来 礼次)
CAD 概論	(池内 秀隆)	建築設計演習	(富来 礼次)
確率統計	(福田 亮治)	建築設計演習	(富来 礼次)
応用解析Ⅱ	(福田 亮治)	住居論	(鈴木 義弘)
確率統計	(福田 亮治)	遺伝生化学	(一二三 恵美)
機器分析	(井上 高教)	リハビリテーション工学	(永野 敬喜)
生命科学	(宇田 泰三)	基礎数学	(開 憲明)
応用化学入門	(石川 雄一)	ソフトウェア工学	(吉田 和幸)
有機化学Ⅲ	(石川 雄一)	ソフトウェア工学Ⅰ	(吉田 和幸)
物質の状態と変化	(大賀 恭)	情報回路論	(吉田 和幸)
基礎理論化学Ⅱ	(大賀 恭)	解析学Ⅰ	(佐藤 静)
無機化学Ⅱ	(津村 朋樹)	応用解析Ⅰ	(佐藤 静)
物質の状態と変化	(飯尾 心)	代数学Ⅰ	(佐藤 静)
分離工学	(平田 誠)	塑性設計法	(山本 伸二)
機械計測工学	(栗原 央流)	力学Ⅱ	(小林 正)
材料力学	(後藤 真宏)	触媒化学	(西口 宏泰)
機械工学基礎・演習	(後藤 真宏)	システム制御基礎	(中江 貴志)
機構学	(山本 隆栄)	機械設計製図	(中江 貴志)
工作機械・生産工学	(木下 和久)	建築構造設計Ⅱ	(田中 昭洋)
機械力学	(劉 孝宏)	倫理感性工学	(福永 圭悟)
流体力学	(濱川 洋充)	基礎電磁気学	(野本 幸治)
流体工学Ⅱ	(濱川 洋充)	応用熱力学	(濱武 俊朗)
木質構造	(井上 正文)	情報数学	(越智 義道)
鉄骨構造	(井上 正文)	データサイエンス基礎Ⅰ	(越智 義道)
構造解析	(菊池 健児)	オペレーションズ・リサーチ基礎	(越智 義道)
建築構造設計Ⅰ	(黒木 正幸)	数理計画論Ⅰ	(越智 義道)
リハビリテーション工学	(佐藤 嘉昭)	数値解析Ⅰ	(原 恭彦)
建築計画Ⅱ	(佐藤 誠治)	多変量解析	(原 恭彦)
建築計画設計演習Ⅰ	(佐藤 誠治)	数値解析演習	(原 恭彦)
都市システム工学	(小林 祐司)	視覚画像工学	(行天 啓二)
建築環境計画Ⅱ	(真鍋 正規)	マルチメディア処理	(行天 啓二)
構造力学Ⅰ	(大谷 俊浩)	画像処理	(行天 啓二)
構造力学Ⅰ演習	(大谷 俊浩)	解析学Ⅰ	(高阪 史明)
建築材料実験	(大谷 俊浩)	代数学Ⅰ	(高阪 史明)
建築環境工学Ⅱ	(大鶴 徹)	コンピュータグラフィックス	(西野 浩明)

オペレーティング・システム	(西野 浩明)	プラズマ工学	(金澤 誠司)
オペレーティング・システム I	(西野 浩明)	電気回路 II	(金澤 誠司)
情報英語	(西野 浩明)	電気電子材料	(戸高 孝)
計算機アーキテクチャ II	(川口 剛)	電気機器工学 I	(戸高 孝)
計算機システム II	(川口 剛)	プログラミング	(柴田 克成)
アルゴリズム論	(中島 誠)	電気電子制御工学 II	(柴田 克成)
解析学 I	(田中 康彦)	通信方式	(秋田 昌憲)
代数学 I		電気工学概論 II	(秋田 昌憲)
解析学 I	(末竹 千博)	電気回路 IV	(大久保 利一)
代数学 I	(末竹 千博)	電磁気学 II	(大久保 利一)
代数学 II	(末竹 千博)	電子回路 I	(緑川 洋一)
人工知能基礎	(末田 直道)	熱力学	(近藤 隆司)
電磁気学 III	(榎園 正人)	電磁波工学 II	(田中 充)

(11)「英語スピーチコンテスト」

日 時：2011 年 11 月 6 日(日) 13 時～16 時

場 所：教養教育棟 35 号教室 (旦野原キャンパス)

昨年度までは、この事業は FD・授業評価部門の担当であったが、事業の内容が本部門の活動目的とはそぐわないとの議論があり、本年度は部門の活動とは切り離して実施した。しかし、このコンテストのための学長裁量経費が本センターに配分されたので、部門の事業ではなく本センター単独の事業として企画実施した。ここにその概要を記した。

目的

本学学生の「外国語を含むコミュニケーション能力の向上を図る教育を充実させる。特に、英語については、『仕事で英語が使える』人材の育成を目指して教科内容等の改善を図る。」「語学能力としての英語、学習内容と関連した英語能力、プレゼンテーション能力の育成をはかる」ことを目的として、本コンテストを実施した。また、英語をもっと楽しく活用するという観点から、スピーチやプレゼンテーション以外の発表形式も新たに採用し、パフォーマンス部門を設定した。この部門は日本人だけでなく、外国人留学生にも参加枠を広げることで、異文化コミュニケーションの契機とする期待も込めて開催した。

概要

本コンテストは、山崎清男理事（教育担当）より、これからの社会では英語はますます重要になること、文字による理解だけでなく、言葉として自由に使えるようになることは必須であること、みなさんの活躍に期待している、との挨拶から始まった。

続いて司会者から進行についての説明があった。審査は、スピーチ部門、プレゼンテーション部門については本学英語担当教員による審査、パフォーマンス部門は参加者の投票による審査であると説明された。また、本日の審査員として、シヨーン・チドウロウ先生（医学部）、佐々木 朱美先

生（工学部）、菅沼 勝彦先生（国際教育研究センター）の3名が紹介された。

各部門の発表者は以下のとおりである。

スピーチ部門

発表順	氏名	学部	タイトル
1	はらだ ぎんじゅ 原田 銀樹	医学部	A Valuable Experience in India
2	さかた ゆきよ 坂田 幸世	医学部	The Problems of Building Rapport between Patients and Medical Staff in Japan
3	あべ みつまさ 安部 光政	工学部	Key to Effective Math Remediation
4	もり たいき 森 大輝	教育福祉科学部	BOND ~ The Most Expensive Treasures We Have ~
5	なかつち さおり 仲地 里織	医学部	Young People Today

パフォーマンス部門

発表順	氏名	学部	タイトル
1	キム ムンジョン	工学部	Song “桜（いきものがかり）”
2	アリダ ノル サキナ	経済学部	Song “IF I AIN'T GOT YOU (Alicia Keys) “
3	うちき としお 内木 敏雄	医学部	Paper Theater
4	ふくやま ひかり 福山 光	医学部	My yoga practice

プレゼンテーション部門

発表順	氏名	学部	タイトル
1	はせがわ しょういち 長谷川 翔一	医学部	Differences between German and Japanese
2	おおいずみ ともや 大泉 智哉	医学部	Japanese in Hawaii
3	おおば としき 大庭 隼希	工学部	Present and Future of the Mobile Industry
4	くずはら あきら 葛原 彰	教育福祉科学部	Necessity of Gay Education

それぞれの発表は10分以内の制限時間をフルに使った熱の入ったものであった。

審査員の3名の教員による審査により、スピーチ部門、プレゼンテーション部門について発表された。パフォーマンス部門については、会場審査員の投票による結果が発表された。

審査結果に基づき、表彰式では、北野正剛学長より、各受賞者に賞品と副賞が手渡された。

表彰式の後、学長から、本学での英語教育、コミュニケーション能力育成のためにさらに尽力して欲しいとの講評があり、最後に、学長、発表者、審査員がそろって記念撮影し、コンテストの全行事を終了した。

(12) センター業務に関わる研修報告（協議会、学会、研究会都への参加）

本部門の専任教員として、教育改善・教育改革に関する学会や研修会等へ参加し、全国的な傾向や他大学での取り組みに関する情報を収集する責務がある。ここでは、本年度に参加した学会、研修会等について、部門活動と関係の深い内容について以下にその概要を報告する。なお、同一の会

場内で複数のセッションが同時に開催されている場合には、本部門長が参加したセッションについてのみ記述した。

① 大学教育学会第33回全国大会

日程 2011年6月4日(土)5日(日) 桜美林大学

シンポジウム1「現代における生涯発達と大学教育」

- ・「キャリア形成とライフサイクル～「多様性・多重性」における「全体としての自己」に向き合うために～」
武庫川女子大学 山崎洋子
- ・「大学教育のジェネリックスキルと教育方法」
京都精華大学 筒井洋一
- ・「現代における生涯発達と大学教育～立教セカンドステージ大学の試み～」
立教セカンドステージ大学 足立寛

基調講演

「何のため、誰のための質保証」
桜美林大学学長 佐藤東洋士

シンポジウムⅡ「大学教育における質保証の実践的展開とその意味」

- ・「3つのポリシーの策定と一環構築によるカリキュラムの質保証」
愛媛大学 佐藤浩章
- ・「GPA 制度本格導入と成績評価を考える」
一橋大学 筒井泉雄
- ・「学生調査の開発とマルチレベル FD との連動による教育の質保証」
愛媛大学 山田剛史

ラウンドテーブル

「ライティング教育を基点にした学習支援と FD 活動の展開 (3)

企画者：井上千以子 (桜美林大学), 小笠原正明 (筑波大学), 米澤誠 (国立情報学研究所)
土持法一 (帝京大学), 井下理 (慶應義塾大学), 芝原宣幸 (日本橋学館大学)
田部井潤 (東京国際大学)

研究発表

- ・「知の共創サイクルを推進するファカルティ・デベロップメント」
帝京大学 井上史子, 土持法一 立命館大学 安岡高志
- ・「学生参加型 FD・教育改善の持続性に関する研究」
大阪大学 服部憲児
- ・「大阪府立高専におけるティーチングポートフォリオの取り組みとその発展」
大阪府立高専 北野健一

② 「SPOD フォーラム 2011 愛媛大学」

日時 2011年8月23日(火)～8月26日(金)

場所 愛媛大学城北キャンパス (愛大ミュージズ)

第1日

「DP・CP・APの開発と一貫性構築の進め方」

発表者：小林直人 (愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室長)

- ・ DP, CP について, 愛媛大学の事例を元に小林先生による講義とワークショップ
- ・ AP もふくめてポリシー三者の統一が肝要であること。

- ・ DP の設定には、担当者達が 5, 6 回のワークショップを繰り返すことで確定した。
- ・ 私学では助成金の必要条件になっている。
- ・ DP は薬で言うと効能書き。商品価値を高めるために必要な文章。だから、嘘も書けない。
- ・ 教育コーディネータ制度。DP にもとづくシラバスの作成。
- ・ 学部・学科での CP 作成とカリキュラムチェックリスト策定作業によりシラバスの再認識
- ・ カリキュラムマップ作成とアドミッションポリシーの見直し作業

第 2 日

「ニーズに合わせた初任者研修作成講座」

発表者：吉田博，宮田正徳（徳島大学）

- ・ 初任者研修プログラムの設計ワークショップ
- ・ 事項におけるニーズを書き出し，支援，解決の優先度を整理し，研修プログラムを作成する。
- ・ ワークショップで手順は明確に伝わった。しかし，新任者に何が必要かの議論はない。
- ・ 各大学で調査が必要であると感じた。（新任者からの視点とベテランからの視点が必要）

「はじめてのラーニングポートフォリオ」

発表者：山内一祥（佐賀大学）

- ・ 能動的学習を促すためのシステム。しかし，実態は DP の担保としてのエビデンス
- ・ 佐賀大学の事例：入力は Web から。項目は佐賀大学間掲げる学士力を具体化したもの。
- ・ 入学時の状況，学習実績（成績等は自動で入力される），学習時間，生活時間等
- ・ 入力にあたっては学生の負担感増があるが，明確な根拠と成績の実感により回避できる。
- ・ 単なるログにならぬように，チュートリアル，カリキュラム整理に活用。

第 3 日

「事例から学ぶ危機管理—東日本大震災の被災から授業開始まで—」

発表者：阿部光伸（東北文化学園大学），上甲功治，石川尚（愛媛大学）

- ・ 東日本大震災の事例紹介と，それに基づき大学の授業復旧に向けての計画作成をワークショップで学ぶ。
- ・ 東北大学では比較的実害は少なかったが，授業再開へは様々な困難があった。
- ・ 危機管理に関しては，先年のインフルエンザ（パンデミック）への対応を踏襲。
- ・ ワークショップでは復旧計画の作成を目標としたが，メンバーの意思統一に失敗し計画が作成できなかった。（ワークショップの負の面を体験できた）
- ・ 阪神淡路大震災を実施に経験した教員が作成した復旧計画は分かりやすく説得力のあるものだった。
- ・ 本学（大分大学）ではどのような危機管理，危機対応マニュアルがあるのか（ないのか）。

「何が学生の学びを促進するのか？—授業コンサルタントの事例から—」

発表者：城間祥子，大竹奈津子（愛媛大学）

- ・ 授業コンサルテーションの模擬体験。
- ・ 愛媛大学で実施している授業コンサルテーションの事例を紹介。その後，ワークショップ。
- ・ 授業の良いところ，悪いところが書かれた短冊（約 100 枚）を KJ 法で分類。
- ・ 授業の実態と改善点がおぼろげながら見えてくる。

- ・グループのメンバーが良かったため、非常に前向きの、しかもニュートラルな議論ができた。
- ・コンサルタントから一方的に授業改善の示唆を受けるだけでなく、KJ法による分類作業だけでも自分の授業を振り返る契機になると感じられた。

○講師は愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室の助教

手法に目新しいものはないが、若いスタッフによるこの活動の継続は、将来的には期待できそう。

<全体への感想> 今回のフォーラムは、どのセッションもワークショップが設定されており、情報は少ないが具体的に研修できた。名刺の消耗が激しかった。

このような取り組みを知らなかったという愛媛大学の先生もおられたが、全学的にFDを普及させようという意気込みが十分に伝わってきた。

③第60回 九州地区一般教育研究協議会

期日 平成23年9月9日(金)～10日(土) 佐賀大学

統一テーマ「日本の大学に求められる教養教育の高度化と質保証」

第1日

一般教育研究協議会

基調講演 「日本の大学に求められる教養教育の高度化と質保証」

講師 小林傳司氏（大阪大学コミュニケーションデザインセンター教授）

講師紹介；京都大学では日高隆敏氏，東京大学大学院では村上陽一郎氏に師事。

福岡教育大学理科教育・南山大学を経て大阪大学

<現状と問題の所在として>

中教審答申（教養教育 H14 ・ 高等教育 H17 ・ 大学院 H17 ・ 学士課程教育 H20 ・ 大学院 H22 ）

教育再生懇談会（教育再生会議 H20 ）

経済産業省（社会人基礎力 H18 ）

<現状と将来へ向けての取り組みの兆し>

- ・ 21世紀の大学はユニバーサル社会に対応（以前は少数のエリート教育）
- ・ 大学院は研究者養成だけではなく高等教育の教員養成も
- ・ 高度教養教育
 - 授業科目を他研究科の学生も受講可能なように内容をオープンにする（教養と言えるのかとの意見も）
- ・ 大学院が養成する人材像の明確化（研究者となるのは修了生の3分の1）
- ・ 知識基盤社会における人材の養成（アカデミックな研究者養成とは異なる）
- ・ 企業が求める人材への対応

<これからの教養教育のあり方は>

- ・ 従来の教養教育とは、古典の理解あるいは、入学者の学力差をならすための教育
- ・ エリートの養成から市民（新しい公共を支える）の要請へのシフト
- ・ 専門家は特殊な素人

- ・コミュニケーション能力の再検討
プレゼン・スキル修得の前に聞く力，伝達はコミュニケーションではない
合意形成無き共同の可能性を
- ・国際共通語としての英語（グロービッシュとは言わなかったが概念は同じ）
- ・知識とインターネット（90年代以前の情報は選別されたもの）
- ・参加型授業として
teaching から learning へ。教室のデザインが学習活動を規定する
活動させながらの学習，教養教育のアウトカムは死ぬまで分からない
大学外での智を導入せよ
- ・教養教育のアウトカムは死ぬまで分からないとは誰もが認める本音ではないか。

系列部会 科学リテラシー部会

「大学全入時代の物理学一般教育の試み」

発表者 巨海（おおみ）玄道氏（久留米工業大学教授）

学力テストのダブルピーク。成績下位集団では文系理系の履修歴は関係ない。そもそも勉強していない。分数，小数の計算がおぼつかない。答えを知らない問題には答えない。などの実態が紹介された。また，数学をきちんと学習している学生はどの科目も成績がよいのではないか。学習支援センターが機能していない（そもそも質問に来ない）。

「力学基礎・同演習における“未履修クラス”と“既履修クラス”の実態調査」

発表者 副島（そえじま）雄児氏（九州大学教授）他 2 名

力学基礎の授業に物理未履修クラスを設定。教師，学生ともに不満。クリッカーを使った授業。調査にクリッカーを使いすぎると学生に嫌気がさすようだ。

「大学生の天文学に関する素養と授業の効果」

発表者 藤原知子氏（九州大学助教）他 1 名

九州大学における全学教育科目の概要と，総合科目「遙かなる宇宙への誘い」の履修状況と内容の概説。自然科学だけでなく，文学，歴史，思想哲学，工学へも関連させた講義と受講前後の知識テストの比較。授業内容の説明がほとんどで，授業効果については深い検討は無かった。

「文系学生の科学リテラシー育成を目的とした自然科学実験教材の検討と教育実践」

発表者 山田秀人氏（九州大学助教）他 5 名

実験実習を組み込んだ教養の授業についての実践。学生のやりたい授業を受けさせる意図で実施。しているが，理系教員の協力無しには出来ない授業。オムニバスで実践実習ではさらにクラスを細分化して実施。帰宅後も簡単な実験させている。

第 2 日

全体発表会

「地域連携による教育・研究の推進と教養教育」

発表者 山田裕司氏（宮崎大学准教授）

市民教育の定義づけ。宮崎大学での「宮大とっても元気！チャレンジ・プログラム」の実践事例。学内競争資金の授業であるが、資金を獲得した学生は外部資金にチャレンジする。それについても支援する。大分大学の学内完結の支援とは少し異なる。学部資金獲得が目的化しているように感じた。

「障がい者の就労支援に関する高等教育カリキュラムの開発-障がい者の就労支援コーディネータ養成-」

発表者 堀川悦夫氏（佐賀大学教授）

障がい者就労に関するコーディネータの養成講座を開設。障がい者職業総合センター（幕張）のカウンセラー養成課程を参考にカリキュラム設計。主題科目 4 科目(8 単位), 障がい者就労支援教育科目群 4 科目(8 単位)を設置。文科省教育改革事業であるが、はじめるにあたって文科省の説得が一番の障害。

他大学への授業提供や、学外講座とすることについて質疑応答があった。

「教養教育の評価と質保証」

発表者 高森智嗣氏（九州大学助教）

評価学の立場からの教養教育質保証への提言。各大学の認証評価報告書を見ると、優れた実績があるにもかかわらず自己評価の低いものがあるので、もったいない。ロジックモデルを適用した評価システムによる教養教育の見直しを提案。

今回の研究協議会で設定された系列別部会の名称は以下のとおりである。

- ①言語リテラシー部会、②情報リテラシー部会、③科学リテラシー部会、④健康教育部会
- ⑤学際教育部会、⑥教授・学習方法部会、⑦初年次・キャリア教育部会

④大学教育におけるジェネリックスキル講演会

「今、大学教育に求められるジェネリックスキル-社会に通用する力をいかに評価・育成するか-」

日時 平成 23 年 9 月 3 日(土) 13 時 00 分～17 時 40 分

場所 福岡電気ビル会議室

主催 河合塾，株式会社 RIASEC

河合塾谷口氏による挨拶では、本事業は5年前から立ち上げたもので、河合塾が手がけた動機をして、受験生が大学に入ってからどうなっているのか、また、リクルート社が調査していた、企業からの求人像について明らかにしたいとの意図であることの説明があった。あらに、第1回目の講演会をなぜ九州で第1回を開催したのかについては、試行の段階で多くの九州の大学から協力があったことなどの説明があった。

第1部 基調講演

講師 川嶋太津夫（神戸大学大学院教授）

- 高校と大学とが会する機会の重要性

大学が何をやっているのか、分厚い資料は読んでくれない。B4かA4の資料を毎月配布する

- 卒業後のキャリアの多様性
ポートフォリオ社会（何が出来るか、売り込み手段）
- 幼稚園の就園率と大学の進学率はほぼ同じ数値
- 転職率は七五三（中卒・高卒・大卒）
- ジェネリックスキルは「124 単位分のいくつ」ではなく 124 分の 124 で育成
ベンチマーク（到達目標）の設定。ポートフォリオ，PDP，自立的学習者の育成。
- Barnett R(英)による 大学で育成するコンピテンンスの変容
（非常に分かりやすい図解）

第2部 ジェネリックスキル測定の試行と分析の報告

講師 成田秀夫（河合塾） 松村直樹（リアセック）

- 予備校は 1998 年まで GOLDEN 7 基礎教育クラスがあったが、これ以来無くなった。
＝どこにも合格できない受験生がいなくなった
- 社会人基礎力の必要性（何を持って社会人基礎力というのか今ひとつ）
- 以下、ジェネリックスキル測定プログラムの詳細と結果
リテラシー領域 知識活用による課題解決
コンピテンシー領域 経験で修得する行動特性
基礎力測定テスト試行板 2010 年度（予備校出身者から募集）
リテラシー領域は従来の学校知に対応
コンピテンシー領域は課外学習に対応
測定項目については心理学調査の要素もあるので表現方法の改訂を継続
入試難易度とリテラシーは正の相関，女性が優勢。
コンピテンシーについては 4 年生で向上＝就活と関連か
評価と育成については大学の 3 ポリシーとの整合性をつける

第3部 大学の事例報告

- 九州国際大学法学部（元八幡大学）法学部長 山本啓一教授
入試 F ランク。リテラシーは低いがコンピテンシーは遜色ない
リテラシーは地頭の良さを測定しているようだ。
GPA 3 以上でもリテラシー 1, 2 がいる
成績の評価が間違っている
- 日本文理大学（元大分工業大学）人間力育成センター長 吉村充功教授
シラバスの改訂により育成する 4 つの力を評価対象に組み込んだ
GPA の高い学生が必ずしも優秀ではない＝GPA の社会的信用性
- 北九州市立大学 地域創生学群 真鍋和博教授
センター試験ではあまり差がつかない
集団面接を実施＝グループの中で活躍できる学生を入学させる
AP・CP・DP の連続に向けて（新しい学群の説明に終始した印象）

第4部 パネルディスカッション 「育成・評価のポイント」

- ジェネリックスキルの定義について
- 社会基礎力トレーニング，入社後のことまで大学で扱うのか
- PROGに論理能力の測定項目がはいついていないのではないのか
- コミュニケーション能力がペーパーで測定できるか
- ジェネリックスキルとアカデミックスキルとのギャップをどうするか
- 大学のユニバーサル化による問題
- 初年次教育でのオリエンテーションの必要性

かつては高等学校でトレーニングされていたことが，今はそれが出来ていない学生が多く入学している。その対策が必要。

大学で学んだことの応用力，転移，適用，適応を身につけさせる

- SPIテスト=就職のためのスタンダードテスト

⑤「改めてFDについて考える～組織的な取り組みに向けて～」

日程 2011年11月2日 14時10分～16時50分 名城大学

内容 第13回FDフォーラム「改めてFDについて考える～組織的な取組に向けて～」

内容が全く分からなかったので，郵送された案内を頼りに参加した。実施内容は学内FDを学外にも公開したものである。基本的に学内の教育実践を学内向けに報告している。

内容は以下のとおり。

第1部 基調講演「FDの義務化から3年～原点に立ち返って考える」

名古屋大学高等教育研究センター 中井俊樹准教授

第2部 名城大学の教育改善の取組 ～4つの実践例～

- ①現場触発型教育・学習による就業力の育成（経済学部）
- ②初年度理数基礎教育の充実と理工学ナビゲーションシステムによる理工学教育の質の保証
(理工学部)
- ③里山における生物多様性と化学的環境評価による実践的生物環境教育（農学部）
- ④英語実践力向上のための自立学習システム運営（人間学部）
- ⑤パネルディスカッション

※GP及び学内GPの報告をもとにした研修会であった。

⑥「ティーチング・ポートフォリオの導入・活用シンポジウム2011 in 佐賀大学」

日程 2011年11月18日(金)～19日(土) 佐賀大学

開会にあたって佐賀大学長より挨拶があった。佐賀大学でのTPについて，導入の難しさ，教員からの抵抗等があるが，質保証として推進している。TPの活用が最終目的ではないこと。佐賀大学は教育先導大学として独自性を発揮する，等の内容であった。

基調講演

講演1 「我が国の高等教育政策について—学士課程教育と質保証を中心に—」

講師 榎本剛（文部省高等教育局企画官(兼)高等教育政策室長）

講師の榎本氏は東大法学部卒。2000年の学士課程答申のとりまとめを担当。大学進学率は今年0.1%の減（専門学校進学，就職率が微増。地域差がある）。学士課程答申はつまみ食いされている現状である。トータルで見て欲しい。日本の大学は改革が進んではいるが，質保証の管理が緩い。以下，配付資料に沿って説明があった。

- この10年間の取り組みのまとめ

大学の課題：文科省HPのグラフは榎本氏が作成したもの

- 組織的な活動について

財政支援はGPから発展させたもの（個人の取り組み：GP→組織：財政支援）

就職との関係（エントリーシートを書いても面接に行けない学生がいる）

大学設置基準の改正はキャリア教育の義務化ではない

- 大学の使命の明確化（可視化・公開）

大学の機能別分科

平成17年答申の7つのうちのいくつかを選択することで大学の特徴を出すのではない。

重点部分を示すと言うこと。しなくてもよい項目はない。

大学は日本に800ある。同じものはない。様々なニーズに対応した教育研究活動を展開。

- 上記から見えてくる課題

分野別の理念を示すように（「大学として」ではなく，学部，専攻として明記すること）

縦（分野，専攻の人材養成）と横（学士力）

「大学としてどのような使命を掲げ，人材を養成しようとするのかを明らかに」

講演2 「日本におけるティーチング・ポートフォリオ—導入の意義と可能性—」

講師 栗田佳代子（大学評価・学位授与機構）

大学の現状として，評価結果がゴールになっていないか。

同様に，FDの授業評価が目的になってしまっていないか。TPは授業評価の活用から始まった。

認承評価報告書は大学，その個人版がティーチング・ポートフォリオである。

メンターの活用によって，振り返りを促進し，整理できる。

（教育者としての振り返りと，教育者としての礎として）

教育のQOL（Quality of Life）の向上。充実した教員の元で学生が充実した学びを得る。

ワークショップは10人以内で。トップダウンでもボトムアップでもだめ。

更新ワークショップをそろそろ考えている（メンター制ではなく，相互更新）

ミニワークショップの実施「おためしTP」

TP事例・活用報告1

「阿南工業高等専門学校におけるティーチング・ポートフォリオの活用—新任教員研修として—」

報告者 坪井泰士（阿南工業高等専門学校）

徳島の高専。新任にティーチング・ポートフォリオを1年かけて作成させる。

先輩教員がメンターを担当。新任研修の一環として。授業参観（見る・見せる）を課している。

新任教員は2年間，共同の職員室ですごす。会話。相談の促進。効果がある。

TP 事例・活用報告 2

「大阪府立大学高専におけるティーチング・ポートフォリオの取り組みと展開」

報告者 北野健一（大阪府立大学工業高等専門学校）

単独校でのワークショップの開催と定例化。

TP 事例・活用報告 3

「立命館大学におけるティーチング・ポートフォリオの活用事例—新任教員研修での活用を中心に—」

報告者 井上史子（帝京大学）

新任研修 2 年間。ティーチング・ポートフォリオの作成の実践例紹介。

TP 事例・活用報告 4

「愛媛大学におけるティーチング・ポートフォリオの取り組み」

報告者 城間祥子（愛媛大学）

導入・普及・活用のプロセスについて。教育コーディネータ制度の紹介

まずは教員の 1 割を目指す

TP 事例・活用報告 5

「佐賀大学におけるティーチング・ポートフォリオの活用事例—教員採用と授業での活用を中心に—」

報告者 皆本晃弥（佐賀大学）

新任教員の採用に TP を課した。TP の体をなしていないもの、教育理念にそぐわない応募者を選別できた。全学的な普及は考えていない（採用予定者が TP 担当の教員であったので）。

研究活動の成果としての論文に対応して、教育活動の成果としての TP という位置づけができる。

TP の利点として、保護者への授業方針についてぶれない説明ができる。

質疑応答・総合討論

見せかけの TP（省察の浅い、ハイライトだけの記述）は教員評価には使えるかも知れないが、TP の本来的な目的としては、教育改善に利用して欲しい(センデル教授)。

100 人に順位を付けるのではなく、分類できる、くらいに使うものであろう。

情報交換会

城間先生に挨拶。佐賀大学の新任山内先生は昨年度まで愛媛大学で FD 担当。九州のネットワークを作りたいとのこと。

第 2 日（11 月 19 日）

各報告者 20 分程度の TP 披露。

TP 披露 1

竹本人見（専門「看護学・助産学」、聖マリア学院大学）

尾澤重人（専門「教育工学」、早稲田大学）

松本高志（専門「電気電子工学」、阿南工業高等専門学校王）

TP 披露 2

榎原暢久（専門「FD・数学教育」、芝浦工業大学）

於保幸正（専門「地球科学」、広島大学）

山下宗利（専門「人文地理学」、佐賀大学）

質疑応答・総合討論

- ・報告者は、いずれもメンター担当の経験がある。
- ・TP 作成によって、同僚と教育に関する話ができるようになった。
- ・教育論文投稿の契機になった。
- ・自分の教育理念、授業の目的を学生に伝えるようになった。他の授業にも影響があるだろう。
- ・弘前大学では簡易版を全教員に貸す計画があるとのこと。
- ・文科省では、大学教員の資格化が議論されている（大学院生の教育職に向けての教育を検討）
- ・大学教員能力資格としてのアカデミック・ポートフォリオ

⑦第 17 回 FD フォーラム（公益財団法人大学コンソーシアム京都）

「大学におけるキャリア教育を考える」

日程 2012 年 3 月 3 日(土)4 日(日) 京都産業大学

シンポジウム「企業が求める人材って大学で育成しないとだめ？」

シンポジスト：児美川孝一郎（法政大学）、深澤晶久（資生堂）、松高政（京都産業大学）

指定討論者：松本隆（ベネッセコーポレーション）

コーディネーター：村上正行（京都外国語大学）

大学教育の成果と、企業内教育のずれが実感できる報告であった。

分科会「保・幼・小の連携における保育者・教員養成のあり方を考える

～共通点は何か、相違点は何か～

シンポジスト：山内清郎（大谷大学）、佐久間敦史（大阪教育大学）、吉岡眞知子（東大阪大学）

田岡由美子（龍谷大学短期大学部）

コーディネーター：長谷川岳史（龍谷大学大学教育開発センター長）

養成課程の話にまで至らなかった。各の現状報告。しかも微に入り細に入り要点のつかみ所のない報告と、共通点を見いだそうという意図のない司会であった。地方の小規模大学の養成課程の実態が分かったことが収穫であった。

⑧第 18 回大学教育研究フォーラム（京都大学高等教育研究開発推進センター）

日程 2012 年 3 月 15 日(木)16 日(金) 京都大学

第 1 日

個人研究発表

「ピアサポートにおける学生の学び

島根大学附属図書館『図書館コンシェルジュ』へのインタビュー」

神住大助、森朋子、昌子喜信、矢田貴史（島根大学）

「シミュレーションの教育的意義と可能性

～理学療法教育における OSCE-R による学生の学びの促進」

平山朋子（藍野大学）松下佳代、西村敦（京都大学）、堀寛史（大阪保健医療大学）

小講演

「大学院生のための段階的な大学教員準備制度の概要～アメリカの研究大学から日本への示唆～」

吉良直（日本教育大学院大学）

「自己啓発とキャリア形成～教員，職員を超えて～」

塩川雅美（常翔学園）

基調講演・パネルディスカッション

挨拶 松本紘（京都大学総長）

基調講演 「相互研修型 FD の総括」 田中每実（京都大学）

パネルディスカッション

「『相互研修型 FD』のインパクト～3つの大学教育センターにおけるFDの反省から～」

山田剛（愛媛大学）

「『相互研修型 FD の組織化の総括』へのコメント」

高橋哲也（大阪府立大学）

「『相互研修型 FD』の理念・方法雄特徴と意義」

夏目達也（名古屋大学）

「相互研修型 FD の未来：国際連携 ICT 利用などを巡って」

飯吉透（京都大学）

「大学教育の改革とファカルティ・デベロップメント（FD）」

樋口聰（文部科学省）

大塚雄作（京都大学）

司会 松下佳代，溝上慎一（京都大学）

資料（案内文書）

付録1. 大学院FD講演会

【再通知】

大分大学 大学院・学部合同FD講演会

平成23年8月22日(月)

午後13時～15時



**我々の授業は、
学士を送り出すプログラムの1つです**

一質の保証はどのように考えるのか？

講師 佐藤浩章 准教授 愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 副室長

講演会の主旨

平成22年6月15日に行われた学校教育法施行規則の改正により、平成23年4月1日から、各大学等において教育情報の公表を行う必要がある項目が明確化されました。この改正の趣旨は、大学等が公的な教育機関として、社会に対する説明責任を果たすとともに、その教育の質を向上させる観点から、公表すべき情報を法令上明確にし、教育情報の一層の公表を促進することです。（文部科学省HPより）

本学においても、方針の明確化の一環として「ディプロマポリシー」「カリキュラムポリシー」の策定作業が進められているところです。

そこで、愛媛大学より佐藤浩章氏を講師として、講演会を開催します。

大学の教育方針を公表するにあたって、必要となる考え方、具体的な公表の仕方、さらに教育活動の基本単位である授業についてもシラバスの書き方を例として、具体的な手法についても講演頂く予定です。

皆様の積極的な参加をお待ちしています。

対象： 本学の教職員

日付： 2011年8月22日（月）

場所： 教養教育棟27号教室（巨野原キャンパス）

※ 狭間キャンパスへの配信は検討中です

時間： 午後13時00分～15時00分

主催： 教務部門会議・大学院部門会議・高等教育開発センター

問い合わせ・連絡先

高等教育開発センター

内線 8522 hecenter@oita-u.ac.jp

きっちよむフォーラム2011のご案内

大分大学高等教育開発センター

高等教育開発センターでは、教育改善を目的とした FD 研修会として、下記の要領で学内合同研修会「きっちよむフォーラム」を開催します。多数の教職員・学生の参加をお待ちしています。

「きっちよむフォーラム 2011」学内合同研修会

2011 年 12 月 7 日(水曜日)13:10～16:20

旦野原キャンパス 教養教育棟 14 号教室

挾間キャンパス 研究棟 1 階会議室 (遠隔配信)

第 1 部：学生教職員教育改善研修会 (13:10～14:40)

学生の報告をもとに、学生、教職員の協働により授業改善の方策を探ります。

実践報告 1: 「Ustream と Facebook(SNS)を活用した授業の支援から」

<要旨> 本学で開講されている教養教育科目の一授業を題材として、学生が自主的にインターネットによる配信を試みました。いくつかの問題点を克服して配信の安定性を向上させるとともに、ソーシャルネットワークとの連動により、視聴者から授業者への意見伝達を可能にしました。今回はインターネットによる映像配信と情報の双方向性について、学生の立場から報告します。

報告者：教育福祉科学部 3 年生 (当センター SA)

実践報告 2: 学生が主体となって地域貢献・交流を行う体験組込型教育実践「田舎で輝き隊！」

<要旨> 経済学部では、学部教育の早い段階からの農漁村体験を契機に、地域づくり・活性化へ実態的な理解を深め、学生の社会性を高めるとともに、同時に地域貢献を果たしうる教育プログラムを実施しています。本年度より、学長裁量経費の支援を受けて実施している同プログラムについて、SA として中心となっている学生から、取組の現状と課題について実践報告を行います。

報告者：経済学部 3 年生「田舎で輝き隊！」 SA

討 論：上記の報告をもとに、授業改善に向けて、議論を深めます。

第 2 部：教育課題・教育実践検討会 (14:50～16:20)

ポートフォリオ・WebClass を活用した教育実践：ポートフォリオ研究会中間報告

昨年度から 3 年間にわたり措置されている特別経費「動機づけと形成的評価を重視した学士課程教育開発」は、新規教授法の教育において適正な教育評価の実現を進め、同時に学生自身の学士教育課程 4 年間で展望した学習動機付けを促進することを目的としています。ポートフォリオ研究会は、この特別経費で導入した「形成的評価のためのポートフォリオシステム」の普及・展開を中心課題として、WebClass・ポートフォリオシステムを活用した授業実践に取り組んでいます。

「きっちよむフォーラム」を機会として、現在教育実践に取り組んでいる会員による報告を行い、それらを踏まえた交流・検討を行います。

報告者 ポートフォリオ研究会メンバー

<問い合わせ先> 高等教育開発センター (E-Mail heceneter@oita-u.ac.jp)



大学メンタルヘルスの現状と課題 ～特に希死念慮と自殺について～

学生のメンタルヘルス講演会 (学生支援GP講演会)

講師

秋田大学保健管理センター所長
苗村育郎教授

対象： 本学の教職員・学生
日付： 平成23年12月8日（木）
場所： 教養教育35教室（巨野原）
多目的会議室（挟間：遠隔配信）
時間： 15時～16時30分
主催等： 学生支援部
メンタルヘルス専門委員会
保健管理センター
高等教育開発センター

問い合わせ先

保健管理センター
内線 7477
高等教育開発センター
hecenter@oita-u.ac.jp



主催：高等教育開発センター

FD 講演会

シラバスからはじめる授業改善



講師： 山田 剛史 准教授
(愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室)

日時：平成 24 年 1 月 18 日 (水) 13:10 ~ 14:40

場所：(旦野原) 教養教育棟 14 号教室

(挟 間) 研究棟 1 階会議室 (遠隔ビデオ配信)

シラバスは授業内容や雰囲気，評価方法を伝えるためだけのものではありません。受講生との最初のコミュニケーションの場とも言えます。授業の意図をもっとよく伝えるシラバス，受講生の動機づけを高めるシラバス…。そんな魅力的なシラバスの書き方を通して，自分の授業を見つめ直してみませんか？

※ 当日の先着 20 名に「大学教員のための授業方法とデザイン」佐藤浩章 編 (玉川大学出版部) を進呈します。

【問い合わせ】教育支援課 守田
(電話：内線 8522，メール：hecenter@oita-u.ac.jp)

授業公開・授業検討会 FD ワークショップ 2011

下記の要領で授業公開・授業検討会を実施します。

事前の申込みは不要です。時間までに教室へおいで下さい。

なお、授業検討会は授業公開終了後に一括して行います。授業検討会に参加できない場合には、感想・コメントシート(授業公開時に配布)を授業検討会までに提出して下さい。

<授業公開>

日程	教室	「授業タイトル」	授業者
1月24日 火曜1限	教育福祉科学部 100号教室	日本語は面白い(教養科目) * クリッカーを使った授業です	日高 貢一郎 氏 (教育福祉科学部)
1月26日 木曜2限	工学部 107教室	「機械力学」(専門科目) * 工学部の専門の授業です	劉 孝宏 氏 (工学部)
1月26日 木曜3限	教養教育棟 第2大講義室	原価計算論(専門科目) * 授業アンケートで評価の高い授業です	加藤 典生 氏 (経済学部)
1月27日 金曜2限	教育福祉科学部 25号教室	理科教育学入門(専門科目) * Open STAGEを使った少人数授業です	牧野 治敏 氏 (高等教育開発センター)

※教室は大分大学ホームページ且野原キャンパス案内をご覧下さい。

(http://www.oita-u.ac.jp/category/dannoharu_map.html)

工学部 107 教室:13 番建物, 知能情報/応用化学棟・大学院棟

教育福祉科学部 25 号教室:4 番建物, 北側 2 階

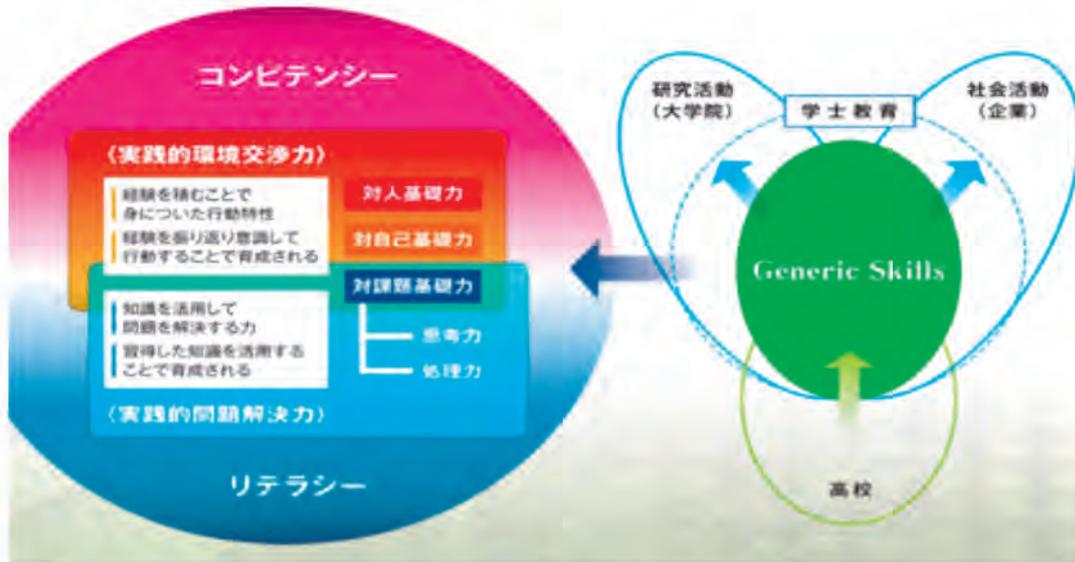
* Open STAGE(R):デジタルペンを使った会議、プレゼンテーションの支援システム

<授業検討会>

日時 2012年1月27日(金) 17時00分~18時00分

場所 高等教育開発センター (学生センター2階)

問い合わせ 高等教育開発センター hecenter@oita-u.ac.jp 電話 7644 (担当: 牧野)
--



ジェネリック・スキル測定【PROGテスト】 結果報告会

2012年3月7日（水）午前10時30分～12時00分
教養教育棟27号教室

今回、報告するPROG(ジェネリック・スキル育成プログラム)は、ジェネリック・スキルを「リテラシー(知識を活用して問題解決する力)」と「コンピテンシー(経験を積むことで身についた行動特性)」という2つの観点から測定し、育成するためのプログラムです。

教室の学習で身につける能力、研究室やゼミで身につける能力、大学を離れた課外活動等で身につける能力など、学生に、どのような場面でどのような能力を身につけさせるのか、いっしょに考えてみませんか。

説明会の概要

説明者：

株式会社リアセック代表取締役社長 松村直樹氏

内容：

- 1) GS測定テスト【PROG：Progress Report on Generic Skills】の概要
- 2) 全国の大学生9,290名のデータと、本学受検者102名のデータとの比較分析
- 3) キャリア開発支援・就業力育成の観点からみる課題と対応策
- 4) 就職活動支援の観点からみる課題と解決策

問い合わせ先
高等教育開発センター(牧野)
hmakino@oita-u.ac.jp
内線 7644

大学開放イベント

11月6日(日) 13時～

2011

日本人学生による 英語スピーチコンテスト

出場者募集

スピーチ部門

意見や主張、提言、体験談、その他

プレゼンテーション部門

プレゼンテーション・ツールを使った、研究報告、体験談など

パフォーマンス部門 (新企画)

英語(外国語)による、歌、コント、など



- ・いずれの部門も発表時間は1件10分以内
- ・プレゼンテーション部門は複数による申込みもできますが発表は一人です。
- ・パフォーマンス部門は留学生も参加できますが、母国語以外での発表です。また、グループでの発表もできます。

☆最優秀賞は「iPodTouch」、優秀賞「iPod」など表彰多数。参加賞もあります。



募集期間 2011年10月3日～10月31日

(要項、申込用紙は高等教育開発センターのホームページまたは教育支援課まで)

問い合わせ・申込先 教育支援課 内線 8522

高等教育開発センター E-Mail hcenter@oita-u.ac.jp

ホームページ <http://www.he.oita-u.ac.jp/>

4. 大学開放推進部門・生涯学習支援システム部門

高等教育開発センターにおける生涯学習関連業務は、大学開放推進部門および生涯学習支援システム部門の2部門が連携して実施し、本学における教育及び地域社会の発展に寄与する観点から、本センターが持つ研究開発機能を基盤にして、緊急且つ重要な事業、日常的に行う事業等に分類し、軽重をつけて実施することとし、次の2部門において生涯学習社会の形成に向けて以下の業務を行った。

①大学開放推進部門において、公開講座・公開授業及び県民・学生への現代的課題への対応に関する学習機会の提供等の大学開放を推進する。

②生涯学習支援システム部門においては、県内の生涯学習行政や高等教育機関、各種活動組織等とのネットワーク化による県民の生涯学習を支援する。

ただし、生涯学習を推進するためには、学習機会を提供する側の機能（本学）と学習機会を活用する側（県民及び行政）のニーズとを適切に結びつけることが必要であり、本センターにおける取り組みも、大学開放推進部門と生涯学習支援システム部門の共同で協議を行い、連動して業務を推進してきた。また、センターの統合のメリットを最大限に生かし、高等教育関連部門との連携による生涯学習関連の情報提供の充実の取り組みや、生涯学習関連の授業のオンディマンド化等を行った。さらに、公開講座・公開授業の充実を中心とした本学の社会連携推進部門会議との連携、生涯学習に関わる学内の諸部局との連携を行った。

また、大学開放推進部門および生涯学習支援システム部門の推進の基盤となる調査研究においても、県及び市町村教育委員会生涯学習行政との連携によって、現代的な課題に関する分析・研究を行いつつ、生涯学習・社会教育計画の作成や指導者の育成等に関する指導的業務を担ってきた。

【平成23年度の主な取り組み】

（1）部門会議

第1回

期 日：平成23年5月20日（金）

- ・議題1. 平成23年度事業計画について
 - ①大学開放推進部門における公開講座・公開授業の実施計画について
 - ②生涯学習支援システム部門における各種事業について
- ・議題2. 公開講座学内講師に関する謝金単価の減額について
- ・報告事項① 平成22年度事業の報告について

第2回

期 日：平成23年10月17日（月）

- ・議題1. 平成23年度後期の公開講座・公開授業の実施計画について
- ・議題2. 大分県「協育」ネットワーク協議会の設立と参加について
- ・報告事項

- ①平成 23 年度前期の公開講座・公開授業の実施状況について
- ②「産学協働教育を通じた中小企業の魅力発信事業」（経済産業省）について
- ③平成 23 年度第 3 期生「『協育』アドバイザーネット養成講座」（基礎編）について
- ④学長裁量経費の概要と実施状況について

（２）主な事業

平成 23 年度は第 2 期中期計画 3 年次にあたり、本センターが平成 22 年度に策定した「連携 GP 等への取組及び地方自治体をはじめとする地域の関係機関との連携を進めるとともに、これらの取組を推進するための体制整備の方針」の具現化を目指した。さらに、平成 23 年度計画では「学習機会提供と学習成果活用の接続、地域における接続ネットワークの形成に重点的に取り組む大学開放事業を企画し、事業の方向性と研究開発を行う。」ため、これまでの実践を基盤にして次のような重点施策に取り組み、多くの成果をあげた。

①大学開放の事業の重点施策として、大学連携 GP 終了に伴い、「とよのまなびコンソーシアムおおいた」の方針に従って、大分地域大学等との連携を促進するなど、自主的な連携講座の実施等に向けた中核的な役割を担った。

②本センターが開催している「『協育』アドバイザー養成講座」の修了生で組織する「大分県『協育』アドバイザーネット」が NPO 法人として活動を始めた。さらに、この NPO 法人が事務局を務める、県内の企業、団体、機関等で組織する「大分県『協育』ネットワーク協議会」を 30 組織で設立し、現在拡大中である。また、こうした組織の協働・共催による、環境活動や青少年対象のモデル的な事業等の研究開発を実施して取り組みの方向性を検討してきた。今後、このネットワークを活用した大学開放事業の企画・実施やモデル的な事業のスタンダード化、現在の公開講座・公開授業の普及・拡大等の基盤づくりができた。さらに、各種ホームページの開設など、地域での学習支援システム構築に関する大きな貢献を果たすことができた。

③学生のキャリア教育を生涯学習の観点から推進する「学習ボランティア『フォーバル』」の活動支援や、企業体験等を推進する自主講座を実施するなどして、学生への具体的な教育活動を拡充することができた。

なお、学長裁量経費の「大分大学を拠点とした『教育の協働』推進ネットワーク構築事業」については「Ⅲ 学長裁量経費の事業報告」で報告する。

【平成 23 年度の事業内容】

（１）大学開放と学習機会の提供

本学が持つ高等教育機能を発揮し、県民に対して直接に様々な学習機会を提供することは地域の大学としての価値と存在感をアピールするうえで重要であり、次のような取り組みを行った。

1) 公開講座

公開講座は、各学部が実施する講座と、本センターが現代的な課題に対応して実施する講座で構成され、開催方法としては、本学が主催する「主催講座」と市町村教育委員等と協同で行う「連携

講座」となっている。

平成 23 年度は、近年の傾向である青少年対象やその家族をも含めた講座（学内で実施する水泳教室や木工教室）、自然体験や生活経験を充実させる講座などの充実を図った。社会全体の傾向として、子ども達の自然体験・生活経験の欠損が指摘されており、子ども達の自然体験・生活経験を充実させるために、家族も関わる講座の工夫をおこなった。それに加えて、青少年健全育成のための指導者の養成を図ることも求められており、市町村との連携講座に加え、コーディネーターの養成に関する講座も拡充した。

平成 23 年度の公開講座は、前期 20 講座、後期 5 講座、年間講座 1 講座の計 26 講座を実施し、前年より 4 講座減少した。内訳は、成人対象講座 17 講座で受講者 617 名、子ども・家族対象講座 9 講座で受講者 295 名となり、受講者の合計は 912 名である。前年度（945 名）とほぼ同じ人数の受講生があった。成人対象講座の応募者は全て定員内で受講できた。しかし、子ども・家族対象の講座では「理科や算数を使って親子で遊ぼう」は 28 人の受講に対して 168 人の応募、将棋講座は 43 人の受講に対して 163 人の応募、「子どもふるさと体験学インくにさき」は小学生 30 人の募集に対して 105 人の応募、「夏休み子ども造形美術教室」は 29 人の受講に対して 80 人の応募、「身近な大分の化石収集」は 105 人の受講に対して 397 人の応募など、夏休み中の講座は多くの子ども・家族が応募しているにも拘わらず、体制・キャパの関係で受け入れられないという現状があった。

《主催講座の概要》

平成 23 年度の実施講座（本学が主催する講座であるが他大学と連携して実施する講座を含む）は 21 講座（前年 24 講座）を実施し 3 講座減少した。内訳は、成人対象講座 12 講座で受講者 307 名（前年 307 名）、子ども・家族対象講座 9 講座で受講者 295 名（前年 347 名）となった。

《連携講座の概要》

平成 23 年度の連携講座は、他大学の企画する講座へ参画して実施した講座を 1 講座、市町村との連携講座を 4 講座（内、年間を通した講座を 1 講座）の計 5 講座（前年 6 講座）を実施し、受講者 310 名（前年 173 名）となった。

平成 23 年度大分大学公開講座

番号	講座名	実施場所	実施期間	実施時間数	受講者数
1	出前講座－大分大学米水津塾－	米水津地区公民館 大分大学内	6/26～3/11 (8回)	15時間	23
2	理科や算数を使って親子で遊ぼう	大分大学内	7/16～9/16 (8回)	16時間	14組 (28名)
3	とよのまなびコンソーシアムおおいた連携 世界のコトバ、コトバの世界	大分県立芸術文化短期大学	7/23～1/28 (13回)	19.5時間	52

4	泳げない子どもの水泳教室	大分大学内	7/28~8/4 (7回)	21時間	65
5	大人の遠足ー大野川 水の旅ー	豊後大野市	7/31	9.5時間	10
6	将棋講座	別府中央公民館	7/30, 8/21 (2回)	9時間	43
7	とよのまなびコンソーシアムおおいた連携 講座「子どもふるさと体験学インくにさ き」	国東市	8/9~8/11 (3回)	35.5時間	30
8	動物と人の共通感染症	大分市コンパルホール	8/19	1.5時間	15
9	目の病気で失明しないために	大分市コンパルホール	8/27	2時間	50
10	心筋梗塞を知る	大分市コンパルホール	8/30	1.2時間	37
11	基礎医学からみた脳脊髄液減少症	大分市コンパルホール	9/9	2時間	26
12	脳炎 ー診断から治療ー	大分市コンパルホール	9/21	1時間	20
13	とよのまなびコンソーシアムおおいた連携 大分の里海と里山「1. 土と水に根ざした 農家体験ツアー」	九重町	9/17~9/18 (2回)	15.5時間	3組 (7名)
14	夏休み子ども造形美術教室	附属中学校	8/2~8/3 (2回)	6時間	29
15	豊の都市まなび直し講座 ー今から取り組む実年期の健康な暮らしー	大分大学内	8/20~9/3 (3回)	9時間	20
16	簡易型自律ロボットの製作とプログラミング	大分大学内	8/26	5.5時間	15
17	身近な大分の化石収集	大分大学内 採石場：緒方町	8/27~8/28 (2回)	8時間	51家族 (105名)
18	とよのまなびコンソーシアムおおいた連携 大分の里海と里山「2. 豊穡の里海体感講 座」	大分県マリカルチャー センター	9/24~9/25 (2回)	19時間	4組 (10名)
19	とよのまなびコンソーシアムおおいた連携 「協育」アドバイザー養成講座 上級編	山口県	9/27~9/28 (2回)	15時間	12

20	市町村連携講座	竹田市	9/2	2時間	200
21	市町村連携講座	杵築市	9/13	2時間	15
22	大分の現状と課題	大分市コンパルホール	10/6~11/10 (5回)	6.6時間	34
23	教育における「低下」現象を考える	大分大学内	10/15~11/12 (5回)	7.5時間	9
24	とよのまなびコンソーシアムおおいた連携 多文化共生社会のために	大分県立芸術文化短期大 学	10/15~11/12 (4回)	6時間	16
25	とよのまなびコンソーシアムおおいた連携 「協育」アドバイザー養成講座 基礎編	大分大学内	11/19	6時間	27
26	とよのまなびコンソーシアムおおいた連携 「協育」アドバイザー養成講座 中級編	大分大学内	3/17~3/18 (2回)	13時間	20

＝公開講座に関する過去7年間の講座数及び受講者数の変化＝

本センターの統合3年前（平成17年度）から統合4年後（平成23年度）の7年間の講座数及び受講者数を示したものが図1である。

図1 過去7年間の公開講座の実施状況

平成21年度の実受講者数は、単年度事業として竹田市の公民館学級開校式と共催して実施した出前講座（286名）の関係であり、全体の傾向としては、本センターの統合前と比較して、講座数と受講者は増加傾向である。その要因としては、連携講座や現代的な課題に対応する講座など、新しい観点からの講座の開設が受講者数の増加に繋がっていると考えられる。



今後とも、県民の生涯学習機会の提供として継続して実施する講座に加え、講座の数の増加という視点だけではなく、実施目的を明確にした高等教育機関で出来る指導者養成や青少年の課題への対応など、県民のニーズに応える講座の開設が必要であると考えている。

2) 公開授業

公開授業は、正規の授業を開放して学生と共に専門的な教育内容を体系的に学ぶ場を提供するものであり、各学部及び個々の教員からの申請で実施している。

平成23年度の公開授業は、前期53科目（前年45科目）、後期51科目（前年35科目）で計104科目（前年80科目）となっており24科目増加している。受講生は前期が46名（前年50名）、後期が40名（前年25名）の合計86名で、11名増加している。

○平成 23 年度大分大学公開授業

前期

後期

番号	講座名	受講者数	番号	講座名	受講者数
1	基礎中国語 I	1	54	基礎中国語 II (月 1)	0
2	企業組織法 I	1	55	統計学 II	0
3	生命観の変遷	0	56	企業組織法 II	1
4	西洋美術史	0	57	カラダの見方・考え方	1
5	くらしの法律	2	58	教育の社会学	0
6	農村発展論 I	2	59	言語・外国語 (独) IV	0
7	生涯学習論入門	1	60	小児看護方法論 I	1
8	教養ドイツ語 I	1	61	教育本質論	0
9	環境物理学	1	62	化学 III	0
10	小学校外国語活動指導法	0	63	国文学史	2
11	言語・外国語 (独) I a	1	64	言語・外国語 (独) II a	1
12	電気工学概論	0	65	哲学概論 I	0
13	基礎中国語 I	1	66	身近な物理学	2
14	電気化学	0	67	化学物質と環境影響	0
15	経済統計を読む	2	68	基礎中国語 II (火 1)	1
16	自然とゆらぎ	0	69	応用中国語 II	0
17	応用中国語 I	0	70	産業と経済 II	0
18	体育学概論	0	71	英語 I (火 4)	0
19	博物館学概論	1	72	臨床心理学演習	5
20	哲学概論 II	1	73	世界史演習 II	0
21	臨床心理学	4	74	美術鑑賞論	1
22	スポーツと生活	0	75	仕事と社会	2
23	福祉と工学技術	0	76	アカデミックスキル入門-社会教育計画を題材に-	0
24	現代天文学と SETI	1	77	科学技術コミュニケーションのデザインと実践	0
25	バロック音楽の世界	2	78	応用解析 IV	0
26	大分の水 I	0	79	大分の水 II	1
27	比較文学論	1	80	パラサイトからみた生命	2
28	労使関係論	0	81	成人教育方法入門	0
29	科学技術コミュニケーション入門	0	82	国際関係論 II	2
30	化学物質と環境影響	0	83	資本主義発達史 II	1
31	社会教育から見た教育の「協働」	0	84	英語 I (木 2)	1
32	現代アジア論	1	85	英語 II	0
33	国際関係論 I	1	86	表現の歴史 III	1

34	漢文学研究	1	87	応用英語 E	0
35	経済学を学ぶ	4	88	近代ドイツ文化論	0
36	老年看護学概論	2	89	企業ファイナンス論Ⅱ	1
37	資本主義発達史Ⅰ	0	90	国語学特講	1
38	応用英語 E	0	91	グローバル化と政治経済 (The Politics and Economics of Globalization)	1
39	消費者教育	0	92	漢文学講読	2
40	企業ファイナンス論Ⅰ	1	93	A・A地域論Ⅰ	0
41	音響工学	0	94	身体表現実習	0
42	国語史	4	95	生活環境とホルモン	1
43	漢文学史	1	96	労働関係法Ⅱ	0
44	身体表現基礎	0	97	表現形式総合論Ⅱ	0
45	英語ゼミナール16「多文化理解の英語Ⅰ」	6	98	電気も車もないアーミッシュ社会	1
46	労働関係法Ⅰ	2	99	英語ゼミナール17	5
47	組織革新論	0	100	都市経営論Ⅱ	0
48	世界・日本・大分の農業経済論	0	101	アジア経済発展論	2
49	生涯学習概論Ⅰ	1	102	数値解析	0
50	現代資本主義Ⅱ	1	103	日本東洋美術史	0
51	都市経営論Ⅰ	0	104	近代文学概論	2
52	身体感覚の知覚演習	0			
53	東洋史概説	0			

＝公開授業に関する過去9年間の講座数及び受講者数の変化＝

本センターの統合5年前（平成15年度）から統合4年後（平成23年度）の9年間の公開授業数及び受講者数を示したものが図2である。

公開授業数は、平成20年度の98授業をピークに減少傾向であったが、23年度は100授業をこえた。受講者数も平成17年度をピークに減少傾向であったが23年度は89名で過去最高に近づくなど、3年連続増加した。授業を公開しても受講者がいない授業もあり、グラフで特徴がある年度の無受講者授業の割合をみると、平成16年度は35%、平成17年度は49%、平成20年度は55%、平成23年度は49%である。公開授業数に対して受講者数が多い平成16年度、17年度は1授業への受講者数が複数であったのことに比較して、平成18年度以降は1授業あたりの受講者数が少ないという特徴が見られる。公開授業の開始当初は集団での受講であったことが、次第に個人のニーズに沿った個人型学習の傾向へと変わってきたことがうかがえる。

図2 過去9年間の公開授業の実施状況



3) センター事業

生涯学習社会形成の方策として、現代的な課題に関する講座の開設や調査研究を通じた地域貢献と学生への学習支援、及び市町村等との連携による地域が抱える課題に対する学習支援を行った。

前述した公開講座のうち、表に示すような本センターが主催する9の主催講座と、市町村教育委員会等と共催または共同して開催する6の連携講座を実施した。

平成23年度高等教育開発センターが実施した公開講座

番号	講座名	実施場所	実施期間
1 共催	出前講座－大分大学米水津塾－	米水津地区公民館 大分大学内	6/26～2/19 (8回)
2 共同	とよのまなびコンソーシアムおおいた連携 世界のコトバ, コトバの世界	大分県立芸術文化短期大学	7/23～1/28 (13回)
3 主催	大人の遠足－大野川 水の旅－	豊後大野市	7/31
4 主催	将棋講座	別府中央公民館	7/30, 8/21 (2回)
5 主催	「子どもふるさと体験学インくにさき」	国東市	8/9～8/11 (3回)
6 主催	大分の里海と里山「1. 土と水に根ざした農家体験ツアー」	九重町	9/17～9/18 (2回)
7 共催	豊の都市まなび直し講座－今から取り組む実年度の健康な暮らし－	大分大学内	8/20～9/3 (3回)
8 主催	身近な大分の化石収集	大分大学内 採石場：緒方町	8/27～8/28 (2回)
9 主催	大分の里海と里山「2. 豊穡の里海体感講座」	大分県マリンカルチャーセンター	9/24～9/25 (2回)
10 主催	「協育」アドバイザー養成講座 上級編	山口県	9/27～9/28 (2回)
11 共催	市町村連携講座	竹田市	9/2
12 共催	市町村連携講座	杵築市	9/13
13 共同	とよのまなびコンソーシアムおおいた連携 多文化共生社会のために	大分県立芸術文化短期大学	10/15～11/12 (4回)

14 主催	「協育」アドバイザー養成講座 基礎編	大分大学/別府大学内	11/19
15 主催	「協育」アドバイザー養成講座 中級編	大分大学内	3/17～3/18 (2回)

《主催講座》

本センターが主催した講座は、各学部が実施する講座に加え、市町村との連携講座の拡充や、子ども達の自然体験・生活経験の欠損が指摘される中、子ども対象やその家族をも含めた講座などを強化している。子ども達の自然体験・生活経験を充実させるためには家族全体のライフスタイルを転換する必要があることから、家族単位で参加する講座も充実させている。それに加えて、青少年健全育成のための指導者の養成を図ることも求められ、コーディネーターの養成に関する講座も拡充した。それぞれの事例は各項目で報告することとし、ここでは青少年対象の講座の例を紹介する。

～「子どもふるさと体験学 in くにさき」～

近年の青少年の自然体験、生活体験、社会体験、異年齢との交流体験、等々の不足が指摘され、学校や地域社会においての取り組みが推進されている。本事業は、そうした指摘に対応し、子どもたちの自然活動を推進するためのモデル的なプログラムの開発を目的に、「教育の協働」（以下、「協育」という。）を進める基本的なシステム作りの方策を研究・実践するために、国東地域の様々な機関・団体・グループ等の協働によってプログラムを実施したものである。

＝事業の概要＝

☆事業のコンセプト

「くにさきの人・自然・文化・産業体験」から自分の地域の魅力を再発見しよう

- ①子どもの社会規範の成長：「素直で元気！大きな声で挨拶→明るく笑顔で他人に関わる子」
- ②異年齢交流体験：小・中・高・大学生の異年齢による活動の学びの効果の検証
- ③「協育」活動のスタンダード化：子ども活動推進型事業のスタンダード

☆主催 大分大学高等教育開発センター

☆協力 NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット（以下「協育」ネットという）
東国東地域デザイン会議（以下「デザイン会議」という）

☆連携先 県立国東高等学校、安岐町ウォーキング協会、梅園の里、地元企業や農業従事者
地元学識者、国東市教育委員会

☆期 日：平成23年8月9日（火）～11日（木）（2泊3日）

☆宿泊・集合：安岐町「梅園の里」（大分県国東市安岐町富清2244）

☆参加者

児童生徒の参加者	小学生（4年生～6年生）：30名 中学生（1年生～3年生）：6名
高校生ボランティア	県立国東高校JRCメンバー 6名
大学生ボランティア	大分大学学習ボランティアサークル 5名

☆社会人・大学生・高校生の役割

係	内 容	社会人担当者	大学生	高校生
総括	開・閉講式及び活動全体の管理	中川 忠宣	関 法子	青山みなみ
生活	事業全体の（朝の集い、生活、全ての活動）指揮・指導	加藤 俊一	松尾 美幸	其田 康児
活動(学習)	各プログラムの運営又は支援、企画・実施	山村 金市	谷村 歩美	松田 宏樹

学習(活動)	班別学習会の指導及び発表会の運営	梅野 悦子	落合美佐紀	戎野可那子
食事(健康)	食事の手配・準備・片付け・マナー等の指導	安達美和子	松尾・川副	花谷 ゆい
健康(食事)	起床・就寝時の健康チェックや救急処置等への対応	安達美和子	川副 蓮実	川部 若葉

☆参加費：宿泊実習費：2泊6食7,000円・傷害保険料200円 計7,200円

☆活動内容と日程

1日目(8月9日)

- 10:00 現地集合(班分け等)
- 10:00～開講式・グループ編成・活動打ち合わせ・昼食等
- 13:00～三浦梅園の世界へ(生家・墓・資料館等の見学・説明)
- 15:30～復興産業「七島い」体験(七島いの歴史・七島い田見学・七島い作品制作)
- 17:00～夕食・班ごとの学習会・キャンプファイヤー・入浴
- 22:30 就寝

2日目(8月10日)

- 6:00～ 起床・集い・清掃・朝食・準備
- 8:30～両子寺・文殊仙寺・岩戸寺・旧仙灯寺徒歩めぐり(文化・野草・野鳥体験)
- 17:00～入浴・夕食・天文台学習・班ごとの学習会



3日目(8月11日)

- 6:00～起床・集い・清掃・朝食・準備
- 8:30～新企業「アキ工作社」見学(段ボールのクラフト工作の見学と制作体験)
- 10:30～班ごとの体験学習のまとめ会・全体発表会・昼食
- 13:00～閉講式・解散(13:20)

＝参加者の募集と依頼＝

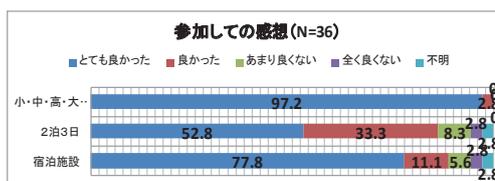
- ①小学生は30人の募集に対して120人近くの応募があり、男女・地域によって抽選し、参加者には自分の地域の人・自然・文化・産業に関するレポートを持参するよう通知した。
- ②班長となる中学生は、最初から相互が協力が出来るように「協育」ネット会員のPTAと連携して参加費の補助等をいただき、1つの中学校から選考した。
- ③リーダーとなる高校生は、地元の高校のJRCの活動と連携し、主催者が必要経費を負担する形で参加体制ができた。
- ④アドバイザーとなる大学生は、大分大学学習ボランティア「フォーバル」のメンバーへ依頼し、実費のみ主催者が負担し、ボランティアとして参加した。

＝指導者の依頼＝

- ①主催者(大分大学高等教育開発センター)と連携関係にある「協育」ネットと、これまで協働で実践交流事業を行ってきた地元のデザイン会議の3者で企画・運営をするシステムとした。
- ②地元の支援者はデザイン会議が依頼し、ボランティアとして(若干の謝金)参加要請をした。

＝成果と課題＝

1) 参加者アンケートから見えてきたこと



上の左図から、子どもたちが興味関心を持ったのは、体感できる活動であることが分かった。人や文化などは理解しにくく、何を学び、何が楽しいかがわかりにくいため、短期間で行う活動ではこ

のプログラムはふさわしくないことも分かった。

前頁の右図からは、子どもたちの満足度がわかる。まず、小学生・中学生に加えて、そのリーダーとしての高校生と大学生の参加が非常に有効であることが分かる。また、宿泊学習タイプの本事業では、きちんとした施設で行う事が求められていることも分かった。

2) 「教育の協働」推進モデル事業として

○事業をとおして見えてきたことについての検討事項

今回の事業では、2泊7,200円(宿泊代と傷害保険料)の参加費で120人ほどの応募があり、学びのプログラムは成功したと考える。経費は、参加者の宿泊・生活に関する経費と移動に関する経費が大きい。反面、地域指導者や高校生・大学生等の指導者に関する経費はボランティアであったために少額であり、移動経費やボランティアへの謝金等を参加費に計上するか、どれくらいの参加費が妥当なのかも検討する必要がある。

○関係者のネットワークについて

効果のある事業は単一組織では出来ないことが確認できた。今回のようなイベント的事業では活動プログラムに関するノウハウを持った様々なスタッフの参画が不可欠である。そのための日常的な人的ネットワーク、相互支援・協力による活動を行っていくことによって、参加者が満足できる活動を仕組むことが出来るのではないだろうかと考えている。

《連携講座》

～「豊穰の里海体感講座」～

連携講座の事例として、大分大学が主管校となり、別府大学と連携して「とよの学びコンソーシアム」が実施する「豊穰の里海体感講座」を報告する。

＝事業の概要＝

☆事業のコンセプト

大分県は豊かな海に恵まれているが、その海での子どもたちの自然体験は減少傾向にあり、若い親の世代においても同様の傾向が見られる。そこで、魚釣りから調理、実食に至るまでのプロセスを親子で体験してもらうことにより、家族全体のライフスタイルを転換し、家族で日常的に海での自然体験を行ってもらえるよう体験型の公開講座を実施した。

☆主催 大分大学、別府大学

1. 日時 平成23年9月24日(土) 10:30 ～ 25日(日) 15:30

2. 場所 大分県マリンカルチャーセンター(佐伯市蒲江大字竹野浦河内1834番地の2)

3. プログラム

9月24日(土)

10:30 別府駅出発

11:00 大分駅出発(バス内で各自昼食)

12:30 会場到着・開会行事

13:30 サンド・アート制作

15:30 魚釣り体験(投げ釣りでキスを)

17:30 調理体験(キス天ぷら)

19:00 夕食

20:30 交流ワークショップ

22:00 入浴・就寝



25日（日）

7:00 起床・洗面・退出準備

9:00 ウォークラリー

10:30 ぶりのあつ飯づくり体験

12:00 あつ飯の昼食

13:00 閉講式・現地出発

15:00 大分駅到着・解散

15:30 別府駅到着・解散



（２）生涯学習指導者研修事業

生涯学習行政においても現代的な最大の課題として取り組んでいる「家庭，学校，地域社会の教育の協働」を推進する中核的な人材の養成を行い，学校や地域での子どもの健全育成及び大人社会の再構築を推進する講座を以下のように実施した。3期生の修了生は18名である。

さらに，受講生の職場や地域での日常的な活動を支援するために，修了生で組織する「大分県『協育』アドバイザーネット」が平成23年12月7日にNPO法人の認可を取得した。

～「協育」アドバイザー養成講座～

これからの教育が「青少年を育成する学校教育，社会教育，家庭教育の連携」，「高齢者の生きがい創出するための活動の連携」等々，地域全体が連携協力して，縦割りの取り組みから，「横の接続」を促進する取り組みの重要性が認識されてきた。そこで，こうした取り組みを繋いでいく民間のコーディネーター（アドバイザー）を育成し，受講生の職場や地域での日常的な活動を相互支援するとともに，活動情報の収集，プログラムの開発等を行いつつ，本県における「家庭，学校，地域社会の教育の協働」システムの構築に寄与することをめざして養成講座を開講した。

＝内容＝

①「協育」アドバイザー基礎研修

各種事例を通して教育の協働を推進する中核的な人材（コーディネーター）の必要性を理解すると共に，コーディネーターに必要な能力について学ぶ。

②「協育」アドバイザー専門研修

家庭，学校，地域社会の現状を学び，コーディネート能力の養成のための，体験活動に関するプログラム企画力を養成し，提案し，実践するためのスキルの向上を図る。

③「協育」アドバイザー実践研修

「教育の協働」の先進地を視察し，地域づくりや青少年の健全育成に関する中心的指導者・コーディネーターとしての実践的な能力を向上させる。

＝研修の概要＝

①3期生を対象とした基礎編の概要（受講者：27名 内3期生24名）

期日：平成23年11月19日（土）

本年度から，別府大学との共催で実施することとし，基礎編は2会場で実施した。

〈大分大学会場の講座の内容〉

研修1：子どもの「生き方」の学びを支える地域の教育資源と大人の役割

講師 生重幸恵氏

特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク 統括マネージャー
社団法人キャリア教育コーディネーターネットワーク協議会 理事長
(文部科学省)中央教育審議会 中央委員

研修2：教育の協働(協育)に関する基礎研修～コーディネーターとしての基礎知識を学ぶ～
大分大学高等教育開発センター 教授 中川忠宣

研修3：企業としての幼稚園，教育機関としての幼稚園＝地域の子どもを育てるために＝
学校法人渕野学園 富士見が丘幼稚園 理事長 渕野二世氏

研修4：企業のCSR活動(社会的責任)＝学校教育の職場体験活動の支援の取り組み＝
講師(株)翼 社長 麻生雅憲氏

(別府大学会場の講座の内容)

研修1：学校と地域社会の協働とは ー地域社会による学校支援の必要性ー
別府大学 准教授 瀬戸口昌也氏， 同准教授 長尾秀吉氏

研修2：ディスカッション 「別府市における『協育』へのとりくみ」
登壇者 大平山小学校元学校支援ネットリーダー 登田やよい氏
別府市教育委員会生涯学習課 社会教育主事 永井実氏
司会 別府大学 准教授 瀬戸口昌也氏

研修3：子どもの「生き方」の学びを支える地域の教育資源と大人の役割
講師 生重幸恵氏

特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク 統括マネージャー
社団法人キャリア教育コーディネーターネットワーク協議会 理事長
(文部科学省)中央教育審議会 中央委員

(大分大学会場からのTV中継)

研修4：企業のCSR活動(社会的責任)＝地域活性化や職場体験活動の支援の取り組み＝
講師(株)翼 社長 麻生雅憲氏

②3期生を対象とした中級編の概要(受講者：20名)

期日：平成24年3月17日(土)・18日(日)

講義1 家庭教育の現状・課題と教育の協働の視点

講師 大分大学教育福祉科学部教授 山岸治男

講義2 地域社会の現状・課題と教育の協働の視点

講師 大分大学高等教育開発センター准教授 岡田正彦

講義3 学校教育の現状・課題と教育の協働の視点

講師 大分大学教育福祉科学部教授 山崎清男

※事例発表 佐伯市立蒲江小学校教諭 伊東俊昭

講義4 子どものための「協育」を推進するコーディネーターの実際

～全国のキャリア教育コーディネーターの活動事例を含めて～

講師 特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事長 生重幸恵氏

講義5 身近なエリアの人を巻き込んで企画する「子どものためのプログラム」作成

(演習) 講師 特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事長 生重幸恵氏

特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク 井上尚子氏

講義6 教育資源のネットワーク化のための「協育」アドバイザーとしての役割

(演習) 講師 大分大学高等教育開発センター教授 中川忠宣

③2期生を対象とした上級編の概要(受講者：11名 内2期生8名)

期日：平成23年9月27日(火)～28日(水)

- 財団法人山口県ひとづくり財団 県民学習部「生涯学習推進センター」
 - ・山口県民の学びを支援すると共に、「人づくり・地域づくりフォーラム」を開催し地域活動リーダーの育成を行う等、県民の生涯学習・社会教育活動の推進状況について学んだ。
- 山口市鑄銭司小学校 (山口県山口市大字鑄銭司)
 - ・平成21年度から先導的に取り組み始めた、地域住民が学校教育にどうか関わり、支援してくかというコミュニティースクールの取り組みについて学んだ。

＝NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの設立＝

養成講座の修了生による組織化については、その目的、活動内容等を検討しつつ、「大分県『協育』アドバイザーネット」という名称で立ち上がった。その後、市民・企業・団体・教育機関などと一層協力しながら『協育』を推進するためには、県民の方々や各種組織等から認知されることの大きさを感じ、今後、県内各地で取り組まれている様々な『協育』実践を交流し合い・重ね合い・深めい・広め合うためにNPO法人をめざし、平成23年12月7日に認証された。更に、全県的なネットワークづくりをめざし、平成23年12月18日に設立された「大分県『協育』ネットワーク協議会」の事務局として、新しい公共の担い手づくり、新しいパートナーづくり、新しいアドバイザーづくをめざして活動を行うこととしている。

○会員数 (H24.3.31 現在)

第一期生	第二期生	第三期生	総会員数
15名	15名	32名	62名

○事業内容

①人材育成事業

・学習ボランティアや「協育」アドバイザーの育成、「協育」コーディネーターの交流とともに会員の積極的な研修活動への参加を進める。

②普及・実践事業

・「教育の協働」を推進するためのモデル的な事業や、青少年の課題に対応して「協育」という点からのプロジェクト的・プログラム開発事業を行う。

③研究・啓発事業

・「教育の協働」の推進に関する調査や資料等の作成、活動に関するPR活動を行う。

(3) 学生の生涯学習機会の提供

1) 学習ボランティア『フォーバル』の活動

「学習ボランティア『フォーバル』」の活動を、「学習ボランティア入門」の授業と連動させることによって、学生のボランティア活動のシステムづくりを行った。年度当初の募集や研修会などを通して、平成23年度は新規に学習ボランティアに登録した学生が27名（平成21年度10名、平成22年度27名）あり、これまでの活動を体系的に行う基盤作りをした。

* 「フォーバル」とは

Oita University Volunteer Activity for Lifelong Learning = 「Fouvall」(フォーバル)

* H23年度末登録者数 (毎年、年度当初に更新)

H20年登録：3名 H21年登録：10名 H22年登録者：27名 H22年登録者：27名

【平成 23 年度の活動】

* ボランティア研修会

- ・ 4 月 27 日 前期加入会員ミーティング (25 名参加)
大分大学附属中学校ボランティア「サタデー・スタディー」の説明・研修会
- ・ 12 月 18 日 後期加入会員ミーティング (参加者 1 名)
- ・ 12 月 19 日 後期加入会員ミーティング (参加者 6 名)

* 活動実績

実施日	実施内容	参加人数
6月25日	別府市立朝日中学校1年生の数学と英語の学習支援活動	23
6月26日	別府市立朝日中学校1年生の数学と英語の学習支援活動	11
8月8日～11日	ふるさと再発見講座子どもふるさと体験学inくにさき公開講座の準備・班指導者としての参加(国東市梅園の里)	5
8月21日	富士見が丘幼稚園エコフェスタタベの演奏会	2
9月24日～25日	ふるさと再発見講座里海体感講座公開講座の補助(佐伯市大分県マリンカルチャーセンター)	2
11月6日	大分大学開放イベントでの生涯学習見本市での読み聞かせ・エコ診断への参加	3
9/17～18	別府市立朝日中学校の「朝日村フェスタ2011」の会場設営・ブース運営・演奏・会場片付け	2
11月19日	大分大学自主講座「中小企業の魅力大発見プロジェクト講座」の会場設営・受付	2
12月18日	大分県「協育」ネットワーク協議会設立総会の会場設営・受付・演奏	3
2月18日	大分大学高等教育開発センター事業の第1回「協育」見本市の会場設営・受付・ビデオ撮影	3
2月24日～26日	第5回「地域発活力・発展・安心デザイン実践交流会」(梅園の里)の準備・発表・受付・運営	2
3月4日	旦野原公民館で老人会との交流(例会に参加し, 交流計画の検討)	2
3月12日	大分県中小企業家同友会理事会で, 「中小企業の魅力大発見プロジェクト講座」の中小企業研修体験の報告	3
5月～1月	「サタデー・スタディー」事業として附属中学校1年生への学習支援	24
4月～3月	鴛野小学校での読み聞かせ活動	3

2) 中小企業の魅力大発見プロジェクト事業 (自主講座)

平成 23 年度に経済産業省が実施した「産学協働教育を通じた中小企業の魅力発信事業」を、九州では熊本、佐賀、福岡及び大分大学高等教育開発センターの 4 地域で実施した。そこで、本センターでは生涯学習の観点から、地域の企業等との連携を密にして、自主講座として開講した。目的を、学生の進路選択等の視野を拡大し、自分自身の将来についてキャリアをデザインしていくための学びの機会を提供することとし、これまでに学生の視野に入れていないであろう中小企業の魅力を

発見することを目指すプログラムを実施した。

実施に当たっては、「中小企業の魅力大発見プロジェクト事業」として、それぞれのノウハウを持つ四者が協力して行う「協育」という仕組みで実施することとした。

＝事業の概要＝

☆事業の目標

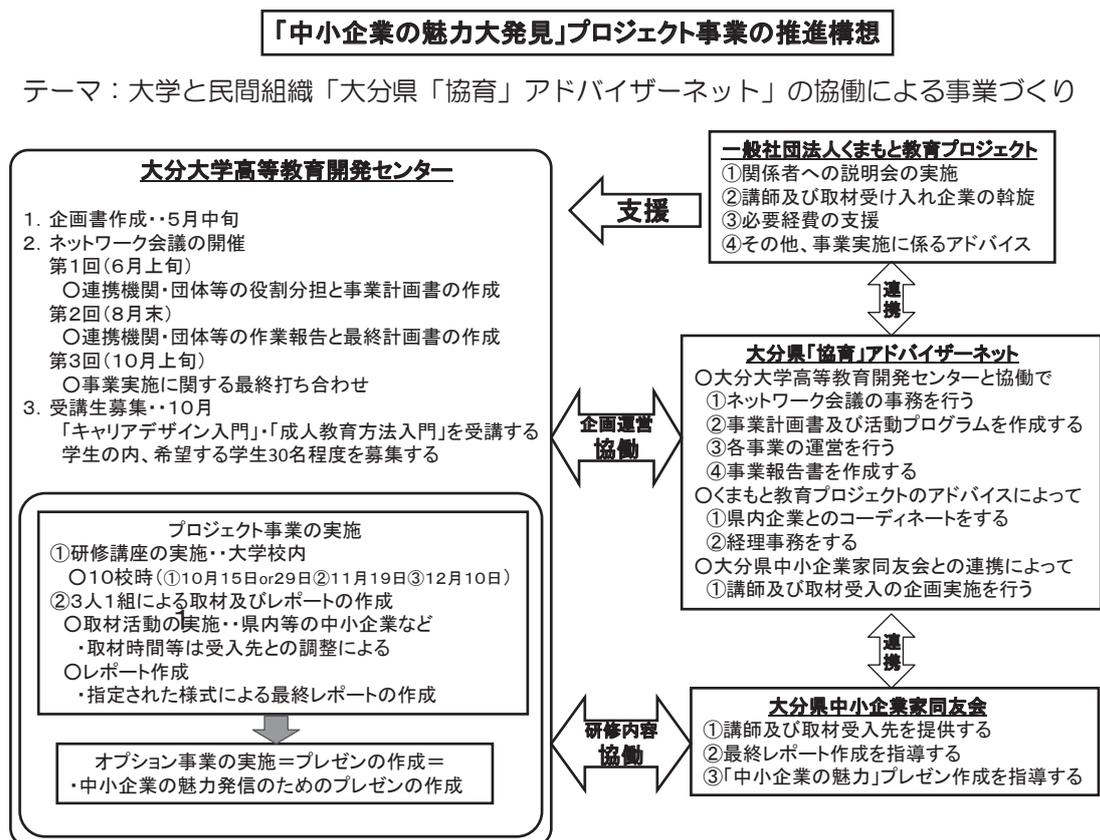
- ①講習と取材活動を通して社会人基礎力の向上を目指す。
- ②学生自身が、自分の将来像を職業と関連づけて描くことを目指す。
- ③関係者同士の恒常的な交流のネットワーク化を目指す。

☆事業期間 平成 23 年 6 月～平成 23 年 12 月 31 日

☆事業内容

- ①講義形式の講習 90 分×10 回
- ②3 人 1 組での取材活動とレポート作成
- ③オリエンテーション科目とフォローアップ科目
- ④オプション事業＝プレゼンの作成＝

＝事業実施体制（連携先）と役割＝



《受講者数》

講義 1	講義 2	講義 3	取材活動
8	18	18	8

＝講習プログラム＝

実施体制と役割に従って業務を分担して行い、講師及び取材先は一部を「協育」アドバイザーネットワークが担当したが、ほとんどは大分県中小企業家同友会において選定した。

☆講義

コンセプト1：企業とは！。そして中小企業の可能性！（10月15日）

講義①人間にとっての「職場」とは何か＝企業が求める人材＝

講義②中小企業の魅力を生かした海外への進出

講義③企業内の人間関係＝雇用者と従業者の関係＝

講義④中小企業の魅力を探る＝企業現場を訪ねてみよう＝

コンセプト2：企業の地域貢献（11月19日）

講義⑤魅力ある地場産業の展開＝地域と繋がる＝

講義⑥地域の教育資源としての企業の役割

講義⑦企業としての幼稚園、教育機関としての幼稚園＝地域の子どもを育てるために＝

講義⑧企業のCSR活動（企業の社会的責任）

＝学校教育の職場体験活動の支援の取り組み＝

コンセプト3：現代社会の経済活動における中小企業の役割と今後の展望（12月10日）

講義⑨企業が追うものは何か

シンポ⑩中小企業の経営上の課題と今後の展望

☆取材活動

1班（株）翼：旅館・飲食等のサービス業学生（2名）

2班（株）地域科学研究所：地域ブランド構築，地域経営コンサルティング学生（3名）

3班（有）上田椎茸専門店：椎茸製品の製造販売業学生（3名）

＝まとめ＝

○学生の感想から

国立系の大学においては、学生は中小企業へ目が向いていないことがよく分かったが、本講座を受講した学生の多くは「目から鱗」「新しい発見」という感想を持ったことは事実である。

【受講生の感想】今回「中小企業の魅力大発見」プロジェクトの各講義を受講したり、企業への取材を行って、初めて中小企業とはどういう企業なのかを入り口だけではあるが知った。私たちが教育系学部にも所属していることもあり、企業はどのようなものであるのかを知る機会は自分で得ない限り無い。企業といえば、テレビコマーシャルなどを放送している、いわゆる大企業か、地元の有名な企業ぐらいしか知らなかった。今回のプロジェクトだけでも魅力的な中小企業がいくつもあったので、日本には数え切れないぐらいの魅力あふれる中小企業があるに違いない。企業にはぜひ自社のアピールを今まで以上に組み込んでいただくと、学生が中小企業に目を向けるきっかけとなるはずだ。たとえば、大学と連携して講義を行ったり、複数の企業が合同でPRのためのCMやパンフレットを作ったり、大学祭に出店したりすることが考えられる。就職活動中の学生以外にもPRし、より多くの学生に中小企業について知る機会をつくってもらえることを希望する。

○「協育」という視点から

四者がそれぞれの役割をきちんと担うことにより、本事業が成果をあげることができたと考える。特に、教育系の本センターが繋がりが少ない企業の積極的な支援、運営における「協育」アドバイザーネットワークの学生への関わり等、協働の重要性とそのシステムに関するモデル事業となったと考えられる。

(4) 大学教育と生涯学習の接続・連携

1) 生涯学習・社会教育に関する授業の実施（教養教育）

【生涯学習論入門】

生涯学習に関する基本的理解を得、大学の授業なども含めて自分の学習を経営し、展開するための視点を獲得することを目的として、生涯学習に関わる諸側面を講義した。

【キャリアデザイン入門】

自分自身のキャリア（進路・職業）をデザイン（設計・構想）する際に必要な考え方について、「キャリア論」や「学習論」の観点から自己・他者理解を深めることを目的として、演習と講義をした。

【社会教育から見た「教育の協働」】

より豊かな学校教育活動を支援するための地域住民の活動のあり方、教職員の意識について、調査研究資料等を参考にしながら、演習と講義をした。

【成人教育方法入門】

人格が確立した成人への教育の方法について、ファシリテーターの育成という観点から演習と講義をした。

【学習ボランティア入門】

きっちよむフォーラムで学生から要望があったボランティア活動を単位化する授業として、ボランティア活動を中心とした授業である。

①講義：4時限（授業趣旨、学習ボランティアの意義・心得等）

②活動：9時限（13時間以上）

※実際に地域へ出かけて子どもや高齢者等に関わるボランティア活動を行う。

③振り返り：2時限（ボランティア報告会とまとめ）

2) 本学及び学部の授業・講習との接続

【教育本質論】

「教育本質論」は教員免許状取得の必須科目であり、基本教職に関する科目に位置づけられている。教員免許状取得を希望する学生が最初に受講する科目になる。今年度は後期のみ開講した。教育の概念から始まり、教育の歴史、方法、教育社会学など、教職を志す学生に持ってもらいたい「教育という事象を見る視点」の獲得を意識して授業を進めた。

【大分の水Ⅰ】 【大分の水Ⅱ】 【里海と里山Ⅰ】 【里海と里山Ⅱ】

これらの科目は、平成21年度選定大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム「水辺の地域体験活動による初年次教育の推進—学生の社会性向上を図る総合的教養教育の実践—」（以下水辺GPと略記）の取り組みとして行われている授業科目であり、水辺GPの事務局員である岡田が関与している。具体的には、【大分の水Ⅰ】および【大分の水Ⅱ】では、週末に行われる地域体験活動プログラムのコーディネーターや運営を行い、【里海と里山Ⅰ】および【里海と里山Ⅱ】では、学生を対象に行われる集中講義を企画運営するとともに、現地でのワークショップで役割を分担した。教室では意欲が高くない学生であっても、現地で地元の人々の指導を受ける際には意欲的な姿勢を見せる傾向があり、想定以上の効果を得ることができた。

【教師学】（3年生：複数教員）

「教師学」は教員免許状取得の必須科目であり、3年生前期までの学習を整理統合し、自らが目指す教師像について、生涯学習の観点から、社会教育との連結という視点での指導を行った。

【教師学】（1年生：複数教員）

1年生の「教師学」は、平成22年度からのカリキュラムの再編成で始まった科目で、教員免許状取得の必須で、教員としての学びを計画付ける導入科目として設定された。求められる教師像を探る中で、自らが目指す教師像について、生涯学習の観点から社会教育との連結という視点での指導を行った。

【中学校学級経営論】

「中学校学級経営論」は中学校教員一種免許状取得の必須科目であり、学校教育の中での中学校という特性を中心に、「学級経営案の作成」を授業の中心にして、講義と演習を交えて授業した。

【教員免許状更新講習】

中川が現職の教職員の免許状更新講習において、必須科目である「専門職たる教員の役割」の講座（4コマ）及び、その講義内容をさらに演習等で深める「社会教育と学校教育の連携」という選択科目（4コマ×1回）を担当し、学校教育を行う教員の役割に加え、それを更に充実するための社会教育との連結という視点での講義を行った。

また、岡田が選択科目「現代の児童福祉と家庭教育の課題」（4コマ×1回の内2コマを担当）を担当した。

3) 概算要求やGP事業

○GPプロジェクト

- ・大学教育・学生支援推進事業

【テーマA】大学教育推進プログラム「水辺の地域体験活動による初年次教育の展開－学生の社会性向上をはかる総合的教養教育の実践－」

※プロジェクトの推進を図る事務局のメンバーとして、プロジェクトの企画・運営全般に関与した。特に、学生対象の授業での指導に加え、このGPで形成することができた様々な人的ネットワークを大学開放事業でも活用し、高等教育と大学開放の融合的事業を推進することができた。

○概算要求

- ・「動機付けと形成的評価を重視した学士課程教育開発－学生のふり返りと見通しを促すシステム開発－」（平成22年度～24年度）

※主管センターとして取り組みを推進する必要がある。具体的には、全学教育機構運営会議と連携してプロジェクトを推進した。

(5) 情報収集提供・学習相談活動

1) 情報収集・提供

平成 21 年度末に本センターホームページの生涯学習関連をリニューアルしたHPを活用して、年度当初には年間計画を掲載すると共に、年間を通して各講座等の詳細情報とその実施報告の日常的な更新をした。

＝大分大学高等教育開発センター生涯学習関連ホームページの構成＝

概 要：①生涯学習支援の概要 ②年度事業計画 ③研究資料 ④生涯学習情報
県民の皆様へ：①公開講座の紹介 ②公開授業の紹介 ③各種学習機会の紹介
学生の方々へ：①ボランティア情報 ②学習ボランティア申し込み ③学習支援
お問い合わせ

また、NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット及び大分県「協育」ネットワーク協議会を支援してホームページを立ち上げると共に、平成 24 年度当初末のオープンを目指して、県内の様々な青少年の育成に係る情報を一元的に提供する「大分県『協育』ポータル」を建設中である。

①NPO法人大分県『協育』アドバイザーネット

<http://www.kyouiku-adviser.net/>

②大分県『協育』ネットワーク協議会

<http://kyouikunet.sakura.ne.jp/kyougikai/>

③大分県「協育」ポータル（建設中）

<https://www.kyouiku-portal.net/>

情報提供については、ホームページで公開講座・公開授業の受講者募集や公開講座の授業・活動風景を含めた活動状況の報告などを行うとともに、公開講座・公開授業パンフレットを前期、後期別に2回作成して、大分市を中心に配布したり、センターが主催する各種講座については別途チラシを作成して事業ごとに募集をするなどして、広く県内全体への広報を行った。新たな取り組みとしては、平成 24 年度の公開講座・公開授業の広報を新聞チラシに挿入しての配布と、NPO法人大分県『協育』アドバイザーネット及び大分県『協育』ネットワーク協議会員へ配布することによって情報の広がりを図った。

2) 学習相談

社会人の学習活動へのアドバイスや学生の授業や卒業論文、就職活動等の生涯学習に関わる内容について、資料を提供するなどして相談活動を行った。

(6) 学内のネットワーク化

1) 部門会議の充実

年度当初の年間実施計画の協議、後期における各種取り組み計画等について、部門長から提案して審議するとともに、個別の案件については、関係する部門委員に相談するなどして生涯学習関連の取り組みの充実を図った。

2) 生涯学習支援に関する教員のネットワーク化

公開講座の実施については、各学部の計画での実施や教員が自主的に実施するなどのシステムがある。さらに、大分水フォーラムを通じた連携やセンターが各課題に対応する講座、市町村と連携・協同で実施する講座・調査研究においても一定のネットワークが出来ている。しかし、今後、生涯学習支援に関する地域貢献をさらに充実するためには、幅広い教員の更なる組織化が求められている。

(7) 地域生涯学習支援システムの整備

本センターの役割として、県民の生涯学習を支援するシステムづくりや、その中で重要な役割を果たす社会教育関係職員、指導者・ボランティアなどの力量の向上に取り組むことで、間接的に地域住民の学習を支援することが重要であることから、そうした連携のシステムをとおしての地域貢献を行うために次の取り組みを行った。

1) 生涯学習支援ネットワーク化の取り組み

①県及び市町村教育委員会とのネットワークづくり

県教育委員会社会教育課や県立社会教育総合センターと、個別の施策に関する打ち合わせ会を実施するなどして、連携を深める取り組みを行った。さらに、本センターが実施する各種取り組みについて市町村事業と協同で実施するなどして市町村との日常的な連携を取りながらネットワーク化を図った。

②県内高等教育機関のネットワーク化

「とよのまなびコンソーシアムおおいた」の生涯学習関係事業（連携講座）において5回の分科会を行う中で、各学校の現状を把握するとともに担当者との意思疎通を図ることができた。今後、将来的なネットワーク化について引き続き検討することとしている。

＝実施した連携講座＝

- ①パソコン講座（大分工業高等専門学校・大分県立芸術文化短期大学・日本文理大学）
- ②大分の里海と里山（大分大学・別府大学）
- ③多文化共生社会のために（大分大学・大分県立芸術文化短期大学・別府大学）
- ④世界のコトバ・コトバの世界（立命館アジア太平洋大学大学・大分大学・大分県立芸術文化短期大学・日本文理大学）
- ⑤大分再発見講座（大分大学・別府大学）
- ⑥「協育」アドバイザーネット養成講座（大分大学・別府大学）

2) 市町村・団体等との共同・連携事業

～第5回地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会（参加者：118名）～
テーマ～「大いに語ろう！～子ども育ての秘訣、我がまちのひとづくりの夢を～」

主催 東国東地域デザイン会議 大分大学高等教育開発センター
共催 大分県生涯教育学会 NPO法人幼老共生まちづくり支援協会
期日 平成24年2月25日（土）～26日（日）

一 日 目	10:30 開会行事 10:50 基調提案 地域と共に育ち、輝く高校～県立国東高校の事例から～ 提案：大分県立国東高等学校 浅野昌子教諭 11:40 実践事例発表 ○第1分科会：学校や地域活動のために子どもと地域住民を繋いだ取り組み事例（5事例） ○第2分科会：子どもの体験・交流を充実する具体的な取り組み事例（5事例） 16:00 特別講演 講師 三浦清一郎 氏（生涯学習・社会システム研究者） 演題：無縁社会の発生源と「協働」の方法 17:30～情報交換会（みなさんの活動状況を交換しましょう）
二 日 目	9:30 基調講演 講師 中川忠宣 氏（大分県「協育」ネットワーク協議会会長） 演題：「協育の協働」の動向～大分県「協育」ネットワーク協議会の設立～ 10:30 テーマを語ろう！全体討論会 テーマ：大いに語ろう～子ども育ての秘訣、我がまちづくりの夢を！～ 1部：リレートーク（参加者が本会テーマに関する意見を自由に3分間発表） 2部：会場参加者による全体討論（リレートークに関する実現性と実現への方策） 12:00 閉会行事

★実践事例

- 「学校と地域の教育力を繋ぐ PTA 活動の事例」 別府市立朝日中学校PTA：山本美咲
- 「地域連携を軸にした学校経営『安岐小プラン2011』」 国東市立安岐小学校校：岡松 寛
- 「くにさっき子の居場所作り」 (国東市) 国東地区コーディネーター：萱島かよ
- 「直入放課後子ども教室の実践報告」 竹田市直入放課後子ども教室
峯野希美(プロデューサー)・大塚千鶴・森田恵子・吉野聖子(指導者等)
- 「父親のつながりづくりについて」～おおいたパパくらぶの取り組み～
(大分市) 駕野小おやじ倶楽部：大西正久
- 「子どもに体験という学びの場を！」 (広島市) ビッグ・フィールド大野隊：谷村歩美
- 「運動の苦手な子集まれ」 (国東市) 菜の花スポーツ塾：有次昭二
- 「みんなで遊べばだれもが仲良し」 (大分市) NPO法人ふれあい囲碁ネットワーク：谷川真由美
- 「親子で集う公民館」 佐伯市宇目振興局：戸高直人
- 「公民館活動における『協育』の取り組み」 (大分市) 川添校区公民館：赤峰友子

～第1回「協育」見本市の開催～

「学習」と「教育」又は「需要」と「供給」をどうマッチングするかが「教育の協働」の施策の中核である。そこで、双方が集い、地域教育資源と学習ニーズのマッチングを行う「協育見本市」を開催し、その場で、子どもたちが学校教育や社会教育において、これまで無かった学びを広げていくために提供できる教育資源の集いを開催した。

- 日時 平成24年2月18日（土） 10:00～15:30
- 会場 別府市労働者福祉センター（大分県社会教育総合センター）
- 共催 NPO法人 大分県「協育」アドバイザーネット・大分県「協育」ネットワーク協議会
- 協力 別府市地域婦人連絡協議会、別府市立別府商業高校、その他別府市内の各種団体

＝コンセプト＝

- 展示・紹介や交流・活動の場を通して、教育の協働に関する取り組みを紹介する。
- 各団体が交流することで、団体間の活動内容・事業内容の学びあい、ネットワーク化を図る。

＝事業＝

※記念シンポジウム（11：00～12：20）参加者：約120名

テーマ：「あなたの力が子どもたちを、地域を輝かせる！」

[シンポジスト]

○別府市教育委員会 参事 溝部 敏郎 氏

別府市は、平成23年度から地域住民の学校支援活動と放課後の子どもたちの安全・安心と体験活動事業のこれまでの実績を基にして、市内全域で一体的に実施するために、街部の公立公民館にコーディネーターを独自で配置する等の先進的な取り組みについての報告でした。

○飯塚市立高田小学校 校長 城谷 登志江 氏

飯塚市内全ての小学校で実施されている地域住民（高齢者）の「マナビ塾」との関わりを持ちながら、平成21年度から本格的なコミュニティースクールとしての教育活動を行い、基礎学力の向上等に大きな成果を上げている取り組みの報告でした。

○（東京都）キャリア教育コーディネーター 香月 よう子 氏

アナウンサーという職業の一方で、「きてきて先生プロジェクト」の活動をきっかけに、杉並区の教育コーディネーター、東京都のプラットフォーム事業などに関わっており、実際の教育コーディネーターの活動や学校支援本部を立ち上げた経験から、様々な立場の人たちが協働していく際の注意点を、多様な視点からうかがいました。

[コーディネーター]

○大分大学高等教育開発センター教授 中川 忠宣

《～LIVEでネット配信》

※記念シンポジウムを同時に、自宅で！公民館で！自由にご覧いただけるよう配信し、23のアクセスが確認された。大分大学高等教育開発センターのホームページ等にもシンポジウムの様子を配信した。

※協育コーナー（28事業の実施）

◎学びのコーナー

- ・高校生就職面接模擬体験・コーディネーター相談会・ブックトークと読み聞かせの部屋
- ・iPhone&iPad ワークショップ

◎活動紹介コーナー

- ・「エコキャップ」キャンペーン・浜脇子ども太鼓演奏・私たちの野外活動紹介パネル展
- ・自然体験活動紹介パネル展&「トキなりきり体験」・農泊体験紹介パネル展
- ・キワニスドール活動の紹介・トリニータ2012の新情報

◎体験・交流コーナー

- ・ふれあい囲碁ゲーム・タブレット端末体験等・手作りビーチアニマルと遊ぼう
- ・おもちゃの部屋・楽しくゲーム（フリスビーで遊ぼう/ストラックアウトゲーム）
- ・エコイズ・自転車発電機・地球温暖化を学ぼう・七島いでコースターづくり
- ・生き2 ものづくり教室・お手玉づくり/遊び・手作りオリジナル凧づくり

◎総合楽習コーナー

- ・ふいごプロジェクト事業（東日本大震災義捐金）・「協育」フォトギャラリー
- ・交流餅つき大会&ぜんざいづくり・楽しく「スタンプラリー」
- ・閉会イベント（抽選会・餅まき）



〈ボランティアスタッフ〉



〈浜脇子ども太鼓〉

※出店協力者

○出店・参加団体(21団体)

(株)地域科学研究所/パークプレイス/NPO 法人エー・ビー・シー野外教育センター/九重ふるさと自然学校/国東市くにもグリーンツーリズム/浜脇子ども太鼓/大分キワニスクラブ/(株)大分フットボールクラブ/NPO 法人ふれあい囲碁ネットワーク大分/大分市川添公民館運営協議会/大分市川添技能保存会/東国東地域デザイン会議/NPO 法人大分県「協育」アドバイザーネット/地球温暖化防止活動推進センター(津久見美化環境グループ)/フレスポネット/大分大学生き生きプロジェクト/杵築し環境ネットワーク/NPO 法人 BEPPU PROJECT/東国東地域デザイン会議/大分大学高等教育開発センター/中小企業家同友会

○楽しく「スタンプラリー」への協力

イベントへの参加を奨励するためのスタンプラリーについては、「協育」見本市関係では、九州電力、イオンパークプレイス、(株)翼など、多くの方に景品を提供していただいた。

～NPO法人大分水フォーラムとの連携事業～

NPO法人大分水フォーラムとの連携では、センター専任教員の岡田がフォーラムの事務局員として、事業の企画・運営に関わった。また、同フォーラムは、平成21年度に選定された大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム「水辺の地域体験活動による初年次教育の推進—学生の社会性向上を図る総合的教養教育の実践—」での取り組みを推進しており、こちらの取り組みとも重ねる形で、プログラムを企画・運営した。その結果、大学生向けの授業と地域向けの公開講座を並行してある部分は重ねながら実施し、相互に教育効果を高める工夫を行うことができた。GPの取り組みは23年度で終了となるが、大分水フォーラムとの連携は、平成23年度以降も継続する計画である。

(8) 生涯学習推進と社会的活動の取り組み

県及び市町村教育委員会生涯学習行政等と連携して、生涯学習・社会教育に関する調査研究の成果を普及・還元するとともに、本センターが持つ各種情報等を生かした生涯学習の推進とともに、センターとしての社会的活動による地域貢献の取り組みを行った。

1) 県教育委員会生涯学習・社会教育行政との連携

＝生涯学習関係者研修事業＝

【県教育委員会及び県立社会教育総合センター等研修事業】

教職員研修、コーディネーター研修、おおいた学びの輪推進事業における講師やファシリテーター

ターとしてセンター教員2名が担当した

＝委員等への就任＝

【県教育委員会社会教育課関係】

○大分県社会教育委員（岡田）

大分県社会教育委員として、「子どもの「生きる力」をはぐくむ学校教育と社会教育の協働の在り方について（答申）～学校教育と社会教育の協働を推進するための社会教育主事の役割について～」に関する答申の作成等を行った。

【県立社会教育総合センター関係】

○調査研究委員（中川）

「教育の協働」の効果的な推進に関する調査研究に関する委員として、調査の企画にあたった。

【大分県関係】

○大分県協働推進会議委員長（岡田）

○大分県新しい公共支援事業運営委員会委員長（岡田）

○大分県青少年健全育成審議会委員（岡田）

○大分県親学推進員講座（岡田）

2）市町村教育委員会生涯学習行政との連携

＝生涯学習関係者研修事業＝

○大分市社会教育振興大会講師（岡田）

○佐伯市社会教育大会講師（岡田）

＝委員等への就任＝

○由布市指定管理者選定委員会委員長（岡田）

○大分市あなたが支える市民活動応援事業選考委員会委員長（岡田）

3）国，大学，団体，機関等との連携

＝生涯学習関係者研修事業＝（主なもの）

○熊本県教育委員会主催コーディネーター研修会における講師及びコーディネーター（中川）

○全国公民館研究大会（佐賀大会）の助言者（中川）

○文部科学省と学校支援コーディネーター等との意見交換会の提案・助言者（中川）

○国立教育政策研究所社会教育実践研究センター平成23年度社会教育主事講習 特講「大学と地域社会」担当（岡田）

○国立教育政策研究所社会教育実践研究センター平成23年度全国生涯学習センター等研究交流会講師（岡田）

○長崎県公民館大会講師（岡田）

＝委員等への就任＝

○「優れた『地域による学校支援活動』」文部科学大臣表彰の審査員（中川）

○とよのまなびコンソーシアムおおいた生涯学習分科会長（中川）

○中国・四国・九州生涯学習実践交流会大分県実行委員（中川）

○地域発「『活力・発展・安心』デザイン実践交流会」委員及び事務局員（中川・岡田）

- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター調査委員会委員（岡田）
- 子育てネットワークおおいた委員（岡田）
- おおいた水フォーラム事務局（岡田）

（9）調査研究及び刊行物

○「協育」事例集「教育の創造～地域『協育』のススメ」（第1巻）

（大分大学高等教育開発センター編集）

改正教育基本法の趣旨を踏まえ、平成20年度から教育の協働（以下「協育」という。）に関する調査研究と指導者の育成事業を実施し、調査研究についてはこれまで3年間にわたってその結果を報告してきた。本事例集は、指導者育成講座修了生の育成と活動を中心に事例としてまとめたもので、「教育の創造」をこれまでの「学校教育の創造」から視点を変えて、子どもたちに身近な地域において、地域住民が、学校や家庭と一緒に子どもを育てていくという、地域の「協育」を進めていくことを提案するものである。（前述のホームページに掲載している）

第1章 教育の創造～地域「協育」のススメ・その1～

第2章 大分県における「協育」の事例

第1節 NPO法人「協育」アドバイザーネットワーク会員の地域での活動事例

第2節 NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットワーク主催のモデル事業

第3節 大分大学高等教育開発センター主催のモデル事業

事例1 「子どもふるさと体験学 in くにさき」の試み

事例2 大分大学生のキャリア教育支援の取り組み

事例3 第1回「協育」見本市の開催

第3章 地域「協育」推進の取り組み

第1節 大分県が進める「協育」ネットワークの取り組み

第2節 地域発『活力・発展・安心』デザイン実践交流会

第3節 大分大学高等教育開発センターの取り組み

1. NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットワークの設立

2. 大分県「協育」ネットワーク協議会の設立

3. 情報プラットフォーム「大分県『協育』ポータル」

○教育の協働を推進する人材育成とネットワーク化の試み

～「協育」アドバイザー養成講座の実践から～

（平成23年度大分大学高等教育開発センター紀要）

子どもたちをめぐる様々な課題への対応、将来の地域を担う子どもの育成への期待を受けて、平成18年12月の教育基本法の改正において、その第13条で、これまで言われて続けた「教育の協働」を法律で定めたということの意義は大きいものであると考えている。国は改正教育基本法を受けて、平成20年度から「学校支援地域本部事業」を実施し、その中核となる「コーディネーターの配置」を推進してきた。大分県においてはそれ以前の平成17年度から県単独事業として、コーディネーターの配置を中核としたモデル的な事業（「地域協育振興モデル事業」）を県内4市で実施していた。こうした事業が「施策」として徐々に定着しつつある中、本報告は大分大学高等教育

開発センター（以下「本センター」という。）が平成 21 年度から実施した、地域の指導的立場にある者を対象に、より高度なコーディネート力（アドバイザーとしての力量）を養成するための研修事業と、その修了者のネットワーク化に関するものである。

○地域との関わりによる子どもの学習活動の推進（Ⅲ）

ーコーディネーターの役割分析を中心にー

（日本生活体験学習学会誌第 12 号）

教育基本法第 13 条の規定をふまえ、学校と地域社会との連携・協働体制を構築し、地域ぐるみで子どもを育てるシステムづくりを目的とした「学校支援地域本部事業」が全国展開されて 3 年以上が経過した。今回は、過去 2 回の報告で示せなかった専任コーディネーターの役割とその効果について分析し、そこから見えてくる教育行政としてのコーディネート機能のあり方を整理することとした。

この調査から、コーディネーターが配置されている学校の教職員ほど、受け入れの実績の特徴として「学習・実習サポーターの受け入れ」や「コーディネーターによるボランティアの発掘・依頼」が進んでおり、今後の学校支援の推進方策について「コーディネーターの配置」の必要性を指摘しており、その役割がきわめて重要であることが見えてきた。さらに、学校支援活動は「学校の多忙化につながる」として否定的な意識を持っていた教職員の、学校支援に関する意識の変化や、コーディネーターの配置による学校教育への効果（特に、「直接的な子どもへの効果」）等を感じる教職員が増加していることも示された。このことから、コーディネーターの配置について、施策として系統的に推進する必要性が明らかになったこと、さらに、推進するためのコーディネート機能を確立するための社会教育行政の役割について仮説を提案するものである。

（10）大学開放・生涯学習支援における国内の動向～研修・会議を通して～

①全国生涯学習ネットワークフォーラム 2011

1. 主催：全国生涯学習ネットワークフォーラム 2011 実行委員会
2. 期日：平成 23 年 11 月 5 日（土）・6 日（日）
3. 会場：東京都（文部科学省他）

本事業は、平成 2 年に制定された「生涯学習振興法」を受けて、文部科学省が平成 2 年から全国で実施した「生涯学習フェスティバル」の後継事業として始まり、第 1 回は宮城県で実施することとしていた。しかし、東日本大震災のために、準備してきた内容を東京にもって来て、文部科学省が中心となった実行委員会が開催したものである。「ネットワーク」という言葉が事業名に付けられているということは、まさに、今後の教育行政の方向性を示しているものと言えよう。

①趣旨

現在、東日本大震災による未曾有の大惨事から立ち上がるために、多くの方々がボランティア活動に参加すると共に、行政や地域の方々と連携し、様々な復興に尽力している。また、震災をきっかけとして、被災地だけでなく、全国各地において安心・安全な地域づくり、社会づくりに向けた取り組みが始まっている。このフォーラムでは、震災の経験から見えてきた成果や課題を踏まえ、生涯学習を通じた新しい地域づくり・社会づくりの方策を「ネットワーク」という観点から研究・

協議・実践していくことを提言したものである。

②オープニングセッション

東日本大震災から見えてきた生涯学習・社会教育の成果を生かした地域づくり・社会づくりに向けた提言が行われたが、観点は違っていても「ネットワーク」「絆」という言葉で象徴できるという結論である。このことが、午後から翌日にかけて5つの分科会で研究討議された。

③分科会：「これからの地域の絆づくりに向けて今、私たちに求められること」

被災地と東京の子どもたちを結ぶ3元中継で行われた熟議で、子どもたちが支えられた経験、地域を元気づけた経験などを共有しつつ、これからの「絆づくり（助け合い・支え合い）」を探っていった。まさに、体験から生まれる「ネットワーク」の重要性を探っていったと言えるが、午後のシンポジウムでも、その具体的な取り組みが紹介され、今後の多様な分野の関係者のネットワークづくりの可能性、地域住民の日常的な活動のためのネットワークづくりが議論された。

④まとめ

今、日本の教育、地域づくりは「ネットワークづくり」を1つの大きなコンセプトとして推進されており、そのためのシステム作りのプログラム化が急務であると考えられる。

Ⅲ 平成23年度学長裁量経費の事業報告

1. 日本人学生による英語スピーチプロジェクト

プログラム名	学長が直接実施を指示する事業		
事業名	日本人学生による英語スピーチプロジェクト		
挑戦した(する)外部競争的資金	なし	採択状況	

事業概要	<p>この事業は、本学学生の「外国語を含むコミュニケーション能力の向上を図る教育を充実させる。特に、英語については、『仕事で英語が使える』人材の育成を目指して教科内容等の改善を図る。語学能力としての英語、学習内容と関連した英語能力、プレゼンテーション能力の育成をはかる。」ことを目的とし、その具体的な実践の場として、英語によるスピーチコンテストを実施するものである。</p> <p>昨年度までの英語スピーチコンテストの形式は、スピーチの優劣を競う「スピーチ部門」と、学習や研究の成果を英語で報告することも必要であるとのねらいから「プレゼンテーション部門」を設定し、計2部門で実施した。また、出場資格は、日本人学生に限定していた。</p> <p>それぞれの部門で一人10分以内の持ち時間で発表し、その内容、技術を本学の外国語担当教員が審査し、順位を定め成績優秀者を表彰するものである。</p> <p>このコンテストは、平成19年度より毎年開催されており、回を重ねるに従って、発表の内容、英語の表現力ともに向上しているとの評価がある一方で、例年、出場者と参観者が少ないとの指摘もあった。</p> <p>そこで、出場者及び参観者の増加のために、新たに「パフォーマンス部門」を設定し、スピーチやプレゼンテーション以外の形式での出場も可能とし、さらに、この部門に限り外国人留学生にも参加枠を広げた。このことによって、出場者、参観者の拡大が図れるとともに、異文化コミュニケーションのきっかけとなる期待も込めて開催した。</p>
------	---

(1) 事業の成果報告

<p>事業の成果</p> <p>〔事業成果に基づく波及効果等〕</p>	<p>本年度の参加者数について、各部門の出場者及び参観者はともに増加し、特に観客については会場である教養教育棟 27 号教室がいっぱいになるほどの盛況であり、大幅な増員が達成できた。各部門の出場者数は以下のとおりである。</p> <p>スピーチ部門 5名（内訳：教育福祉科学部 1名，医学部 3名，工学部 1名）</p> <p>プレゼンテーション部門 4名（内訳：教育福祉科学部 1名，医学部 2名，工学部 1名）</p> <p>パフォーマンス部門 4名（内訳：経済学部 1名，医学部 2名，工学部 1名）</p> <p>経済学部学生と工学部学生とともに留学生。</p> <p>スピーチ部門とプレゼンテーション部門の発表について、本学の外国語担当教員が審査し、順位を決定した。パフォーマンス部門については、会場の参観者が審査を行い、クリッカー（オーディエンス・レスポンス・システム）による無記名投票で順位を決定した。</p> <p>審査結果に従って、学長が以下のように表彰した。各部門について最優秀賞 1名（計 3名）に賞状，楯，副賞を贈った。同様に各部門の優秀賞を各 1名，それ以外の出場者には奨励賞として賞状と副賞を贈った。</p> <p>今回の実施では、パフォーマンス部門を新たに設定し、留学生にも参加の門戸を拡大したことで、出場者，参観者ともに増員することが出来た。また，大学開放イベントの一環としたことで全学的な周知にも寄与できたと考えている。</p> <p>本事業の波及効果として，参加者から以下のような意見が聴取できた。</p> <p>【学習意欲の向上】</p> <p>本コンテストが毎年開催されるとの期待から，ふだんの学習内容や生活の出来事を，大勢の聴衆を前にして英語で話せないかと考えるようになった，との意見があり，英語を使う行為が身近に考えられるようになったと言える。</p> <p>【コミュニケーション能力の向上】</p> <p>留学生が大勢参観に来たので，本コンテストの休憩時間や審査の待ち時間に，日本人学生と留学生との間で自発的な交流が多数行われ，発表内容を話題の発端とした英語によるディスカッションも随所に見られた。このことから，この事業は，今後の外国語を使ったコミュニケーションを増加させる契機として機能すると考えられる。</p>
-------------------------------------	--

(2) 経費の実績報告

配分額	実支出額	差引	残額が生じた理由
円 200,000	円 200,000	円 0	

(3) 実支出額内訳

区分	実支出額	主な支出内訳	割合
	円	円	%
設備備品費	0		0
消耗品費	200,000	トロフィー, iPod touch, iPod nano, 事務用品外	100
旅費	0		0
謝金・賃金	0		0
役員費	0		0
委託費	0		0
その他	0		0

2. 大分大学を拠点とした「教育の協働」推進ネットワーク構築事業

プログラム名	社会連携推進プログラム		
事業名	大分大学を拠点とした「教育の協働」推進ネットワーク構築事業		
挑戦した(する)外部競争的資金	「平成23年度科学研究費助成金」	採択状況	不採択

事業概要	<p>高等教育開発センターの2期中期計画の基盤となる、今後の生涯学習・社会教育を推進するためのネットワーク化（体制整備）に関する方針によって、平成23年度計画では「学習機会提供と学習成果活用の接続、地域における接続ネットワークの形成に重点的に取り組む大学開放事業を企画し、事業の方向性と研究開発を行う。」とし、今後のネットワーク形成について本格的に取り組んだ。その概要は、教育の協働を促進する中核的な役割を担い、指導的人材となるアドバイザーを養成し、学校教育や社会教育、安全安心な地域づくり等の活動において、そのニーズを掘り起こすとともに、地域社会全体の教育力を向上させ、単独では担いきれない教育を協働して行うことを進めるモデル的な取り組みを行うことである。</p> <p>事業の中心は、本年度は三期生を対象として実施した「『協育』アドバイザー養成講座」の修了生で組織する「大分県『協育』アドバイザーネット」がNPO法人として活動を始めた。さらに、このNPO法人が事務局を務める、県内の企業、団体、機関等で組織する「大分県『協育』ネットワーク協議会」を30組織で設立し、現在拡大中である。これらの組織は、地域において取り組みを接続する有効なネットワークであるとともに、学習者が学習成果を活用して取り組みを行うことを支援するシステムでもある。また、こうした組織の協働・共催による、環境活動や青少年対象のモデル的な事業等の研究開発を実施し、取り組みの方向性を検討してきた。この中で、当初計画していなかった大学生のキャリア支援講座「中小企業の魅力大発見」を企画実施するなど、今後、このネットワークを活用した各種事業の実施や、大学開放事業の企画・実施、モデル的な事業のスタンダード化、現在の公開講座・公開授業の普及・拡大等の基盤づくりができたと考えている。</p>
------	--

(1) 事業の成果報告

<p>事業の成果</p> <p>〔事業成果に基づく波及効果等〕</p>	<p>【具体的な実績と成果目標達成度】</p> <p>1. 協育アドバイザー養成講座 (事例集 P39)</p> <p>(1) 受講者：基礎編 (27名)・中級編 (20名)・上級編 (12名・2期生)</p> <p>(2) 成果目標の達成度</p> <p>①会員数</p> <p>「協育」アドバイザー養成講座の修了生の大分県「協育」アドバイザーネットワークへの加入者数を平成23年度末に50名にする。</p> <p style="text-align: right;">(平成22年度末35名→23年度末62名)</p> <p>②事例事業数</p> <p>大分県「協育」アドバイザーネットワークの会員が参画する、平成23年度の実践事例数を30事業とする。(実績：事例集掲載数33事例)</p> <p>③NPO法人資格認可</p> <p>平成23年12月7日に、大分県「協育」アドバイザーネットワークが自主運営できる組織としてのNPO法人の資格認可を受けた。</p> <p>2. モデル的实践事業の実施</p> <p>(1) 実施事業</p> <p>①富士見が丘幼稚園で第3土曜日の5回の実践を通した幼稚園教育での「協育」モデル事業を実施した。(事例集 P18・P24)</p> <p>②「協育」ネットと協働して、別府市立朝日中学校区において、学習支援や地域住民・組織と中学生をつなぐモデル事業を実施した。(事例集 P11)</p> <p>③「協育」ネットや地元の団体、高校等と連携して、小学生が中・高・大学生と一緒に「三浦梅園」「両子山周辺の自然と、そこに生息する野鳥・野草」「七島い」等の国東半島の魅力を学ぶ体験講座を実施した。</p> <p style="text-align: right;">(事例集 P26)</p> <p>④大学生のキャリア形成支援のための自主講座として、大分県中小企業家同友会、NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットワークと協働で、中小企業の魅力を発見する講座を開催した。(事例集 P28)</p> <p>構成：講義：10講義 取材活動 (取材と報告)</p> <p>受講生：述べ24名</p> <p>(2)「教育の協働」に関するモデル的实践事業に関わった地域住民等の肯定的評価の数値目標を75%以上とする。</p> <p>(事例)「子どもふるさと体験学 in くにさき」<u>参加児童生徒の肯定率</u></p> <table border="0"><tr><td>①学習への興味関心・満足度</td><td>100%</td></tr><tr><td>②小・中・高・大学生がいたこと</td><td>100%</td></tr><tr><td>③2泊3日という日程について</td><td>86.1%</td></tr><tr><td>④元気よくあいさつができました</td><td>97.3%</td></tr><tr><td>⑤生活の決まりを守れました</td><td>91.5%</td></tr></table> <p>3. 生涯学習見本市の開催</p> <p>(1) 実践交流会 (参加者107名) (事例集 P34)</p>	①学習への興味関心・満足度	100%	②小・中・高・大学生がいたこと	100%	③2泊3日という日程について	86.1%	④元気よくあいさつができました	97.3%	⑤生活の決まりを守れました	91.5%
①学習への興味関心・満足度	100%										
②小・中・高・大学生がいたこと	100%										
③2泊3日という日程について	86.1%										
④元気よくあいさつができました	97.3%										
⑤生活の決まりを守れました	91.5%										

本センターが事務局となって、東国東地域デザイン会議等と共催して地域社会全体の教育の協働に関する実践交流会を1泊2日で実施した。

(2) 協育見本市 (参加者：約 400 名) (事例集P 30)

地域に存在する人的・物的な教育資源を発掘・整理して、受容者と供給資源をマッチングする事業を実施した。

4. 大分県『協育』ネットワーク協議会の設立 (事例集P 41)

大分大学高等教育開発センターとNPO法人「大分県『協育』アドバイザーネットワーク」が連携して、教育の協働に関する活動・取り組みを行う機関・組織等による「大分県『協育』ネットワーク協議会」を平成 23 年 12 月 18 日に 30 組織で設立し、平成 24 年 3 月末現在で 33 団体が参加し、現在、様々な組織へと拡大中である。

5. 「教育の協働」実践事例集の作成

教育の協働を推進する考え方や県教育委員会の取り組み、NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットワークの活動事例を掲載した、「協育」事例集：教育の創造～地域「協育」のススメ (第 1 巻) ～を作成した。今後、活用して啓発を行う。

6. 各種ホームページの開設と運用の支援

- (1) NPO法人大分県『協育』アドバイザーネットワーク
- (2) 大分県『協育』ネットワーク協議会
- (3) 大分県「協育」ポータル (建設中)

【今後への展望】

「大分大学」という看板があったからこそ多くの組織、多くの方々が参集し、賛同し、動いてくれる。まさに、大分大学を拠点とした「教育の協働」推進ネットワークが構築されつつある。

民間レベルの様々な組織のネットワークは全国的にも珍しく、今後、この組織を活用した様々な取り組みが期待されている。特に、共同での事業申請と事業の実施、ホームページ「大分県『協育』ポータル」を活用した情報の一元化の取り組みは、多方面から期待されている。さらに、平成 23 年度に実施した大分大学生対象の自主講座「中小企業の魅力大発見プロジェクト」の継続実施、平成 24 年度前期の公開授業の広報等に大きな成果をあげており、今後に期待できる。

備 考

本取り組みは、本センターの中期計画の生涯学習部門における中核的な事業であり、平成 23 年度においてその基盤が出来たと言え、平成 24 年度から、このネットワークを活用した地域貢献活動を拡充することとしている。

①事例集の作成

= 「協育」事例集 = 教育の創造～地域「協育」のススメ (第 1 巻) 高等教育開発センター編集 (2012 年 3 月)

②実践報告書

教育の協働を推進する人材育成とネットワーク化の試み～「協育」アドバイザー養成講座の実践から～ 2011 年度大分大学高等教育開発センター紀要

③研究論文

地域との関わりによる子どもの学習活動の推進 (Ⅲ) ～コーディネーターの

	役割分析を中心に～ 日本生活体験学習学会誌（2012年1月） ④「第1回協育見本市」プロモーションビデオの作成 「第1回協育見本市」プロモーションビデオを作成し、NPO法人大分県『協育』アドバイザーネットのホームページに掲載 ⑤大分県「協育」ネットワーク協議会の設立に関する新聞報道
--	--

(2) 経費の実績報告

配 分 額	実 支 出 額	差 引	残額が生じた理由
円	円	円	
1,200,000	1,200,000	0	

(3) 実支出額内訳

区 分	実支出額	主 な 支 出 内 訳	割合
設備備品費	円 0		円 %
消耗品費	131,576	事務用品, インクカートリッジ外	11.0
旅 費	185,880	協育アドバイザー養成講座講師旅費外	15.5
謝金・賃金	280,950	ホームページ作成補助, 協育見本市スタッフ外	23.4
役 務 費	0		0
委 託 費	304,000	協育の協働ネットワーク構築事業事務委託外	25.3
そ の 他	297,594	協育事例集印刷代, 協育見本市実施に伴う会場借料外	24.8

IV 付 録

1. センター関係諸規則

(1) 大分大学高等教育開発センター規程

平成20年4月1日制定

(趣旨)

第1条 この規程は、大分大学学則（平成16年規則第8号）第7条第2項の規定に基づき、大分大学高等教育開発センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定める。

(定義)

第2条 この規程において「部局」とは、国立大学法人大分大学部局を定める規程（平成16年規程第14号）第2条第3項第1号に規定する部局のうち、事務局を除く部局をいう。

2 この規程において「部局長」とは、前項に規定する部局を掌理する者をいう。

(目的)

第3条 センターは、学内外の関係機関との連携の下に、高等教育および生涯学習に関する調査・研究及び教育事業を積極的に推進し、もっと大分大学（以下「本学」という。）における教育及び地域社会の発展に寄与することを目的とする。

(業務)

第4条 センターは、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 新規授業・カリキュラム開発に係る業務
- (2) メディア・IT活用関連に係る業務
- (3) FD・授業評価関連に係る業務
- (4) 大学開放推進関連に係る業務
- (5) 生涯学習支援システム関連に係る業務
- (6) その他センターの目的を達成するために必要な業務

(部門)

第5条 センターに次の各号に掲げる部門を置く。

- (1) 新規授業・カリキュラム開発部門
- (2) メディア・IT活用部門
- (3) FD・授業評価部門
- (4) 大学開放推進部門
- (5) 生涯学習支援システム部門

(職員)

第6条 センターに次の各号に掲げる職員を置く。

- (1) センター長
- (2) センター次長
- (3) 専任教員
- (4) 部門長
- (5) センター員

(センター長)

第7条 センター長は、センターの業務を掌理する。

- 2 センター長は、本学の教授のうちから、大分大学学内共同教育研究施設等管理委員会（以下「管理委員会」という。）の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 センター長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、センター長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(センター次長)

第8条 センター次長は、センター長を補佐し、センター長に事故があるときはその職務を代行する。

- 2 センター次長は、本学の教員のうちから、管理委員会の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 センター次長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、センター次長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(専任教員)

第9条 専任教員は、教育研究に従事するとともに、センターの業務を行う。

- 2 専任教員の選考は、管理委員会の議に基づき、学長が行う。

(部門長)

第10条 部門長は、センター長の指示を受け、第5条各号に規定する各部門をそれぞれ統括する。

- 2 部門長は、本学の教員のうちから、センター長の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 部門長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、部門長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(センター員)

第11条 センター員は、担当部門の研究開発、支援等を行う。

- 2 センター員は、本学の教員のうちから、部局長の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 センター員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、センター員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(運営委員会)

第12条 センターの円滑な運営を図るため、大分大学高等教育開発センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

- 2 運営委員会に関する必要な事項は、別に定める。

(専門委員会)

第13条 運営委員会に、業務に係る専門的事項について調査及び実施するため、専門委員会を置くことができる。

- 2 専門委員会については、別に定める。

(事務)

第14条 センターに関する事務は、学生支援部教育支援課において処理する。

(雑則)

第15条 この規程に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は別に定める。

附 則（平成20年規程第8号）

- 1 この規程は平成20年4月1日から施行する。
- 2 大分大学生涯学習教育研究センター規程（平成16年規程第134号）及び大分大学高等教育開発センター規程（平成17年規程第12号）は廃止する。

(2) 大分大学高等教育開発センター運営委員会細則

平成20年4月1日制定

(趣旨)

第1条 この細則は、大分大学高等教育開発センター規程（平成20年規程8号）第11条第2項の規定に基づき、大分大学高等教育開発センター運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定める。

(審議事項)

第2条 委員会は、大分大学高等教育開発センター（以下「センター」という。）の円滑な運営を図るため、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) センターの運営に関する事項
- (2) センターの事業計画に関する事項
- (3) 部門間の連絡調整に関する事項
- (4) その他センターに関する必要な事項

(組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) センター次長
- (3) 専任教員
- (4) 部門長
- (5) 各学部から選出された教員 各1人
- (6) 大分大学学術情報拠点運営会議から選出された者 1人
- (7) 大分大学地域共同研究センター運営委員会から選出された者 1人
- (8) 研究・社会連携部長
- (9) 学生支援部長
- (10) その他センター長が必要と認めた者

2 前項第5号から第7号まで及び第10号の委員は、学長が任命する。

3 第1項第5号から第7号まで及び第10号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長の指名する者がその職務を代行する。

(会議)

第5条 委員会は、委員の過半数の出席がなければ議事を開くことができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めたときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聴くことができる。

(事務)

第7条 委員会の事務は、学生支援部教育支援課において処理する。

(雑則)

第8条 この細則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則 (平成20年細則第3号)

- 1 この細則は平成20年4月1日から施行する。
- 2 大分大学生涯学習教育研究センター運営委員会規程(平成16年規程第135号)、大分大学高等教育開発センター運営委員会規程(平成17年規程第13号)及び大分大学公開講座専門委員会内規(平成16年4月1日制定)は廃止する。

(3) 大分大学高等教育開発センター紀要刊行規程

平成20年10月10日制定

(趣旨)

- 1 この規定は、大分大学生涯学習教育研究センター（以下「センター」という）紀要（以下「紀要」という）の編集および刊行等に関して、必要な事項を定めるものとする。

(紀要の内容)

- 2 紀要には、高等教育または生涯学習についての未発表の学術論文、研究ノート、報告、翻訳、資料等（実践報告を含む）を掲載するものとする。

(投稿資格)

- 3 投稿者は、投稿日において次の各号の一に該当していること。ただし、共著の場合には、筆頭著者が投稿資格を満たしていればよい。
 - (1) 本学教員
 - (2) 本センター客員研究員
 - (3) 本センターが依頼した人
 - (4) 本センター運営委員会が認めた人

(執筆要領)

- 4 投稿原稿に関する執筆要領については、別に定める。

(刊行)

- 5 紀要は原則として年1回発行するものとする。

(刊行費)

- 6 刊行費は、センター共通費で負担するものとする。ただし、次の各号については、執筆者の個人負担とする。
 - (1) 論文の刷り上がりページ数が20ページを超える場合
 - (2) 別刷が50部を超える場合

附 則

この規定は、平成20年10月10日から施行する。

(4) 大分大学高等教育開発センター紀要執筆要領

1) 投稿枚数

投稿原稿は、単独執筆または共同研究に関わらず、原則として一編につき刷り上がりで20ページ以内とする。刷り上がりで30ページ以内であれば受理するが、その場合には刊行費用について執筆者が応分の負担をするものとする。

投稿枚数は、題目、要旨、キーワード、図表、注、参考文献等を所定の枚数の中に含めて算定することとする。

2) 投稿申込および原稿提出の期限

投稿申込の期限は毎年12月28日とし、原稿提出の期限は毎年1月末日とする。なお、当該日が休日の場合、次の勤務日を期限とする。

3) 審査および掲載の可否

投稿された原稿は、センター運営委員会で掲載の可否について判断された上で紀要に掲載されるものとする。場合に応じて、加筆、修正、削除を求めることがある。

4) 原稿の提出

原則として、原稿はワープロソフトを使用して作成し、プリントアウトしたもの(1部)とファイルを保存したメディアを提出する。

①プリントアウトは以下の書式で作成する。

- ・用紙はA4縦とする。
- ・ページレイアウトは横書きとし、上30mm、左右20mm、下20mmの余白をとる。
- ・1ページあたり、40字×40行とする。
- ・カラー印刷を希望する場合、その旨を明記する。

5) 参考文献

参考文献は原稿末尾に掲載する。雑誌の場合、著者・文献名・巻・号・出版年月・ページを、単行書の場合には、著者・書籍名・出版社・出版年・ページを記入する。

6) 校正

校正は一枚を原則とし、必要最低限の訂正、修正に留めるものとする。

7) 別刷

別刷は原則として50部とする。50部を超える別刷を希望する場合には、執筆者が刊行費用について応分の負担をするものとする。

2. 高等教育開発センター運営委員会名簿

委員長	山下 茂	高等教育開発センター長（教育福祉科学部）
委員	岡田 正彦	高等教育開発センター次長（大学開放推進部門長）
委員	中川 忠宣	高等教育開発センター専任教員（生涯学習支援システム部門長）
委員	牧野 治敏	高等教育開発センター専任教員（FD・授業評価部門長）
委員	末本 哲雄	高等教育開発センター専任教員（メディア・IT活用部門長）
委員	麻生 和江	教育福祉科学部
委員	高山 英男	経済学部
委員	北野 敬明	医学部
委員	前田 寛	工学部
委員	吉田 和幸	学術情報拠点運営会議
委員	氏家 誠司	地域共同研究センター運営委員会
委員	石川 幸秀	研究・社会連携部長
委員	清水 博人	学生支援部長

新規授業・カリキュラム開発部門

部門長	山下 茂	高等教育開発センター長（教育福祉科学部）（部門長）
センター員	岡田 正彦	高等教育開発センター次長（大学開放推進部門長）

メディア・IT活用部門

部門長	末本 哲雄	高等教育開発センター専任教員（部門長）
センター員	鄭 娥敬	教育福祉科学部
センター員	藤井 弘也	教育福祉科学部
センター員	藤村 賢訓	経済学部
センター員	井上 亮	医学部
センター員	高坂 拓司	工学部
センター員	吉田 和幸	学術情報拠点

FD・授業評価部門

部門長	牧野 治敏	高等教育開発センター専任教員（部門長）
センター員	末本 哲雄	高等教育開発センター専任教員
センター員	金子 光茂	教育福祉科学部
センター員	市原 宏一	経済学部
センター員	松岡 輝美	経済学部
センター員	横井 功	医学部
センター員	金澤 誠司	工学部

大学開放推進部門及び生涯学習支援システム部門

部門長	岡田 正彦	高等教育開発センター次長（大学開放推進部門長）
部門長	中川 忠宣	高等教育開発センター専任教員（生涯学習支援システム部門長）
センター員	山崎 清男	教育福祉科学部
センター員	藤原 耕作	教育福祉科学部
センター員	仲本 大輔	経済学部
センター員	藤木 稔	医学部
センター員	富来 礼次	工学部

平成 23 年度

大分大学高等教育開発センター報告書

発 行 平成 24 年 4 月

編 集 大分大学高等教育開発センター

〒870-1192 大分市大字旦野原 700 番地

Tel/Fax(097)554-8509

<http://www.he.oita-u.ac.jp/>